

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.21

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies : Aspects of Kou style knife-shaped stone tool in Kanagawa Prefecture	1
Project Team for Jōmon Period Studies : Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (Ⅷ) : An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouchi-Type Pottery Period, Part7	11
Project Team Yayoi Period Studies : The Corpus of Yayoi pottery-Coffin in Kanagawa Prefecture (5)	27
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (13) : A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	39
Project Team for Nara-Heian Period Studies : Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture : The Corpus of iron manufacturing artifacts (6)	49
Project Team for Medieval Age Studies : in Kanagawa Prefecture (1)	61
Project Team for Early Modern Age Studies : The Corpus of Structural remains of the road in the Early Modern Age (1)	73

March, 2016

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan

研究紀要
21

かながわの考古学

二〇一六

公益財団法人
かながわ考古学財団

かながわの考古学

2016.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2016.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

この研究紀要は、1990（平成2）年11月に神奈川県立埋蔵文化財センターによって刊行された『かながわの考古学』第1集から受け継がれてきたものです。

その『かながわの考古学』は、1995（平成7）年11月刊行の第5号で終刊となりましたが、1996（平成8）年3月には神奈川県立埋蔵文化財センターと財団法人かながわ考古学財団とによって新たに研究紀要1『かながわの考古学』を刊行しました。二つの機関による刊行は県立埋蔵文化財センターが教育機関として幕を閉じた1999（平成11）年3月の研究紀要4まで続き、研究紀要5からは財団法人かながわ考古学財団が刊行することになりました。

さらに当財団が財団法人から公益財団法人に移行し、2012（平成24）年の研究紀要17からは公益財団法人かながわ考古学財団として刊行を続けています。

神奈川県の組織改編や当財団の変遷にかかわらず、『かながわの考古学』は神奈川県内の考古学に関する資料を各時代の研究プロジェクトがさまざまな形で提供しております。

今号から中世研究プロジェクト、近世研究プロジェクトは、遺構、地域という視点でそれぞれ新たなテーマに取り組むことにしました。

資料の集成、呈示とその分析という姿勢を今後も保っていきたいと考えていますので、皆さまのご高評、ご批判をお待ちしております。

2016（平成28）年3月

公益財団法人かながわ考古学財団

目 次

神奈川県における国府系ナイフ形石器の様相

旧石器時代研究プロジェクトチーム 1

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅶ

ー後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その7ー

縄文時代研究プロジェクトチーム 11

神奈川県内出土の弥生時代土器棺(5) ー弥生時代中期後葉から古墳時代前期(その4)ー

弥生時代研究プロジェクトチーム 27

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(13) ー通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介ー

古墳時代研究プロジェクトチーム 39

神奈川県における古代の鉄(6) ー生産関連遺構・遺物の集成ー

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム 49

神奈川県の県央地域の中世遺跡(1)

中世研究プロジェクトチーム 61

近世道状遺構の集成(1)

近世研究プロジェクトチーム 73

例 言

1. 本書は、公益財団法人かながわ考古学財団の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに共同研究を行った結果を掲載するものである。

2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである。

(五十音順・◎はプロジェクトリーダー、○はサブリーダーを示す)

・旧石器時代研究プロジェクトチーム

井関文明・大塚健一・絹川一徳・○栗原伸好・鈴木次郎・砂田佳弘・品中俊明・三瓶裕司・

◎脇 幸生

・縄文時代研究プロジェクトチーム

阿部友寿・天野賢一・井辺一徳・◎岡 稔・○小川岳人・粕谷 隆・野坂知広・村松 篤

・弥生時代研究プロジェクトチーム

後川恵太郎・◎飯塚美保・池田 治・穴戸信悟・新開基史・戸羽康一・○渡辺 外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

◎植山英史・○柏木善治・岸本泰緒子・長澤保崇・新山保和・吉澤 健

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

○加藤久美・川嶋実佳子・◎相良英樹・諏訪間直子・高橋 香・中田 英・西田真由子・宮井 香

・中世研究プロジェクトチーム

菊川英政・◎松葉 崇・○宮坂淳一・山口正紀

・近世研究プロジェクトチーム

◎木村吉行・眞鍋早紀・○南出俊彦

神奈川県における国府系ナイフ形石器の様相

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、これまで「石器群の諸問題」、「遺跡間接合」、「遺構」をテーマとして資料集成・検討を行い、成果を示した。昨年度で2007年から継続していた「遺物分布」のテーマが一区切りとなったため新たなテーマを設定した。今年度のテーマ設定の契機は、瀬戸内技法を研究されている絹川一徳氏（公益財団法人大阪市博物館協会）が当財団に Outreach されたことに起因する。

国府型ナイフ形石器は、「瀬戸内技法」と呼ばれる盤状石核の幅いっばいに規格的な横長剥片（翼状剥片）を剥離する技術によって製作されたナイフ形石器である。この瀬戸内技法とナイフ形石器製作が強く結びついた資料を「国府石器群」と呼ぶ。これらとは別に技術・型式的な系統関係を持つ資料群を「国府系石器群」と呼ぶ。神奈川県内では、国府型ナイフ形石器は出土するものの、瀬戸内技法との結びつきは判っておらず、資料群としては、「国府系」に属する。よって、表題は「国府型」ではなく「国府系」を用いた。（脇）

1. かながわにおける国府系ナイフ形石器の発見

国府系ナイフ形石器の東日本への波及については、1968・69年に山形県越中山K遺跡（加藤 1975、加藤・鈴木 1976）と新潟県御淵上遺跡（中村 1971）で国府型ナイフ形石器が発見され、東北地方の日本海側に波及していたことが明らかとなった。一方、関東地方では、1970年に発掘調査が行われた東京都野川遺跡の第IV4文化層で「Backed blade のなかには瀬戸内地方の国府型に似て背部加工が厚く、一辺のみ刃潰しを施す類が特徴的に存在する。」と報告され（小林・小田他 1971）、国府型ナイフ形石器そのものは存在しないものの、野川IV4文化層の時期が国府型ナイフ形石器の時期に相当すると認識された（白石 1976他）。そして、1977年には埼玉県殿山遺跡から関東地方で最初の国府系ナイフ形石器が確認され（松井 1980）、その後の調査で、国府系ナイフ形石器とともにその素材の剥片剥離技術を示す石器群が発見された。

相模野台地では、1968年の大和市月見野遺跡群の発掘調査以降旧石器時代遺跡の調査が多数行われてきたが、1981・82年に、相模原市橋本遺跡第IV文化層・同第V文化層（金山・土井・武藤 1984）と海老名市柏ヶ谷長ツサ遺跡第IX文化層（中村・諏訪間・堤他 1983、堤・諏訪間他 1997）から相次いで国府系ナイフ形石器が発見された。このうち柏ヶ谷長ツサ遺跡の国府系ナイフ形石器は、1982年11月に開催された神奈川県考古学同人会主催の第2回目のシンポジウムにおいて、B2層各文化層の豊富な石器群とともにいち早く資料化され、埼玉県殿山遺跡の資料とともに、石材や剥片剥離技術を含め瀬戸内技法との関係や国府型ナイフ形石器の系統などが議論された（神奈川県考古学同人会編 1982・1983）。その後、1987・90年には綾瀬市上土棚遺跡で複数の国府系ナイフ形石器とその素材剥片を作出した石核などが発見され（矢島 1996）、1990年代以降になると、綾瀬市吉岡遺跡群C区（白石 1997）、海老名市大松原東遺跡（織笠 1998）、平塚市原口遺跡（島中他 2002）、藤沢市用田南原遺跡（栗原 2004）からそれぞれ国府系ナイフ形石器が発見された。

（鈴木）

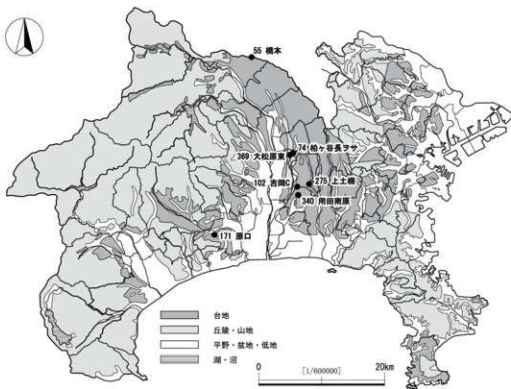
2. かながわの「国府系ナイフ形石器」資料

かながわで出土した「国府系ナイフ形石器」と推察されている資料を抽出した。抽出の基準は「石核の底面が識別される横長剥片を素材とするナイフ形石器」である。

結果、7遺跡（11文化層）から当該石器21点を抽出した。遺跡の位置は第1図に示し、当該石器が出土した遺物集中の詳細を第1表に記した。また各石器について第2図に示し、計測値等を第2表に記した。

当該石器の出土傾向として、ブロック内からの出土でも、単独で出土するものが大半である。ただし上土棚遺跡ではナイフ形石器や関連資料と考えられる石核が複数点出土しているが、それらの分布状況などの詳細は不明である。

（畠中・三瓶・大塚）



第1図 国府系ナイフ形石器出土遺跡

第1表 国府系ナイフ形石器出土石器集中の遺物分布

No.	遺跡名	報告書掲載番号	出土層位	文化層	各集中No.	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考
55	橋本	第122図 4-23・190	B2U	IV	-	-	173	-	散漫	ナ9、スク10、磯5、 F127、Ch11、核11	黒156、珪7、粘3、硬砂 2、玄1、その他4	磯群13 炭化物集 中2
55	橋本	第125図 4-12・809	B2L~ L3	V	-	-	-	-	-	ナ、接・削、磯器、 核	黒、珪、玄、硬砂、磯 岩	炭化物集 中6
74	柏ヶ谷 長ツサ	第196図 241	B2LM	IX	9	径8.0	181	3.60	散漫	ナ7、角1、削1、核1、 RF1、UF6、戴1、磨2、 F146、Ch3、核10	黒92、ガ黒安40、硬細 礫45、珪質2、不明2	磯群71~ 76 配石27・ 28
74	柏ヶ谷 長ツサ	第212図 344	B2LM	IX	12	16.0 ×8.0	179	1.40	散漫	ナ8、削3、RF1、UF1、 戴1、F155、Ch1、核9	黒35、ガ黒安96、ホ14、 硬細礫33、中礫1	磯群58~ 65 配石24・ 25
74	柏ヶ谷 長ツサ	第229図 437	B2LM	IX	18	径8.0	75	1.49	散漫	ナ1、削2、核1、RF1、 UF1、磨9、F57、Ch1、 核2	黒21、ガ黒安14、ホ2、 チ1、硬細礫27、珪質岩 1、不明9	磯群101 配石37~ 41

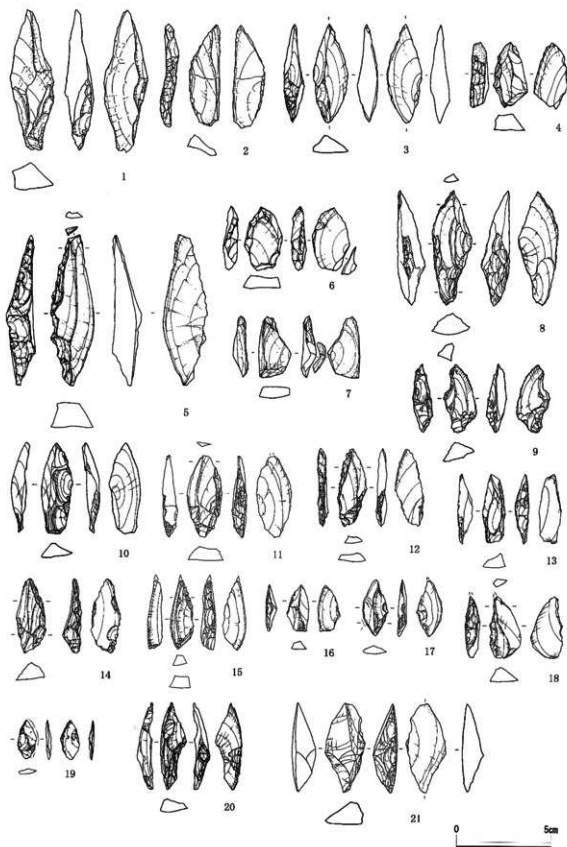
神奈川県における国府系ナイフ形石器の様相

No.	遺跡名	報告書掲載番号	出土層位	文化層	各集No.	分布範囲(m)	石器点数	分布密度	分布状態	器種組成	石材組成	備考
74	柏ヶ谷長ツサ	第253図1	R2LL	X	1	17.0 × 11.0	84	0.45	散発	ナ2、角1、削1、掻2、RF2、F64、Ch3、核3	黒、ガ黒安、硬細凝、中凝	磯群12～17 配石10
74	柏ヶ谷長ツサ	第287図10	R3LL	X II	2	径8.0	30	0.59	散発	ナ4、削1、RF1、載2、F17、Ch4、核1	黒15、ガ黒安10、硬細凝5	磯群3～6 配石3
102	吉岡C区	第161図1	R2	-	27	11.0 × 8.5	166	1.78	-	ナ3、切11、角2、削3、掻4、載2、RF4、UF1、F45、Ch54、核8、叩1、磨28	ガ黒安4、ホ11、黒105、硬細凝16、中凝1、安29	
171	原口	第310図2 第312図21	R2	II	1	4.0 × 2.6	66	6.30	やや散発	ナ1、角1、掻1、RF1、核1、F型61	黒43、ガ黒安15、硬細凝8	
275	上土棚	第139図43	R2LU	IV	-	-	-	-	-	ナ、削、磨	黒、珪、凝	
275	上土棚	第142図57～60 第145図82 第146図87・89	R2LU	III・IV	-	30超	-	-	濃密	角、ナ、掻、削、核、F	凝、黒、珪	
275	上土棚	第153図114	R2LM	V	-	-	-	-	-	ナ、磨	黒、安	
340	用田南原	第232図6	R2U～R2L1	VI	1	8.1 × 4.2	649	19.07	密集	角4、ナ6、削6、掻1、F188、Ch86、核3、載1、磨1、磨349	黒278、砂4121、中凝112、硬細凝32、ホ20、流20、細凝19、凹11、粗凝9、角凹7、細安6、ナ4、細凝(玄)2、ガ黒安3、底1、安1、細底1、不明2	磯群1基
369	大松原東	第141図1	R2M	II	-	-	38	-	-	ナ1、スク2、彫1、UF切断F4、切断F17、両極F3、F7、Ch1、核1、両極核1	黒26、ガ黒安6、硬細凝6	断面抜き取り

第2表 神奈川県内遺跡出土の国府系ナイフ形石器属性一覧

掲載 番号	No.	遺跡名	器 種	石 材	法量 (* - cm・g 残存 ())					報告書 掲載番号	文 献 名
					底角	長さ	幅	厚さ	重量		
1	55	橋本Ⅳ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	54	7.4	2.3	1.5	17.3	第122図 4-23・190	橋本遺跡調査団 編 1984
2	55	橋本Ⅴ	ナイフ形石器	珪石	55	5.4	1.5	1.1	6.4	第125図 4-12・809	
3	74	柏ヶ谷長ツサⅩ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	40	5.3	1.9	1.1	6.7	第196図241	中村・諏訪岡・ 堤他 1997
4	74	柏ヶ谷長ツサⅩ	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	51	3.7	1.9	1.1	6.7	第212図344	
5	74	柏ヶ谷長ツサⅩ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	58 (8.0)	2.3	1.6	23.4	第229図437		
6	74	柏ヶ谷長ツサⅩ	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	78	3.3	2.0	0.7	5.2	第253図1	
7	74	柏ヶ谷長ツサⅩⅡ	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	64	3.1	1.6	0.7	3.5	第287図10	島中他 2002
8	171	原口Ⅱ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	43	6.1	2.2	1.6	14.1	第310図22	
9	171	原口Ⅱ	ナイフ形石器	柏峠系黒曜石	50	3.6	1.8	1.0	4.4	第312図21	
10	102	吉岡C区 B2	ナイフ形石器	中粒凝灰岩	42	4.6	1.5	1.6	4.7	第161図1	
11	275	上土棚Ⅳ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	56 (4.3)	1.8	0.8	-	-	第139図43	白石他 1996
12	275	上土棚Ⅲ・Ⅳ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	47	4.2	1.6	0.6	-	第142図57	
13	275	上土棚Ⅲ・Ⅳ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	56	3.6	1.2	0.7	-	第142図58	
14	275	上土棚Ⅲ・Ⅳ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	46	4.0	1.6	1.0	-	第142図59	
15	275	上土棚Ⅲ・Ⅳ	ナイフ形石器	安山岩	70 (3.6)	1.1	0.8	-	-	第142図60	綾瀬市編 1996
16	275	上土棚Ⅲ・Ⅳ	ナイフ形石器	珪岩	44	2.4	1.2	0.6	-	第145図82	
17	275	上土棚Ⅲ・Ⅳ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	31 (2.9)	1.4	0.5	-	-	第146図87	
18	275	上土棚Ⅲ・Ⅳ	ナイフ形石器	硬質細粒凝灰岩	46 (3.3)	1.7	0.8	-	-	第146図89	
19	275	上土棚Ⅲ・Ⅳ	ナイフ形石器	黒曜石	27	2.1	1.1	0.3	-	第153図114	栗原他 2004
20	340	用田南原Ⅵ	ナイフ形石器	柏峠系黒曜石	60	4.6	1.4	0.8	3.1	第232図6	
21	369	大松原東Ⅱ	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	40	4.8	2.2	1.2	-	第141図1	

※本表は井関2009の第1・2表を改変し、新たな資料を追加した。なお表中では石核底面と主要剥離面で構成される刃部角を「底角」と省略。
※1の石材名は、報告中黒曜石であるが、本表作成時に相模原市教育委員会へ確認し硬質細粒凝灰岩に変更して記載している。



第2図 神奈川県内の国府系ナイフ形石器 [1/2] (報告書掲載図を一部改変)

3. かながわの国府系ナイフ形石器の形態と型式

国府系ナイフ形石器は形態を型式に、型式を系統に優先しないで論じることとする。というのは国府系ナイフ形石器については、系統観が前提であり、形態の認識自体が研究史的にあるいは研究者間で定まっているとは考え難い等の理由からである。従ってここではかながわの国府系ナイフ形石器から国府型ナイフ形石器、国府型ナイフ形石器からその形態という脈絡で論ずることとする。

日本列島における旧石器時代のナイフ形石器文化の示準石器とされるナイフ形石器は素材用剥片の鋭い縁辺を一部に残し、それ以外の器体に一連の刃潰しによる二次加工を施した石器で、縦長剥片の基部（打面部）側を加工する杉久保系、縦長剥片の両側縁を加工する茂呂系、横長剥片の基部側を加工する国府系等、石器作りの方法に技術系統の差があり、このうちの国府系ナイフ形石器は日本列島外には出現地を求めにくいことから、その出現経緯には日本列島独自の個性をもつ旧石器時代文化形成の一つの要因があると指摘されている。

国府系ナイフ形石器は、始良Tn（AT）火山灰降灰以降の西日本における近畿（西部）・瀬戸内（中央部）地方を主要な分布域（特に瀬戸内海東部地域の分布が濃密）とするが、大阪府藤井寺市国府遺跡を示準遺跡として型式設定された国府型ナイフ形石器は「瀬戸内技法」と呼ばれる一連の盤状（剥片）石核（第一工程）～翼状（横長）剥片（第二工程）を経過し、その後仕上げられる（第三工程）。主要な分布域の瀬戸内技法で作られた国府型ナイフ形石器を示準とする石器群は国府系石器群とされ、主要な分布域以外の瀬戸内技法のバリエーションかそれ以外の技法で作られた国府系ナイフ形石器を示準とする石器群は「国府系石器群」と一般的には区別される傾向にある。

かながわは国府系ナイフ形石器における主要な分布域の外に位置することによりそこで見出される瀬戸内技法で作られるかもしれないと推定される国府型ナイフ形石器も国府系ナイフ形石器と呼称されることが型式的な意味においては妥当であると言えよう。しかしこの妥当性はサヌカイト製の国府系ナイフ形石器がかながわでは未発見という事情にもよろう。現時点でも近畿・瀬戸内地方を中心とした場合、そこから島状に外れる南関東地方に位置するかながわの国府系ナイフ形石器は石器作りにおいて、直接的ではなく派生的な技術的影響を受けた可能性を抜きに型式性は論じられない。このことが日本列島全体の数量比較におけるかながわのあり方の一端を指摘できよう。また、かながわの国府系ナイフ形石器は南関東だけに限った数量比較においても型式的に中心的な存在ではないこともすでに知られている。今日、かながわの国府系ナイフ形石器は相模野Ⅲ期（段階Ⅴ）を中心に編年的な存在が確認されている。

以上、かながわの国府系ナイフ形石器における系統性と型式性についてその概念を論じた。以下はその形態性について論じる。国府系ナイフ形石器の形態を一言で説明すると石核の底面が識別される横長剥片を素材とするナイフ形石器となるが、更にシンプルに言い換えれば「有底横長剥片」素材（絹川 2011）のナイフ形石器となる。とはいえそこには技法と一体となった型式性や他の系統のナイフ形石器との差異から抽出される系統性において見出される特徴はない。しかしながら現時点のかながわでは「瀬戸内技法」の接合資料が存在しない以上、元の素材用剥片全体の形状や石器作りの技法まで含めて国府系ナイフ形石器の形態を論じることは困難である。

（井関）

4. かながわからみた瀬戸内技法の起源について

「瀬戸内技法における「盤状剥片」が翼状剥片剥離工程内において、最も重要な位置にある」（砂田 1986 23頁）とし、南関東における盤状剥片石核の抽出とその系譜を論じたことがある。その時点での相模野におけるX層～VII層段階ではB3層主体の橋本遺跡出土資料に限られた（砂田前掲書）。今回、その後報告された相模野と周辺地域の事例を垣間見るとともに、現状と展望を試みたい。

瀬戸内技法生起の地とされる近畿・中四国における国府石器群は「南関東のIX層上部～VII層期に相当する」時期がその萌芽であり、「瀬戸内技法の原形となる横長剥片を素材とした一側縁加工の小型のナイフ形石器」の出現（三好 2014 96頁）にとどまる。「サヌカイト」・「有底横長剥片」・「一側縁加工ナイフ形石器」という瀬戸内技法「骨太の原則」（網川 2011 70頁）の三拍子が揃うのは、その後V層段階を待つこととなる。かつて、南関東X層からの盤状剥片石核を抽出したが（砂田前掲書）、「石器群の主体的な技術基盤となることや特定の石器の製作と結びつくことはなかった」（麻柄 2011 6頁）と論評されている。

その後蓄積されたX層段階の資料に目を向けると、熊本県石の本遺跡群出土の安山岩製台形礫石器・二次加工剥片・盤状剥片素材の石核（池田 1999 26・49・107頁）、同県沈目遺跡出土の輝緑凝灰岩製の鋸歯状の削器・挟入石器（木崎 2002 23・26・29頁）にその痕跡を観ることができる。下総では、千葉県草刈遺跡C地区第1文化層「X層下部とXI層の境界」（島立編 2004 11頁）から径3mの範囲から28点の小形の寸詰まりあるいは横長剥片が出土している。中でも使用痕を有する剥片とされた珪質頁岩製の横長剥片は有底横長剥片に共通する。また、VII層～IX層上部の第4文化層C17-Aブロック出土流紋岩製の母岩④個体4は大型盤状剥片裏面を剥片剥離作業面として横長寸詰まり剥片を剥離している（島立編前掲書157頁）。同県墨古沢南1遺跡第1文化層IXc層上部第10ブロック出土のガラス質黒色安山岩製の二次加工のある剥片（新田 2005 81頁）、IXc層上部～IXa層下部第22ブロック出土のガラス質黒色安山岩製の石核（同124頁）、IXa層下部第40ブロック出土のガラス質黒色安山岩製の石核（同211頁）、IXa層下部第41ブロック出土のガラス質黒色安山岩製の楔形石器、さらに有底横長剥片素材の台形礫石器（同214頁）などは瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器を彷彿とさせる。武蔵野では東京都野水遺跡第1地点VII層下部の第3文化層出土の黒曜石製有底横長剥片素材の加工痕を有する剥片・石核（調布市遺跡調査会編 2006 84・88頁）が出土している。

相模野では神奈川県吉岡遺跡群A区BB4層上部のガラス質黒色安山岩製の有底横長剥片を素材とするナイフ形石器（砂田 1996 55頁）、B区BB4層上部のガラス質黒色安山岩製の残核（同105頁）、相模川以西では同県津久井城跡馬込地区BB4層第6文化層の母岩HFT03、HFT04、HFT07-3・327、HFT3914、SSh02-2・3の接合資料（島中編 2010 414-415頁 図版150-155・169・193・212）に剥片素材の石核から横長剥片を剥離している。HFT04の剥片打面直下の状態から母岩の硬さと同程度、硬い、柔らかい、ハンマー素材の違いを推察させる。

「骨太の原則」に則る瀬戸内技法の発生前の管見による列島内X層段階周辺以降の横長剥片剥離工程内、瀬戸内技法あるいは国府系石器群の剥片剥離工程の指針を既に包含していたこととなろう。サヌカイト類似の火成岩系石材の層理とその特質を反映した石器製作工程全般の中で、他の堆積岩系石材にも横長剥片剥離工程の種類の拡大が見えてくる。

瀬戸内技法の拡散要因とその方法は「直接的移動・移住」「情報の受容」（森先 2011 76頁）といった物質文化伝播の基本的思考法が援用されよう。ただし、相似相同という比較検討を目的とする石器形態の感覚的類似性でなく、属性分析に基づく比較検討が必須である。すなわち石器製作工程内の過程にあって分析対象とする石器の客観的屬性の抽出が肝要であり、今後のさらなる資料体の抽出と分析を試みたい。（砂田）

5. 瀬戸内技法からみたかながわの国府系ナイフ形石器

(1) 国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法

国府型ナイフ形石器は翼状剥片を素材とする柳葉形を呈した中・大形のナイフ形石器である。翼状剥片の打面側を腹面側から整形剥離を行い、一側縁加工に仕上げたものが典型的であるが、刃縁側の基部にも整形剥離を施した二側縁加工のものも認められる。この石器の特徴は、素材である翼状剥片が瀬戸内技法によって生産されることである。瀬戸内技法とは、「翼状剥片石核の素材となる大形剥片の獲得（第1工程）にはじまり、それらを石核に転じて規格的な翼状剥片を量産し（第2工程）、最後に翼状剥片に整形剥離を施して国府型ナイフ形石器に仕上げる（第3工程）一連の工程」（松藤 2007）がシステムティックに行われたもので、ナイフ形石器の集中的な製作が行われた。翼状剥片を素材とした石核からその幅一杯に剥離して平坦な石核底面を取り込み、山形の打面縁の頂部を打点として直線的に後退させることで翼状剥片が規格的・連続的に剥離される。これにより小形ではない中・大形の国府型ナイフ形石器が「量産」されるのである。

一方、「量産」という前提がないなら、翼状剥片と同形の有底横長剥片は瀬戸内技法以外の横剥ぎ技術でも生産が可能である。実際、近畿・瀬戸内地方において、瀬戸内技法以外の横剥ぎ技術によって製作された国府型と同一あるいは類似のナイフ形石器は普遍的に存在する。こうした事情が、サヌカイト石器文化圏である近畿・瀬戸内地方以外の地域で出土した国府型ナイフ形石器の認定とそれを伴う石器群に対する評価を複雑にしてきた。

「国府石器群」（松藤 1985）は、瀬戸内技法を技術基盤とし、国府型ナイフ形石器、翼状剥片、翼状剥片石核などの各工程を示す石器遺物で組成される。古日本列島における瀬戸内技法の分布は近畿・瀬戸内地方を越えて、東日本では岐阜県日野遺跡、新潟県御瀬上遺跡、群馬県上白井西伊熊遺跡、山形県越中山遺跡K地点など広範な地域に及ぶ。これらの遺跡では国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法の各工程資料が主体的で国府石器群の要件を十分に満たすものである。

ただし、現在のところ東日本で瀬戸内技法の直接的な波及を示す石器群は、北陸から東北地方の日本海沿岸地域と北関東に限られている。南関東では、立川ロームV層上部～IV層下部の段階において横剥ぎ技術とともに角錐状石器や国府型あるいはそれに類似する有底横長剥片素材のナイフ形石器が認められるものの、瀬戸内技法そのものの存在はきわめて希薄である。

(2) 近畿・瀬戸内地方の横剥ぎ石器群と瀬戸内技法の成立

近畿地方では、兵庫県板井寺ヶ谷遺跡下位文化層（山口編 1991）や七日市遺跡IV文化層（山本編 2004）のサヌカイト石器群の存在から、A T降灰以前に横剥ぎのナイフ形石器が出現したことは明らかである。この段階では瀬戸内技法は認められないが、「サヌカイト」・「有底横長剥片」・「一側縁加工」という石器群を特徴づける3つの基本的な要件（骨太の原則）が成立する（相川 2011）。

A T降灰後、九州地方で剥片尖頭器や角錐状石器が出現したように、石器組成に大形の尖頭器が組み合わされるようになると、近畿・瀬戸内地方では、大形で反りが生じにくい有底横長剥片素材のサヌカイト製ナイフ形石器がその機能を代替した。つまり、瀬戸内技法の成立過程とは、ナイフ形石器の大形化を平坦な石核底面を取り込みながら石核幅一杯に翼状剥片を剥離することで対処した結果なのであり、適切な大きさの原石が調達可能な原産地遺跡などで集中的に量産することで、第1～3工程の一貫性・連続性を技法として顕在化させたのである。さらに、翼状剥片や完成したナイフ形石器を他所へ持ち出す「異所展開」（山口

1991)によって、遺跡間における石器組成の均衡が図られた。

近畿・瀬戸内地方において、A T降灰以降で瀬戸内技法の出現後に認められる横剃ぎ石器群には次の三つのグループがある。①国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法が主体の石器群、②国府型とともに多様な形態のナイフ形石器が有底横長剥片、縦長・短形剥片などの技術複合によって製作される石器群、③有底横長剥片を素材とする小形ナイフ形石器が横剃ぎを主体とする技術複合によって製作される石器群である。①は前述の「国府型石器」、③については大阪府長原遺跡89-37次(趙編 1996)や八尾南第6地点(山田編 1993)などの事例があり、瀬戸内技法の出現以前でA T降灰層準の石器群とみなす見解がある(森先 2010)。②の石器群は、横剃ぎ技術による有底横長剥片や石刃・石刃状剥片、短形剥片を素材とした一側縁・二側縁・切出形などの多様な形態のナイフ形石器が国府型ナイフ形石器に共伴する。事例として長原遺跡97-12 次の出土資料が知られる(絹川編 2000)。国府型ナイフ形石器は瀬戸内技法により製作されたものが含まれるが、それ以外の手法でも大形の国府型ナイフ形石器が製作されている(絹川編前掲 図129~131)。素材となった有底横長剥片(翼状剥片)は横剃ぎ石核の初期剥離の段階で得られたもので、その後には石核は横剃ぎから石刃剥離に転換しており、残核は石刃核である。こうした有底横長剥片と石刃、さらに短形剥片の剥離が混在した接合資料が複数認められる(絹川編前掲 図122・123)。つまり、瀬戸内技法による連続的な集中製作によらず、見合った石材が確保され、石核の大きさなどの条件が満たされた機会で単発的な翼状剥片剥離によって大形の国府型ナイフ形石器が製作されているのである。こうした国府型類似のナイフ形石器が瀬戸内技法以外の横剃ぎ技術によって製作された②のような石器群は、使用石材や技術要素の組み合わせに違いがあるものの、岡山県思原遺跡S文化層(稲田編 1996・2009)や島根県原田遺跡第5層石器群(伊藤編 2008)など中国山地や四国地方を含む西日本の広い範囲で認められる。これらの地域では瀬戸内技法が伴わない場合が多いが、近畿・瀬戸内地方では②の石器群の大半で瀬戸内技法が伴う。

A T降灰以前に成立した横剃ぎナイフ形石器の「骨太の原則」は、後期旧石器時代後半期へ至る段階において②の石器群のように多様な形態のナイフ形石器と横剃ぎを中心とした技術複合の中から中・大形の横剃ぎナイフ形石器を生産するようになり、さらに中・大形のナイフ形石器が独立的かつ集中製作される過程で異所展開による①の瀬戸内技法を主体とする石器群を並行させた。その後、③のように有底横長剥片素材の小形ナイフ形石器を生産する横剃ぎ技術主体の石器群へ収斂させていく過程をたどったものと思われる。

(3) かながわにおける国府系ナイフ形石器

以上のような観点から、既往の調査において神奈川県下から出土した有底横長剥片素材のナイフ形石器について概観しておきたい。

南関東では、かねてより立川ロームV層上部〜IV層下部の層準において厚手の横長剥片を素材とする鋸歯縁加工のナイフ形石器や角錐状石器を含む横剃ぎ技術による石器群の存在が知られており、埼玉県嵐山遺跡や神奈川県柏ヶ谷長ヲサ遺跡などで国府型ナイフ形石器が出土したことから、近畿・瀬戸内地方の当該石器群との関係が指摘されていた。この段階は、横長・短形剥片素材の切出形ナイフ形石器や石刃素材の基部加工のナイフ形石器など、多様な形態のナイフ形石器に角錐状石器や円形撚器が伴う。こうした様相は、前述した②の石器群のあり方に共通する。

典型的な国府型ナイフ形石器が出土した柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IX文化層例では、このナイフ形石器に瀬戸内技法関連資料が伴わない。しかし、硬質細粒凝灰岩やガラス質黒色安山岩を用いて石核底面を取り込んだ横

長剥片を素材とし鋸歯状の整形加工を施したナイフ形石器が複数認められ、同じ石材の剥片素材の横剥ぎ石核も出土している。上土棚遺跡第IV文化層でも硬質細粒凝灰岩製の国府型と有底横長素材のナイフ形石器が認められ、やはり剥片素材の横剥ぎ石核が出土している。いずれも瀬戸内技法のような明確な有底横長剥片の剥離技術の存在は指摘できないものの、これらのナイフ形石器は石核の形状や消耗の度合いより単発的な翼状剥片剥離を介在させるような手法で製作された可能性がある。石核消費により可変的な横剥ぎ技術が効率的に用いられることで、有底横長剥片を含めた多様な横剥ぎ石器群の素材が供給されたものとみられる。

(絹川)

6. おわりに

今回は、本プロジェクトに近畿地方で瀬戸内技法研究を行っている絹川一徳氏を迎え、「神奈川県における国府系ナイフ形石器の様相」と題して、本県内出土の国府系ナイフ形石器に焦点を当てた報告を行った。

国府石器群は、瀬戸内技法との強い関連性の上に成立し、近畿・瀬戸内地方を中心に展開されていることは周知の事実である。現在のところ、これ以外の地域への広がりは、北陸から東北地方の日本海沿岸地域と北関東に限られる。とりわけ、群馬県上白井西伊熊遺跡では、黒色安山岩などを用いた瀬戸内技法関連資料が多数出土しており、上記前提の強い結びつきが認められる。しかし、これらの要素は、砂田が指摘するように、既にA.T.降灰以前から各地で萌芽がみられる。その上で近畿・瀬戸内地方では「骨太の原則」が成立し、後期旧石器時代後半期に国府型ナイフ形石器が登場してくると絹川は指摘する。同時に国府石器群の成立は石材原産地と結びつくが、これに併行する存在として石材原産地以外の地域における非瀬戸内技法の横剥ぎ技術による国府型ナイフ形石器および国府系ナイフ形石器がある。今回はその共存資料の技術基盤を整理し、本県出土資料が後者の複数の技術基盤をもった石器群と関連して位置付けられる可能性を示唆した。

現在、本県内の「国府系ナイフ形石器」の出土例は7遺跡に留まるが、その存在は明らかである。今後も、時には今回の様に他地域の研究者の方の視点を踏まえ、本石器群の様相を探っていく必要があろう。

(栗原)

参考文献

- 池田朋生 1999『石の本遺跡群Ⅱ 第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』熊本県文化財調査報告178集 熊本県教育委員会
- 井関文明 2009『東日本の国府系ナイフ形石器(2)』『神奈川考古』第45号
- 伊藤 徳広編 2008『原田遺跡』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12 鳥根県教育委員会
- 稲田孝司編 1996『恩原2遺跡』岡山大学文学部考古学研究室
- 稲田孝司編 2009『恩原1遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 岩宿博物館編 2006『第42回企画展「岩宿時代はどこまで遡れるか」展示図録』
- 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会 2011『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』予稿集
- 海老名市編 1998『海老名市史1』資料編 原始・古代 海老名市
- 織笠 昭 1998『先土器時代 大松原東遺跡』『海老名市史1』資料編 原始・古代
- 加藤 稔 1975『越中山K遺跡』『日本の旧石器文化』2
- 加藤 稔・鈴木和夫 1976『越中山K遺跡の接合資料』『考古学研究』22-4
- 神奈川考古同人会編 1983『シンポジウム 南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題』『神奈川考古』16
- 金山喜昭・土井永好・武藤康弘 1984『橋本遺跡—先土器時代編—』相模原市橋本遺跡調査会
- 木嶋康弘 2002『旧石器時代の遺物』城南町文化財調査報告第12集沈目遺跡
- 絹川一徳編 2000『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ』(財)大阪市文化財協会
- 絹川一徳 2011『西日本における瀬戸内技法の展開』岩宿フォーラム2011/シンポジウム『上白井西伊熊遺跡と東日本

の瀬戸内技法」予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会

- 栗原伸好他 2004『用田南原遺跡』かながわ考古学財団調査報告168 財団法人かながわ考古学財団
- 小林達雄・小田静夫他 1971『野川先石器時代遺跡の研究』『第四紀研究』10-4
- 島田和高 2012『2012年度明治大学博物館特別展 氷河時代のヒト・環境・文化—THE ICE AGE WORLD—』
- 島立桂編 2004『千原古ニュータウンX—市原市草刈遺跡（東部地区旧石器時代）—』千葉県文化財センター調査報告第462集 財団法人千葉県文化財センター
- 白石浩之他 1997『吉岡遺跡群IV』かながわ考古学財団調査報告21 財団法人かながわ考古学財団
- 砂田佳弘 1986『盤状剥片石核の系譜—南関東先石器時代石器群における剥片剥離工程の模様—』『神奈川考古』第22号 神奈川考古同人会10周年記念論集 神奈川考古同人会
- 砂田佳弘 1996『遺構と遺物・まとめ』『吉岡遺跡群I』かながわ考古学財団調査報告6 財団法人かながわ考古学財団
- 調布市遺跡調査会編 2006『都立武蔵の森公園埋蔵文化財調査—野水遺跡第1地点—報告書』調布市遺跡調査会
- 趙竹済編 1996『長原・瓜破遺跡発掘調査報告IX』（財）大阪市文化財協会
- 中村喜代重・諏訪順朗・堤隆他 1983『先石器時代海老名市柏ヶ谷長ワサ遺跡発掘調査概要報告書』柏ヶ谷長ワサ遺跡調査団
- 中村孝三郎 1971『御瀬上遺跡』長岡市立科学博物館研究調査報告10
- 新田浩三 2005『東関東自動車道水戸線西々井PA埋蔵文化財調査報告書1—酒々井町墨谷沢南1遺跡—旧石器時代編』千葉県文化財センター調査報告第504集 財団法人千葉県文化財センター
- 橋本遺跡調査団編 1984『橋本遺跡VI 先石器時代編』相模原市橋本遺跡調査会
- 島中俊明他 2002『原口遺跡IV 旧石器時代』かながわ考古学財団調査報告135 財団法人かながわ考古学財団
- 島中俊明編 2010『津久井城跡馬込地区』かながわ考古学財団調査報告249 財団法人かながわ考古学財団
- 藤田健一 2011『南関東地方の横長剥片製ナイフ形石器』岩宿フォーラム2011/シンポジウム『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 麻栢一志 2011『瀬戸内技法と日本列島の石器文化』岩宿フォーラム2011/シンポジウム『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 松井政信 1980『埼玉県上尾市殿山遺跡出土の先石器時代資料』『石器研究』1
- 松藤和人 1985『瀬戸内技法・国府系石器群研究の現状と課題』『旧石器考古学』30 旧石器文化談話会
- 松藤和人 2007『瀬戸内技法』『旧石器考古学辞典<三訂版>』旧石器文化談話会編 学生社
- 三好元樹 2014『近畿・中四国における旧石器時代の年代と編年』『旧石器研究』10 日本旧石器学会
- 森先一貴 2010『旧石器社会の構造的変化と地域適応』六一書房
- 森先一貴 2011a『国府系石器群の多様性』『旧石器考古学』74
- 森先一貴 2011b『古本州島の地域文化と国府系石器群』岩宿フォーラム2011/シンポジウム『上白井西伊熊遺跡と東日本の瀬戸内技法』予稿集 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 矢島國雄 1996『先石器時代』『続瀬市史』9 別編 考古
- 山口卓也 1991『近畿地方における旧石器時代遺跡の立地—遺跡立地の差と地域性の発生について—』『関西大学考古学資料室紀要』第8号 関西大学文学部考古学資料室
- 山口卓也編 1991『坂井ヶ谷遺跡—旧石器時代の調査—』兵庫県文化財調査報告書第96-1冊 兵庫県教育委員会
- 山田隆一編 1993『八尾南遺跡Ⅲ—旧石器出土第6地点—』大阪府文化財調査報告書第44輯 大阪府教育委員会
- 山本誠編 2004『七市遺跡Ⅲ 旧石器時代の調査』兵庫県文化財調査報告書第272冊 兵庫県教育委員会

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

―後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その7―

縄文時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

縄文時代研究プロジェクトチームでは、平成21年度より後期前葉期堀之内式土器文化期の様相についての研究を行っており、今年度で7年次目を迎える。これまでに、報告書を中心とした文献収集、基礎的なデータベース作成、研究略史、主要遺跡地名表・参考文献の作成、編年案構築に向けた一括出土事例（層位的出土事例を含む）の検討、堀之内1式土器・堀之内2式土器の編年案作成、住居址検出遺跡を中心とした主要遺跡の分布図作成、堀之内1式土器編年案・堀之内2式土器編年案にもついた住居址のデーターシート作成、時期毎に主要な住居址形態を抽出した集成図作成等の研究活動を行ってきた。

今年度は、昨年度に作成した該期住居址のデーターシートから各段階の住居址数（遺跡の分布状況）、平面形態・張出部形態、平面規模、主柱穴配置・壁下構造・建替・拡張、炉址、埋甕、敷石・その他付帯施設等の諸要素を抽出し検討を行うこととした。なお、今回検討を行うにあたり対象とした各住居の帰属時期について再度報告書を確認し時期変更した住居址もあった。時期区分は、堀之内1式期（称名寺～堀之内、堀之内1式最終などを含む）、堀之内2式期（堀之内1式～堀之内2式、堀之内式最終末～加曾利B1式を含む）、後期前葉（後期、不明等含む）とした。また、住居軒数や建替・拡張その他諸要素については、各報告書の記載内容に従って住居址のデーターシートから抽出した。（図）

2. 遺跡の分布状況（第1図、第1表）

ここでは神奈川県内における後期前葉の主要な集落遺跡の分布を概観する。

第1図は、『研究紀要15・19』に掲載した「主要遺跡地名表」、「主要遺跡地名表（補遺）」をもとに、該期の主だった集落址を地形図にプロットしたものである。掲載した該期の176遺跡のうち堅穴住居址が発掘調査された遺跡は68遺跡である。市町村別に見ると、横浜市に所在する遺跡が23遺跡と卓越し、全体の1/3を占める。以下、相模原市所在が8遺跡、清川村所在が6遺跡、伊勢原市所在が5遺跡とつづく。県内では、これらの遺跡から337軒の堅穴住居址が調査されている。

多摩川・鶴見川水系に挟まれた区域には、多摩丘陵とその南東縁に派生した下末吉台地が展開している。かかる地域の遺跡密集度は極めて高く、28箇所の集落遺跡が確認され、確実なものだけでも、201軒の堅穴住居址が検出されている。また、帷子峯遺跡、華蔵台遺跡、川和向原遺跡、小丸遺跡、矢崎山西遺跡、華蔵台南遺跡、山田大塚遺跡で堅穴住居址が10軒以上発見され、この時期の規模の大きな集落が集中することも特筆され、該期の県内における中核的な地域といえよう。

相模川水系周辺では、20遺跡で61軒が見つかっていて、相模原市所在の田名塩田・西山遺跡、はじめ沢下遺跡などの左岸域に展開する相模野台地上に立地する数軒の堅穴住居址からなる遺跡を中心に分布する。中でも大山山麓に位置する下北原遺跡では、中期後葉から後期後半まで連続する大規模集落が見つかっており、

この地域の中心的集落として注目される。また、宮ヶ瀬ダム関連で調査された清川村に所在するナラサス遺跡や馬場遺跡などからも発見されており、丹沢山塊を取り巻く丘陵上にも遺跡が分布する。

平塚市・秦野市・伊勢原市を中心とする金目川水系周辺域では、11遺跡で47軒が見つかり、秦野市曾屋吹上遺跡、太岳院遺跡、伊勢原市子易・大坪遺跡などで、配石遺構を伴う集落が発見され注目される。また、伊勢原台地とその北縁に展開する上粕屋扇状地では、近年の大規模道路建設に伴い、新たな発見が続いており、今後その成果が注目される。

酒匂川水系周辺域は、これまでの調査例は少ないが、周辺の森戸川流域の小田原市曾我谷津岩本遺跡などで敷石住居址から構成される遺跡が見つかり注目される。今後、早川流域の御組長屋遺跡などとともに、箱根山地東縁に展開する丘陵を中心とする一帯が、県西部における中核地の1つになる可能性も十分あろう。

上述のごとく、該期の集落遺跡の分布状況は、これまでは多摩川・鶴見川水系・相模川水系を中心とした県北東部における集中的な分布が看取されてきたが、今後は、相模川水系や金目川水系を中心とした丹沢山塊東縁から南縁部における山地から丘陵、台地に見られる特色のある遺跡の分布にも注視していくことが必要であろう。(村松)

第1表 神奈川県内の後期前葉の住居址の動向（％は水系別の推移）

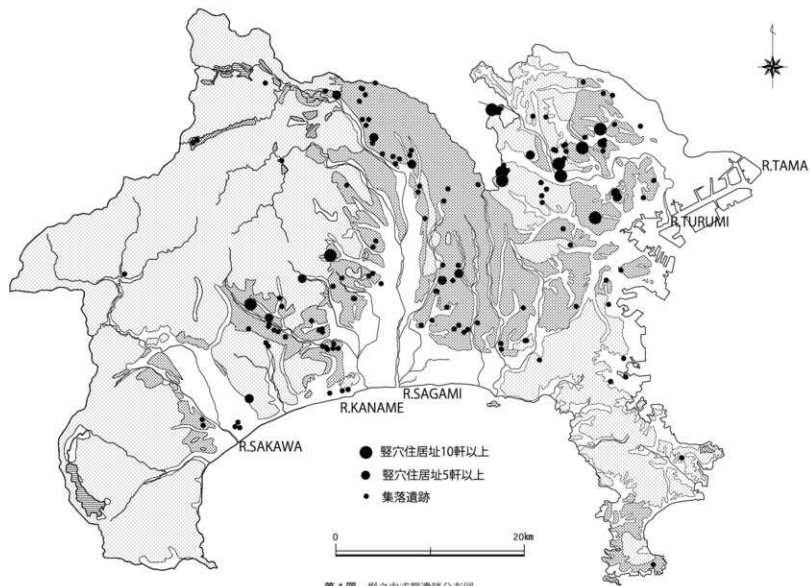
(単位:軒)

	多摩川・鶴見川水系	相模川水系	金目川水系	酒匂川水系	その他	合 計
堀之内1式	109	46	18	2	9	184
堀之内2式	68	12	9	1	8	98
後期前葉	24	4	22	0	5	55
合計	201 (60%)	62 (18%)	49 (14.5%)	3 (1%)	22 (6.5%)	337 (100%)

3. 平面形態・張出部形態（第2・3図、第2・3表）

ここでは、堀之内1式の住居址337軒における主体部平面形態および張出部形態の形態分類（類型化）とその時期的・地域的分布について分析する。まず主体部平面形態について見てみると、円形・楕円形（円形基調、A類型）145軒、方形・隅丸方形（方形基調、B類型）16軒、柄鏡形（C類型）129基、不明・その他47基となり、円形基調および柄鏡形住居が主体を占めることが分かる。ただし、円形基調および方形基調の住居址は、報告書に掲載された実際の平面図を見てみると、柄鏡形住居が含まれている場合も少なくないため、今回は詳細な分析対象からは外している。ここでは、主体部平面形態と張出部形態の組み合わせを把握しやすい柄鏡形住居を中心に検討した。

柄鏡形住居は主体部平面形態で3類（円形基調、方形基調、不明・その他）に分類し、さらに張出部形態で4類（方形・半円形基調、ハの字に開く形態・180度に開く形態、不明・その他）に分類し、それらの組み合わせで6類型（C-1～C-6類）に細別した。なお、形態分類の基準は、前年度に刊行された『研究紀要』20を参考にしているが、報告書の記載だけでは判断できないものがあまりに多く、筆者が実際に図面を見て、柱穴配置をベースに主観的・感覚的に分類した。特に、円形基調・方形基調の判断や、張出部形態におけるハの字・180度に開くなどの分別は曖昧な部分が大きい。



第1図 堀之内式期遺跡分布図

柄鏡形住居129軒のうち、不明・その他を除いて類型化できたものは87軒であった。C-1類（主体部円形＋張出部方形・半円形）35軒、C-2類（主体部円形＋張出部ハの字）15軒、C-3類（主体部円形＋張出部180度）11軒、C-4類（主体部方形＋張出部方形・半円形）4軒、C-5類（主体部方形＋張出部ハの字）6軒、C-6類（主体部方形＋張出部180度）16軒となる。堀之内式期の竪穴住居址は、柄鏡形住居を含め基本的には円形基調が主体であり、方形基調は少数派である。張出部形態のみで見ると、堀之内式期以前からの伝統を引く方形・半円形基調のものが最も多く、次いで180度に開く形態が多い。

次に時期的分布についてまとめると（第2表参照）、円形・楕円形（円形基調）の住居址は145軒のうち堀之内1式期85軒、堀之内2式期31軒、不明（堀之内1式～2式等）29軒となり、方形・隅丸方形（方形基調）の住居址は16軒のうち、堀之内1式期9軒、堀之内2式期4軒、不明3軒となる。柄鏡形住居で見てもC-1類では36軒のうち堀之内1式期25軒、堀之内2式期8軒、不明3軒、C-2類では15軒のうち堀之内1式期12軒、堀之内2式期2軒、不明1軒、C-3類では11軒のうち堀之内1式期8軒、堀之内2式期1軒、不明2軒、C-4類は4軒すべてが堀之内1式期、C-5類は6軒のうち堀之内1式期3軒、堀之内2式期3軒、C-6類では16軒のうち堀之内1式期5軒、堀之内2式期9軒、不明2軒となり、基本的には堀之内1式期が主体である。ただし、C-6類では絶対数が少ないが、堀之内2式期が最も多く、柄鏡形住居全体で見ても、主体部方形基調の36軒のうち、堀之内1式期は12軒、堀之内2式期12軒と拮抗するようになる。また、張出部形態でも180度に開く形態になるにつれて堀之内2式期の住居が増えていくように見える。判然とはしないが、柄鏡形住居の主体部は円形基調から方形基調へ、張出部は方形・半円形から180度に開く形態へと漸移的に変遷していることが窺える。

さらに地域的分布についてまとめると（第3表参照）、多摩川・鶴見川水系が他を圧倒しているが、C-1類型およびC-4類型では相模川水系が最も多く、これは張出部形態（方形・半円形基調）の地域性を反映していると考えられる。同様に、C-3類型およびC-6類型は多摩川・鶴見川水系（特に横浜市区）で占められており、張出部形態（180度に開く形態）によって地域性が窺える結果となった。（野坂）

第2表 住居類型の時期的分布

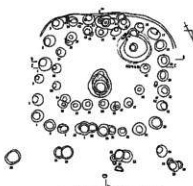
時期別	A類型	B類型	C-1 類型	C-2 類型	C-3 類型	C-4 類型	C-5 類型	C-6 類型	不明・ その他	合計
堀之内1式	85	9	25	12	8	4	3	5	33	184
堀之内2式	31	4	8	2	1	0	3	9	40	98
後期前葉	29	3	3	1	2	0	0	2	15	55
合計	145	16	36	15	11	4	6	16	88	337

第3表 住居類型の地域的分布

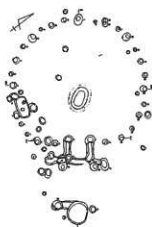
地域別	A類型	B類型	C-1 類型	C-2 類型	C-3 類型	C-4 類型	C-5 類型	C-6 類型	不明・ その他	合計
多摩川・鶴 見川水系	99	8	10	9	11	1	4	13	46	201
相模川水系	12	2	17	2	0	3	1	3	22	62
金目川水系	22	5	5	2	0	0	1	0	14	49
酒匂川水系	2	0	1	0	0	0	0	0	0	3
その他	10	1	3	2	0	0	0	0	6	22
合計	145	16	36	15	11	4	6	16	88	337



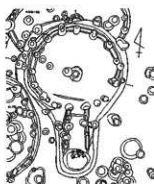
1 (A型、川和尚原遺跡)



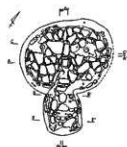
2 (B型、川和尚原遺跡)



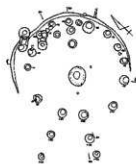
3 (C-1型、山田大塚遺跡)



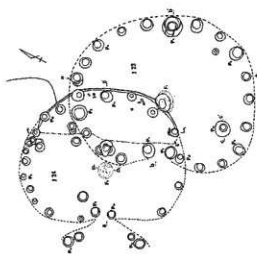
4 (C-1型、三の丸遺跡)



5 (C-1型、ナラサズ遺跡)

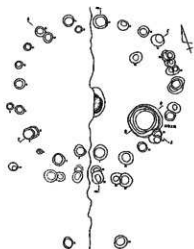


6 (C-2型、山田大塚遺跡)

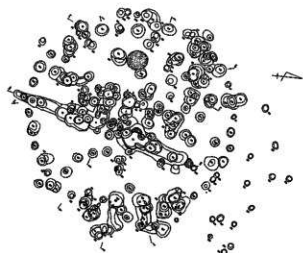


7 (C-2型、西ノ谷貝塚)

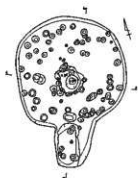
第2図 縄文内式期の住居址 (平面形態・掘出部形態概観①、S=1/150)



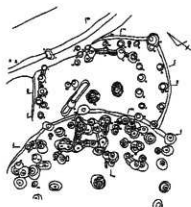
8 (C-3 型型、山田大塚遺跡)



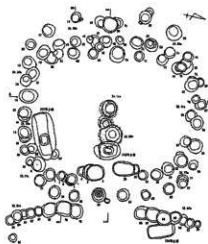
9 (C-3 型型、山田大塚遺跡)



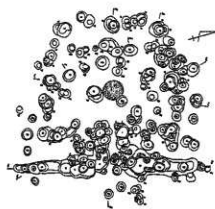
10 (C-4 型型、実谷) (遺跡B地区)



11 (C-5 型型、山田大塚遺跡)



12 (C-6 型型、川和河原遺跡)



13 (C-6 型型、月出松遺跡)

第3図 縄文内式期の住居址 (平面形態・掘出部形態類型②、S=1/150)

4. 住居規模（第4表）

過年度に実施した集成作業において176の該期遺跡を抽出したが、うち68遺跡において堅穴住居、柄鏡形住居が発見されており、その総数は337軒を数える。今年度は、これら337軒の住居を対象として、帰属時期、平面形態、規模、柱穴、炉址、付帯施設等の属性についてデータベースを作成しているが、ここでは、住居規模についての集計結果を提示し、主に主体部規模について分析を加えてみる。

「住居規模」の集計作業にあたっては、主体部から張出部までが遺存し、少なくとも主体部主軸側、副軸側の双方で最大値の計測が可能なものを対象としたが、該期の住居は柱穴のみが検出されている事例が少なからず存在し、また、遺跡立地の志向性によるものか、特に柄鏡形住居において張出部の痕跡が不明瞭なものも多く、上記条件を満たす住居は、堅穴住居1軒、柄鏡形住居10軒と、該期住居全体の約3.3%に過ぎない。大多数の住居が集計対象から外れてしまう結果となってしまったため、別の切り口での数値集計を検討した結果、堅穴状をなす掘方の有無にかかわらず規模データの集計が可能であることから、主に「主体部柱穴外縁長（主軸長）」（以下外縁長）、「主体部柱穴外縁幅（副軸長）」（以下外縁幅）、「張出部柱穴外縁長」、「張出部柱穴外縁幅」という4つの項目を用いて分析を行うこととした。集計の対象となる住居は、全体の約26.4%にあたる89軒（堀之内1式期：54軒・堀之内2式期：35軒）である。

主体部に配された柱穴の外縁長、外縁幅が計測可能であった住居は87軒存在する。外縁長は2.4m～8.6mの間に遍在し、5m台が25軒と最も多く、次いで4m台が22軒、6m台が11軒、3m台が10軒、7m台が8軒、8m台が6軒、2m台が5軒となっている。外縁幅は2.8～9.5mの間に遍在し、5m台が24軒と最も多く、次いで6m台が20軒、4m台・7m台が各13軒、8m台が7軒、3m台が6軒、2m台が3軒、9m台が1軒となっている。外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.12で、主軸長を副軸長が凌駕するという明確な傾向が捉えられる。以下、時期別、平面形態別（堅穴住居・柄鏡形住居）にみる。

①堅穴住居 集計作業の対象となる堀之内1式期の堅穴住居は13軒存在する。外縁長は4.0m～8.6m、外縁幅は4.3m～9.5mの間に遍在し、外縁長のピークは8m台（5軒）、外縁幅のピークも8m台（4軒）となっている。外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.01で、一見、円形あるいは方形基調のものが主体を占めるようにも見えるが、実際は主軸長が勝るものが4軒、副軸長が勝るものが7軒と、バラエティに富む。堀之内2式期の堅穴住居は7軒が対象となる。外縁長、外縁幅とも4m台から8m台の各領域に満遍なく偏在しているが、際だったピークは認められない。数値的には1式期に比べやや小ぶりになるように見受けられるが、対象住居数が少ないため明確な傾向とは言い難い。一方、外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.11で、副軸長が主軸長を凌駕するという明確な傾向が確認できた。

②柄鏡形住居 集計作業の対象となる堀之内1式期の柄鏡形住居は39軒存在する。主体部柱穴の外縁長は2.4m～7.5m、外縁幅は2.9m～8.3mの間に遍在し、外縁長のピークは5m台（15軒）、外縁幅のピークは6m台（10軒）である。外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.15で、39軒の住居すべてで副軸長が主軸長を凌駕することが確認された。堀之内2式期の柄鏡形住居は28軒存在する。主体部柱穴の外縁長は2.45m～7.9m、外縁幅は2.8m～7.5mの間に遍在し、外縁長のピークは4m台（9軒）、外縁幅のピークは5m台（12軒）である。外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.15で、主軸長が勝る住居が4軒存在するものの、副軸長の卓越傾向は1式期から引き続き顕著な傾向として認識できる。堅穴住居の集計結果とは異なり、外縁長、外縁幅とも平均値は2式期のものが勝っており、張出部の幅が拡大する傾向と共に、2式期の柄鏡形住居の特徴のひとつとして捉えておきたい。（井辺）

第4表 堀之内式期住居規模集計表

① - 1 堀之内式期住居 (89軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	9.20	6.80	7.70	8.60	9.50	6.20	4.85	4.00	10.10
最小値	2.60	2.10	2.10	2.40	2.80	1.35	1.00	0.84	0.80
平均値	5.77	4.21	5.14	5.26	5.88	2.48	2.09	1.86	3.90
集計対象軒数	14	20	30	87	87	13	15	63	61

① - 2 堀之内 1 式期住居 (54軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	9.20	5.80	7.40	8.60	9.50	6.20	4.85	4.00	8.30
最小値	2.60	2.10	2.10	2.40	2.90	1.35	1.00	0.85	0.90
平均値	5.76	3.96	4.91	5.31	5.87	2.49	2.08	1.92	2.98
集計対象軒数	12	14	21	52	52	11	13	36	36

① - 3 堀之内 2 式期住居 (35軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	7.10	6.80	7.70	8.20	8.65	3.30	3.00	3.30	10.10
最小値	4.60	2.65	3.10	2.45	2.80	1.50	1.30	0.84	0.80
平均値	5.85	4.81	5.66	5.17	5.89	2.40	2.15	1.79	5.23
集計対象軒数	2	6	9	35	35	2	2	27	25

② - 1 堀之内式期竪穴住居 (21軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	2.60	2.60	5.90	8.60	9.50				
最小値			2.10	4.00	4.30				
平均値	2.60	2.60	4.00	6.74	7.04				
集計対象軒数	1	1	2	20	20				

② - 2 堀之内 1 式期竪穴住居 (14軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	2.60	2.60	2.10	8.60	9.50				
最小値				4.00	4.30				
平均値	2.60	2.60	2.10	7.00	7.08				
集計対象軒数	1	1	1	13	13				

② - 3 堀之内 2 式期竪穴住居 (7軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値		4.60	5.90	8.20	8.65				
最小値				4.60	5.30				
平均値		4.60	5.90	6.26	6.96				
集計対象軒数		1	1	7	7				

③ - 1 堀之内式期柄籠形住居 (68軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	9.20	6.80	7.70	7.90	8.30	6.20	4.85	4.00	10.10
最小値	3.80	2.10	2.80	2.40	2.80	1.35	1.00	0.84	0.80
平均値	6.02	4.30	5.22	4.81	5.53	2.48	2.09	1.86	3.90
集計対象軒数	13	19	28	67	67	13	15	63	61

③ - 2 堀之内 1 式期柄籠形住居 (40軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	9.20	5.80	7.40	7.50	8.30	6.20	4.85	4.00	8.30
最小値	3.80	2.10	2.80	2.40	2.90	1.35	1.00	0.85	0.90
平均値	6.05	4.05	5.06	4.75	5.47	2.49	2.08	1.92	2.98
集計対象軒数	11	13	20	39	39	11	13	36	36

③ - 3 堀之内 2 式期柄籠形住居 (28軒)

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	7.10	6.80	7.70	7.90	7.50	3.30	3.00	3.30	10.10
最小値	4.60	2.65	3.10	2.45	2.80	1.50	1.30	0.84	0.80
平均値	5.85	4.81	5.63	4.90	5.62	2.40	2.15	1.79	5.23
集計対象軒数	2	6	8	28	28	2	2	27	25

5. 主柱穴・壁柱穴・壁溝・壁外柱・建替・重複（第4図）

ここでは、主柱穴・壁柱穴・壁溝などの住居に付帯する施設と、住居そのものの建替・重複事例を扱う。

主柱穴：上屋を支える主柱が認められず、壁際に廻らされた壁柱が上屋を支える構造は、前段階の称名寺式から引き続き本段階でも維持される。管見の337例中、主柱穴が認められ、上屋を主柱が支える構造が想定されたのは華藏台遺跡の35号住居（堀之内2式新段階）の1例のみであった。35号住居は径が8～10mある比較的大型の住居であるが、当該期は同程度の規模の住居にあっては主柱穴が認められないのが通常である。華藏台遺跡35号住居の主柱穴は、大きな上屋の支点間を支える構造上の必要から設けられたと考えるより、続く加曽利Ⅱ式以降にむけた住居上屋構造の変化を示すもので、同住居は時期的にもその画期に位置している可能性がある。

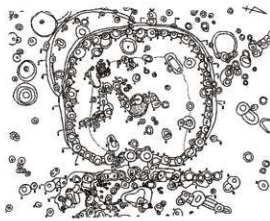
壁柱穴・壁溝：上述のように当該期においては壁際に壁柱穴を廻らすのが一般的形状である。壁溝は田名塩田・西山遺跡3号住居の1例を例外とし、華藏台遺跡35号住居、小丸遺跡12・13号住居、華藏台南遺跡9号住居、山田大塚遺跡21号住居などに、壁柱間を結ぶ補助的な使用が散見されるにとどまる。

壁外柱：当該期の住居に壁柱穴列の外側に壁外柱の存在が指摘されることがある。主柱や壁柱とともに上屋を支える構造の一部と想定される施設であるが、しかしながら実際の集成にあたっては後述する「建替」や「重複」の痕跡との区別が難しく、管見の中では表の屋敷（№8）遺跡2号の1例のみがあげられる。

建替・重複：住居の建替えや重複と認識される事象は、当該期の住居に顕著に観察される。一口に「建替」「重複」といっても、壁柱穴が同心円状に重なり、住居の「拡張」や「建替」と認識される状況でも、実際には住居営為の断絶期間をはさんだ異なる住居の「重複」の可能性があり、逆に住居同士が部分的に重なって構築された一般に「重複」と認識される状況であっても、実際の行為としては住居営為が連続する「建替」であった可能性が残るなど、実際の行為としての両者の峻別は容易ではない。ここではあくまで遺構に観察される事象の捉え方として、複数基の柱穴に建替えの痕跡があるもの、同心円状に壁柱穴列がめぐるものを「建替」と呼称し、別の住居が重なっているもの、あるいは大部分が重なっているが重なっていない部分があるものを「重複」と呼称することとする。また住居同士は完全に重なっているが、炉址を共有せず面積やプラン・主軸が著しく異なるもの、床面にレベル差が認められるものは「重複」と捉えることとした。なお実際の行為としてばかりではなく、残された遺構としても両者を区別したい事例は多く存在し、1軒の「建替」と認識するか、複数軒の「重複」と認識するかは調査・報告者によってまちまちで、当該期の住居址数を把握することを困難にしている。事例の計上にあたっては、便宜上「建替」はすべて1軒、「重複」を複数軒として捉えた。両者の峻別は、上記の基準により筆者が行ったため、その数を含め報告書の数値とは必ずしも一致していない。今回集成した資料のうち観察に耐えうる資料が337例、このうち上記の「建替」が観察された資料が30例、「重複」が観察された資料が80例あった。実に全体の3割の住居址に「建替」「重複」の痕跡が残されていたことになる。その居住行為が継続的か断続的かはとりあえず置くとしても、「建替」や「重複」といった累積的・重疊的な住居営為の痕跡は、発見された住居址数の著しい増加や規模の大きな集落遺跡の出現と軌を一にする事象であり、当該段階での集落の定着性・安定性の高まりと関連するとしてよいだろう。また一方で、単に「建替」や「重複」の痕跡が多いばかりではなく、これら「建替」・「重複」住居址は集落遺跡内の特定箇所集中している傾向を指摘できる。例えば川和向原遺跡では5号住居址（建替）と8号住居址（建替）が重複し、さらにこれに近接して9・10号住居址の重複が見られ、また7号住居址（建替）に近接して14・15号住居址が重複する。華藏台南遺跡では12号住居址（建替）・13号住居址・

14号住居址がほぼ同一箇所でも重複し、これに近接して15号住居址（建替）と17号住居址が重複するなど、堅穴住居址が同じ占地を取り続ける状況が看取され、「建替」と「重複」が、住居営為の反復という同一線上の行動であったと位置づけることができる。また同様の同一箇所にとどまった住居址の累積は集落規模が比較的大きな横浜地域に代表される東京湾側の地域だけではなく、田名窪田・西山遺跡をはじめ沢下遺跡、子易・大坪遺跡など、県域全体に認められることを付記しておきたい。このような同一・占地への強いこだわりは石片寛が集落遺跡における「核家屋」（石井 1999）と呼称した多重複住居址の萌芽を思わせるものである。

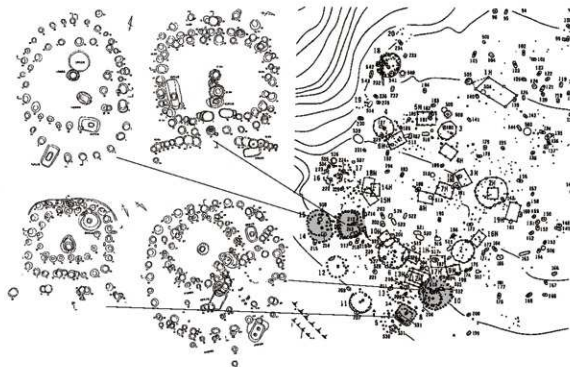
（小川）



草薙台遺跡 35号住居址：主柱穴・壁溝



表の上（No. 6）遺跡 2号敷石住居址：壁外柱穴



川和萬原遺跡（上14・15号住居址、7号住居址、下8号住居址、9・10号住居址）：建替・重複

第4図 掘之内式期の住居址（主柱穴・壁外柱・建替・重複、S=1/240）

6. 炉址（第5図、第5表）

本稿では、堀之内1式期の可能性がある総数58遺跡、住居址283軒における278基の炉址を対象とする。時期不明のものを除き、堀之内1式期を大まかに前後に二分すると、堀之内1式期に帰属するものは住居址159軒で炉153基を数え、堀之内2式期は住居址94軒で炉102基がある。炉の形態について埋燵炉、石囲埋燵炉、石囲炉、地床炉に分類する。炉の遺存状況により、形態が不明瞭なものもあるが、その可能性のあるものにそれぞれあてはめている。

まず、住居址における炉の位置では、それが判明するもの145基のいずれもが、住居址（柄鏡形住居の主体部）の中央から入口寄りに設けられ、時期的な変化は認められない。時期不明のものを除くと堀之内1式期の住居（主体部）中央43基、入口寄り44基、堀之内2式期では中央19基、入口寄り25基を数える。

形態毎の数として、総数278基中、埋燵炉8基、石囲埋燵炉7基、石囲炉62基、地床炉201基がある。堀之内1式期に限ると、153基中、埋燵炉5基、石囲埋燵炉5基、石囲炉27基、地床炉116基となる。一方、堀之内2式期における形態毎の数量は、102基中、埋燵炉2基、石囲埋燵炉2、石囲炉19基、地床炉79基となる。いずれの時期も地床炉を主体に、ついで石囲炉が多く、埋燵炉と石囲埋燵炉がそれぞれ少数を占め、時期的な変化は確認できない。

石囲炉は、主として住居址における敷石の有無と相関があり、地域的な偏りがある。石囲炉を有する住居で敷石が施されるのは44基を数え、全石囲炉61基の71.1%に相当する。また、地床炉を有する住居址で敷石がないものは183基あり、全地床炉201基の91%を占める。一方で、敷石が施されるものの地床炉となる炉址18基（全地床炉の9.0%）、敷石が敷設されないものの石囲炉の形態をとるもの17基（全石囲炉の17.9%）がある。大まかに地床炉は住居の敷石と関連するものの、一定程度、敷石敷設と無関係に石囲炉もしくは地床炉となるものがある。

ついで、時期の判明している住居址（堀之内1式期158軒、堀之内2式期93軒）を対象に炉の平面規模を確認する。堀之内1式期では、151基中、長径が0.7m未満のもの47基、0.7m以上1.0m未満のもの67基、1.0m以上37基となり、堀之内2式期では、101基中、長径0.7m未満40基、0.7m以上1.0m未満39基、1.0m以上22基となる。堀之内1式期は長径0.7m以上1.0m未満のものが主体であるのに対し、堀之内2式期に長径0.7m未満のものとはほぼ同数となり、新しくなるにつれ若干小型化する傾向にある。

炉の深さや形状に目を向けると、燃焼面の深さでは、堀之内1式期で燃焼面の深さが判明している68基のうち燃焼面最深部が0.3m未満のもの55基、0.3m以上0.6m未満のもの13基を数え、堀之内2式期では35基中0.3m未満のもの22基、0.3m以上0.6m未満のもの12基、0.6m以上のもの1基となり、わずかに深くなる傾向がある。炉の掘り方の深さでは、堀之内1式期で掘り方の深さが判明している135基中、最深部が0.3m未満のもの49基、0.3m以上0.6m未満76基、0.6m以上0.9m未満9基、0.9m以上1基を数えるのに対し、堀之内2式期で掘り方の深さが判明している89基のうち0.3m未満のもの26基、0.3m以上0.6m未満38基、0.6m以上0.9m未満13基、0.9m以上12基となり、堀之内1式期に比べ深さを増している。これは、掘り方断面形がすり鉢状もしくは逆台形を呈するもののほかに、ほぼ中央にビット状の掘り込みを持つものの割合が増加しているためである。炉にビット状の掘り込みを持つものは、堀之内1式期の152基中19基（12.5%）、堀之内2式期の101基中25基（24.8%）があり、堀之内2式期に割合が増加する。このビット状の掘り込みを有する炉は掘り方の深さが0.4m以上で、深いものでは1.3mに達するものもある。割合増加の要因については今後の課題となろう。

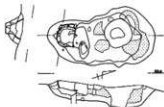
（阿部）

第5表 炉址形態別一覧表

	埋燵炉	石囲埋燵炉	石囲炉	地床炉	計	住居址総数
堀之内1式期	5 (3.3%)	5 (3.3%)	27 (17.6%)	116 (75.8%)	153 (100%)	159
堀之内2式期	2 (2.0%)	2 (2.0%)	19 (18.6%)	79 (77.5%)	102 (100.1%)	94
総数(前後の時期含む)	8 (2.9%)	7 (2.5%)	62 (22.3%)	201 (72.3%)	278 (100%)	283

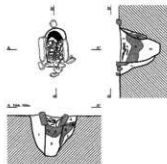
堀之内1式期

埋燵炉



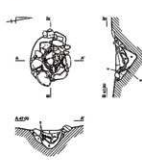
1. 岡上丸山J1A・B号竪穴住居

石囲埋燵炉 (断面ビット状)



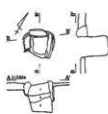
2. はじめ沢下J8号竪石住居

石囲埋燵炉



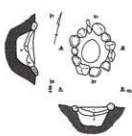
3. 仲後谷津谷本第1号住居

石囲炉 (断面ビット状)



4. ナラサスJ1号竪石住居

石囲炉



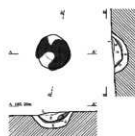
5. 田名塩田・西山第6号住居

地床炉 (断面ビット状)



6. 華蔵台南8号住居

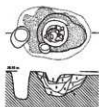
地床炉



7. はじめ沢下J3号竪石住居

堀之内2式期

埋燵炉



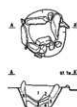
8. 小丸22号住居

石囲埋燵炉



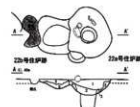
9. 太岳院92-5J1号竪石住居

石囲炉



10. 太岳院91-1J2号竪石住居

地床炉 (断面ビット状)



11. 藤原大原北22号住居

第5図 土な炉址形態 [S=1/60]

7. 埋壺 (第6図、第6表)

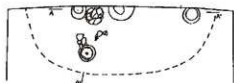
埋壺の数: 埋壺を持つ住居址は15遺跡から15軒確認できた。また埋壺数は18個である。時期別に見ると堀之内1式期に多く、堀之内2式期に減少するようである。住居址内に埋設された埋壺数を見ると、第6表のように1個が一般的であったと考えられる。

埋壺の位置: 堀之内1式期・2式期ともに床面上 (第6図1)、壁際 (同2) に埋壺を埋設する検出例に差異は見られないが、張出部 (同3) に埋壺が埋設される検出例は堀之内1式期に10点確認されているが、堀之内2式期には確認されていない。張出部形態が長方形のものから「ハ」の字状にピットが配置された張出部形態に変化したことによるものと考えられる。

埋壺の埋設状態: 埋壺の埋設状態は正位 (第6図4) が圧倒的に多く、逆位は少ない。また、埋設状態不明とした埋壺の中には、浅い掘り込みで土器が横倒しに覆れた状態で埋設されていたもの (同5)、掘り込み内に1個体の土器片が覆まった状態で埋設されていたもの (同6) も発見されている。 (岡)

第6表 埋壺の出上住居址軒数・位置別出土数・出土状況別出土数

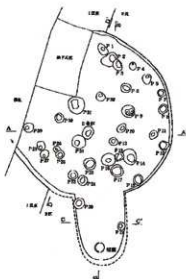
	埋壺出土点数別の住居址軒数			出土位置別の埋壺点数			出土状況別の埋壺点数		
	1個	2個	3個	床面	壁際	張出部	正位	逆位	不明
堀之内1式期	9	1	1	1	3	10	10		4
堀之内2式期	4			3	1		1	2	1



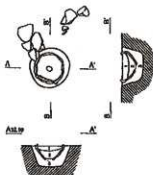
1. 久野北側下第IV地点S103



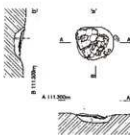
2. 矢崎山南42号居住址



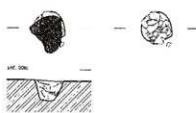
3. 西宮岡・向煤J2号居住址



4. 久野北側下第IV地点S103



5. 子島・大坪1区J4号住居址



6. はじめ沢下J1号敷石住居址

第6図 埋壺出土住居址 (S=1/120)・埋壺出土状況 (S=1/50)

8. 敷石・その他付帯施設（第7図）

ここでは、敷石及び付帯施設を取り扱う。敷石については、339軒のうち196軒（57%）に何らかの形で敷石とみられる礫の出土が確認でき、半数以上に礫を用いていると言える。しかしそのあり方は、覆土中に散在しているもの、床面に隙間無く敷き詰められているもの、一部限定的にしかれているものや散在するよう分布しているものなど多様性に富む状況である。また後世の擾乱などにより失われているものも多いと考えられ、意図的に一部のみに礫を配置しているものか、部分的に残存しているものなどが、一概に判断できないものも多く存在する。今回はこれらの状況を踏まえた上で、比較的良好な遺存状態であると考えられるものを対象に任意で選択し、その様相を捉えて行きたい。

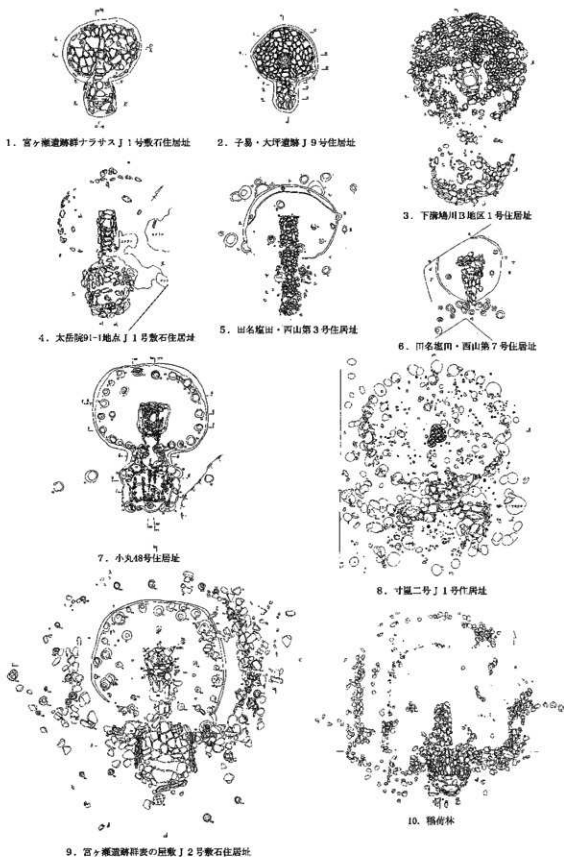
a 敷石が全面に敷き詰められているもの 明瞭な掘り込みを有し、ほぼ全面に敷石が敷き詰められているものは、宮ヶ瀬遺跡群ナラサスJ1号敷石住居址（第7図1）、子易・大坪遺跡3区J9号住居址（第7図2）などがある。いずれも主体部では壁に沿って縁石が立つよう並び、炉と張出部を結ぶ軸には、比較的大きな礫が配置されている。張出部は長方形に近い形態で突出する。掘り込みは明瞭ではないが、全面に礫が敷き詰められているものは、下溝埴川遺跡B地区1号住居址（第7図3）がある。主体部では縁石が立つように構築され、壁の存在が示唆される。張出部の端部は弧状に礫が配置されているが、主体部との接続部の礫は遺存してはならず、後世の影響か否かは不明である。また比較的小型の礫を主体に用いられており、近郊河川の河床礫組成が反映されているものと考えられる。

b 炉から張出部周辺に礫が用いられるもの 大岳院遺跡91-1地点J1号敷石住居址（第7図4）、田名塩田・西山遺跡第3号住居址（第7図5）、第7号住居址（第7図6）がある。主体部は縁石もしくは掘り込みでその輪郭が比較的明瞭に捉えられるが、敷石は炉及びその周囲で限定的に用いられ、平面的な広がりとは認められない。また大岳院遺跡（第7図4）・田名塩田・西山遺跡（第7図5）では、炉周囲から連続的に張出部にかけて顕著な敷石が配されている。田名塩田・西山遺跡（第7図6）では、炉周囲から張出部に向かって敷石が見られるが、張出部はビットのみである。これらの状況は、本来から限定的な敷石の使用であるのか、住居廃絶後に抜き取られ転用されたものか、後世に改変されて限定的な遺存となっているのか、明らかではない部分もあり、検討が必要である。

寸嵐J1号敷石住居址（第7図7）、小丸遺跡第48号住居址（第7図8）など、主体部及び張出部に部分的ではあるが敷石が用いられているものがある。柱穴配置も明瞭で、柱穴の直上に敷石が認められる部分も多く、柱穴配置と敷石との構造を考える上でも興味深い情報を提供している。

c 主体部の外側に敷石がめぐるもの 宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷J2号敷石住居址（第7図9）、稲荷林遺跡（第7図10）がある。宮ヶ瀬遺跡群（第7図9）では、明瞭な掘り込みを有する主体部の炉周囲と張出部に敷石が用いられ、主体部からやや間隔を空けて大型の敷石が取り囲むようめぐっている。稲荷林遺跡（第7図10）では、主体部の掘り込みは明瞭ではないが主体部付近には小型の礫を配した部分と同心円状に取り囲む大型の礫の敷石が見られ、宮ヶ瀬遺跡群（第7図9）と類似した様相を示している。

敷石の状況を主体に県内での事例を概観したが、調査によって住居全体の構造が明らかになっていることが前提とされ、さらに遺存状況や後世の改変などにより敷石の用いられ方の把握が困難であることも含めて、検討の余地は多い。また時期を見ると大岳院遺跡（第7図4）、稲荷林遺跡（第7図10）は、堀之内2式段階であるが、その他は概ね堀之内1式段階であり、時期的な変遷までは言及できない状況である。後期中集期の様相を比較した上で、敷石に関わる傾向の把握など、今後の分析により言及していく必要がある。（天野）



第7図 堀之内式期住居址の敷石 (S=1/180)

神奈川県内 後期掘之内式土器出土主要遺跡地名表（補遺）

- (1) この表は、「神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅲ－後期前集期 掘之内式土器文化期の様相 その5－」（縄文時代研究プロジェクトチーム 2014「かながわの考古学」『研究紀要』19 公益財団法人かながわ考古学財団）に掲載した、主要遺跡地名表（補遺）（文献目録）作成以降に刊行された報告書を中心に、神奈川県内における後期前集期の主要遺跡を補遺としてまとめたものである。
- (2) 掲載遺跡の抽出基準及び表の様式は、「研究紀要」15を原則として踏襲している。
- (3) 文献の収集、データベースの作成、表の編集は、縄文時代研究プロジェクトチームが行った。

No.	遺跡名	所在地	文献No.
伊勢原市			
176	子易・大坪遺跡	伊勢原市子易	169
177	西富岡・向畑遺跡	伊勢原市西富岡	170
秦野市			
178	曾屋吹上遺跡	秦野市富士見町	171

文献目録（文献Noは表中文献Noと一致）

- 169 三瓶裕司・大塚健一ほか 2013 子易・大坪遺跡・子易・町屋裏遺跡 県道611（大山坂戸）道路改良事業に伴う発掘調査 かながわ考古学財団調査報告292（公財）かながわ考古学財団
- 170 諏訪間直子・岡 稔ほか 2014 西富岡・向畑遺跡Ⅰ 新東名高速道路（伊勢原市西富岡地区）建設事業に伴う発掘調査 かながわ考古学財団調査報告298（公財）かながわ考古学財団
- 171 高山純・佐々木博昭編 1975 曾屋吹上－配石遺構発掘調査報告書－（図録篇）

神奈川県内出土の弥生時代土器棺(5)

—弥生時代中期後葉から古墳時代前期(その4)—

弥生時代研究プロジェクトチーム

はじめに

平成23年度の研究紀要17号より「神奈川県内出土の弥生時代土器棺」について事例の集成と検討を行い、研究紀要18号からは弥生時代中期後葉から古墳時代前期の県内事例の集成を行ってきた。今回は弥生時代中期後葉から古墳時代前期の事例追加とその概要解説を行い、その上で研究紀要18号から本号までに集成した資料に基づいたまとめを行うこととする。

今回の追加事例の集成では、1遺跡6事例を確認した。追加事例については概要解説と検出遺構及び土器棺資料の図を提示し、前号までの集成を踏襲した集成一覧表と文献一覧表の補遺を作成した。さらに集成事例の諸属性をまとめ、第3表として掲載した。概要解説の遺構名の前に付した番号は、前号までの集成から継続した番号を付けていて、集成図や各一覧表と対応している。また、文献一覧表の文献番号も前号からの継続番号である。集成事例の遺跡分布図については、前号に掲載した土器棺出土遺跡分布図と変わらないので、前号を参照していただきたい。図の掲載にあたって、遺構・遺物の検出状況を縮尺1/60、遺物実測図を縮尺1/8とした。図は各報告書掲載よりコピーして使用し、再トレースは行っていない。

追加事例の集成にあたってはプロジェクトメンバーで掲載対象を検討し、追加事例の本文執筆は飯塚が、事例分析についての本文執筆は池田が担当した。

(池田)

県内遺跡の追加事例

52. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 1号方形周溝墓 東溝

遺跡は海老名市河原口に所在し、相模川・中津川・小鮎川の三河川が合流する地点の自然堤防上に立地する。第2次調査では、弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居址148軒、方形周溝墓2基、しがらみ状遺構14基、河道跡2箇所などが検出されている。

1号方形周溝墓は大部分が調査区外にあり、全体の1/3程度が調査された。周溝の方台部側立ち上がり(下端)を基準として方台部の規模を計測した場合、北溝と南溝との立ち上がり間の距離は12.9mを測る。周溝は全周せず、南東隅が途切れている。

陸橋部に接して東溝の南端、溝底からやや浮いて壺の胴部～底部が出土している。胴部上半には縄文を地文として、その上に重ねて沈線による波状文が施文されている。また、部分的に赤彩の痕跡が認められる。現存高17.3cm、底径6.8cm、胴部最大径24.0cmである。弥生時代中期後葉に比定される。土器棺の可能性がある事例として取り上げた。

53. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 14号土坑

調査時に土器底部を蓋とした1個体分の完形に近い壺が出土したことから、周辺を精査した結果、土坑状の掘り込みを伴う遺構であることが確認された。掘り込み面が確認された標高は19.71mであるが、本来は

検出面より上位層から掘り込まれ、土坑内に土器が設置されていたものと考えられる。

土坑は、確認面での現存長は長径0.55m、短径0.43m、形状は楕円形を呈する。出土した壺は、検出した土坑の南端に位置し、底部を下にした状態で設置されていた。壺は頸部接続部分で打ち欠き、口縁部～頸部を割取ったものに、他の壺底部の下位部分を打ち欠き、底部を上にした状態で蓋として被せている。土器内は土が満満していたが、土圧によりやや押しつぶされた状態で出土した。

1は壺の底部で、割れ口部分は疑口縁が観察される。底径は8.0cm、現存高7.3cmである。2も壺で、頸部以上を打ち欠いている。残存部分は無文でミガキが施されている。現存高25.8cm、底径11.2cm、胴部最大径28.2cmである。いずれも、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される。

54. 河原口坊中遺跡（第2次調査） 37号土坑

調査時に1個体分と考えられる土器が押しつぶされてまとまって出土したために、周辺を精査した結果、土坑状の掘り込みが確認された。確認面の標高は18.98mである。土坑の確認面での規模は、長径1.33m、短径0.67m、形状は隅丸方形を呈する。覆土は地山をブロック状に含むことから、埋め戻された可能性が考えられる。

1は口縁部に最大径をもつ甕で、口唇部は面取りののちにキザミ、胴部上半には横走羽状の、胴部下半は斜め方向のハケが施される。また、指ナデによる沈線が確認できる。内面はヘラナデされ、底部は網代底が残る。底部に焼成後の孔が1穴あるが、意図的な穿孔かどうかは断定できない。雲母を特徴的に多く含む胎土で、その形状から、駿河湾沿岸から伊豆地方にかけて分布する「磨消線文甕」と考えられる。口径26.0cm、器高30.2cm、底径7.6cm、胴部最大径22.3cmである。弥生時代中期中葉～中期後葉の古い段階に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。

第1表 神奈川県内出土土器館蔵集成（弥生時代中期後葉～古墳時代前期）補遺

資料番号	所在地 (市区町村名)	遺跡名	遺構名または出土位置	時期	文献番号
52	海老名市	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	1号方形周溝墓 東溝	弥生時代中期	34
53	#	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	14号土坑	弥生時代後期以降	
54	#	河原口坊中遺跡 (第2次調査)	37号土坑	弥生時代中期	
55	#	河原口坊中遺跡 (第4次調査)	225号土坑	弥生時代中期	35
56	#	河原口坊中遺跡 (第4次調査)	228号土坑	弥生時代後期	
57	#	河原口坊中遺跡 (第4次調査)	229号土坑	弥生時代後期	

※資料番号は第1図中の遺構番号に対応、文献番号は第2表に対応する。

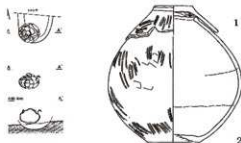
第2表 文献一覧表 補遺

文献番号	文 献 (報 告 書) 名	刊行年	編集機関
34	『河原口坊中遺跡 第2次調査』	2015	公益財団法人かながわ考古学財団
35	『河原口坊中遺跡 第4次調査』	2014	公益財団法人かながわ考古学財団

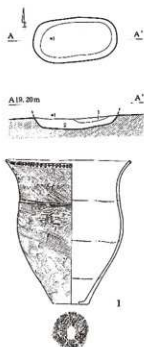
52. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 1号方形周溝墓 東溝



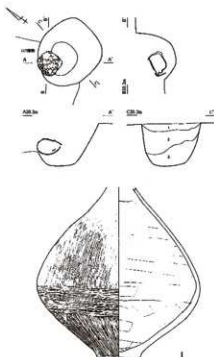
53. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 14号土坑



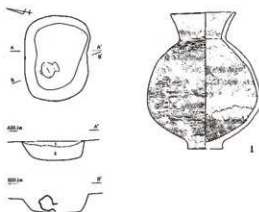
54. 河原口坊中遺跡(第2次調査) 37号土坑



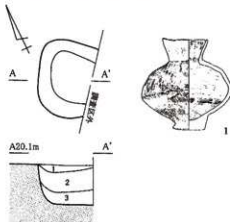
55. 河原口坊中遺跡(第4次調査) 225号土坑



56. 河原口坊中遺跡(第4次調査) 228号土坑



57. 河原口坊中遺跡(第4次調査) 229号土坑



第1圖 土器棺集成追加資料 [遺構図1/60、土器1/8]

第3表 神奈川県内出土土器集大成（弥生時代中期後葉～古墳時代前期）データ一覧表

資料番号	所在地 (市町村名)	遺跡名	遺構名または出土位置	時期	文献 番号	立地	河川流域	出土地 説明	遺構内出土 位置	出土施設
1	川崎市高津区	三南原前遺跡	南壕 土中	弥生時代後期		台地	鶴見川	居住域	南壕土中	—
2	〃	三南原前遺跡	1号方形周溝墓 西溝（1）	弥生時代後期		台地	鶴見川	墓域	周溝中央直	周溝内土坑
3	〃	三南原前遺跡	1号方形周溝墓 西溝（2）	弥生時代後期		台地	鶴見川	墓域	周溝中央直	周溝内土坑
4	川崎市宮前区	野川神明社境内遺跡	1号土器箱墓	弥生時代後期		丘陵	鶴見川	墓域	単独	土坑
5	〃	野川神明社境内遺跡	2号土器箱墓	弥生時代後期		丘陵	鶴見川	墓域	単独	土坑
6	〃	野川神明社境内遺跡	3号土器箱墓	弥生時代後期		丘陵	鶴見川	墓域	単独	土坑
7	横浜市都筑区	八幡山遺跡	遺構	弥生時代中期後葉	3	台地	鶴見川	居住域	単独	不明
8	〃	堀田遺跡	Y1号住居址P2	弥生時代中期後葉	4	台地	鶴見川	居住域	床面ビット	ビット内
9	〃	成勝土南遺跡	3号方形周溝墓	弥生時代中期後葉	5	台地	鶴見川	墓域	周溝？直	周溝内土坑
10	〃	成勝土南遺跡	S3号方形周溝墓 T1号遺構	弥生時代中期後葉		台地	鶴見川	墓域	周溝中央直	周溝内土坑
11	〃	成勝土南遺跡	S4号方形周溝墓 T2号遺構	弥生時代中期後葉		台地	鶴見川	墓域	周溝端部直	周溝内土坑
12	〃	成勝土南遺跡	T3号遺構	弥生時代後期		台地	鶴見川	墓域	単独	不明
13	〃	成勝土南遺跡	T4号遺構	弥生時代後期		台地	鶴見川	墓域	単独	不明
14	〃	堀田原遺跡	F区S5号土坑	弥生時代中期後葉	7	台地	鶴見川	墓域	単独	土坑
15	〃	安部遺跡	H区内土坑	弥生時代中期後葉	8	台地	鶴見川	居住域	遺構中層	土坑
16	〃	若木西沢遺跡	7号方形周溝墓	弥生時代中期後葉	9	台地	鶴見川	墓域	周溝端部付近	周溝内土坑
17	横浜市緑区	東郷地遺跡	遺構	古墳時代前期	10	台地	鶴見川	墓域	単独	土坑
18	横浜市港北区	山王山遺跡	29号土坑	弥生時代後期		台地	鶴見川	居住域	単独	土坑
19	〃	山王山遺跡	1号墳墓	弥生時代後期		台地	鶴見川	居住域	単独	土坑
20	横浜市保土ヶ谷区	上星川遺跡	第12号住居址	弥生時代後期	12	台地	横子川	居住域	住居内ビット	ビット
21	足子市	石間ギンギン南台地遺跡	3号住居址内倉	古墳時代前期	13	丘陵	田越川	居住域	住居内床	—
22	〃	熊子遺跡群 No.1-A地点	第2号方形周溝墓 北溝	古墳時代前期	14	谷川 低地	田越川	墓域	周溝内	—
23	横浜市中区	三笠寺遺跡	1号墓域	古墳時代前期	15	丘陵	平作川	居住域	単独	土坑
24	〃	佐倉遺跡	第1号住居址墓土内合むせ口直	古墳時代前期	16	丘陵	平作川	居住域	住居内土中	—
25	藤沢市	大観大遺跡	1号土庫	弥生時代中期後葉	17	砂丘	片瀬川	墓域	単独	土坑
26	〃	石名坂遺跡群S5地点	1号住居址内土庫	弥生時代中期後葉		台地	引地川	居住域	住居内壁際	土坑
27	〃	石名坂遺跡群S3地点	3号方形周溝墓 南溝	弥生時代中期後葉	18	台地	引地川	墓域	周溝端部直	周溝内土坑
28	〃	石名坂遺跡群S5地点	4号方形周溝墓 西溝	弥生時代中期後葉		台地	引地川	墓域	周溝端部直	周溝内土坑
29	〃	大観塚公園内遺跡	方形周溝墓S D10 東溝	弥生時代後期	19	台地	引地川	墓域	周溝中央直	周溝内土坑
30	〃	高倉橋遺跡	第1号方形周溝墓 西溝	古墳時代前期	20	台地	相模川	墓域	周溝直	周溝内土坑
31	海老名市	社会平山遺跡	YK3号方形周溝墓 東溝	弥生時代後期	21	自然堤防	相模川	墓域	周溝内	—
32	〃	中野坂野遺跡	11号方形周溝墓 北溝	弥生時代中期後葉	22	自然堤防	相模川	墓域	周溝内	—
33	〃	本郷中谷津遺跡	1号方形周溝墓 東溝	弥生時代中期後葉	23	台地	目久沢川	墓域	周溝端部直	周溝内土坑
34	〃	本郷遺跡	25号方形周溝墓 北溝	弥生時代後期		台地	目久沢川	墓域	周溝端部直	—
35	〃	本郷遺跡	34号方形周溝墓 西溝	弥生時代後期		台地	目久沢川	墓域	周溝端部直	—
36	〃	本郷遺跡	南壕 土中層	弥生時代後期		台地	目久沢川	居住域	南壕土層	—
37	堀川町	大観東原遺跡	6号方形周溝墓 東溝（1）	弥生時代後期		台地	小出川	墓域	周溝端部直	周溝内土坑
38	〃	大観東原遺跡	6号方形周溝墓 東溝（2）	弥生時代後期		台地	小出川	墓域	周溝端部直	周溝内土坑
39	〃	堀川町 No.14遺跡	掘取発見	弥生時代後期	26	台地	目久沢川	不明	—	—
40	平塚市	坪ノ内遺跡（第3地区）	S D10H（1号方形周溝墓）	弥生時代中期後葉	27	砂丘	相模川	墓域	周溝端部直	—
41	〃	真田・北金目遺跡群	S7A・G1区 30049	弥生時代後期	28	段丘	金目川	居住域	単独	土坑
42	〃	原口遺跡	57号方形周溝墓 西溝周溝内土坑	弥生時代後期		段丘	金目川	墓域	周溝直	周溝内土坑
43	〃	原口遺跡	YH22号土坑	弥生時代中期後葉		段丘	金目川	墓域	単独	土坑
44	〃	内沼遺跡	219号住居址内土庫	古墳時代前期	30	段丘	金目川	居住域	単独	土坑
45	藤沢市	砂田台遺跡	16号住居址P7	弥生時代中期後葉	31	台地	金目川	居住域	住居内ビット	ビット
46	小田原市	千代原南遺跡群XVI地点	9号遺構	弥生時代後期	32	台地	西沢川	居住域	単独	土坑
47	海老名市	阿原口防中遺跡（第1次）	P21地区 YH1号土坑	弥生時代中期後葉		自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑
48	〃	阿原口防中遺跡（第1次）	P24地区 遺構外	弥生時代中期後葉		自然堤防	相模川	居住域	単独	不明
49	〃	阿原口防中遺跡（第1次）	P23地区 YH4号土坑	弥生時代後期	33	自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑
50	〃	阿原口防中遺跡（第1次）	P21地区 YH10号土坑	弥生時代後期以降		自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑
51	〃	阿原口防中遺跡（第1次）	P21地区 YH18号土坑	弥生時代後期以降		自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑
52	〃	阿原口防中遺跡（第2次）	1号方形周溝墓 東溝	弥生時代中期後葉		自然堤防	相模川	墓域	周溝端部中層	—
53	〃	阿原口防中遺跡（第2次）	14号土坑	弥生時代後期以降	34	自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑
54	〃	阿原口防中遺跡（第2次）	37号土坑	弥生時代中期後葉		自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑
55	〃	阿原口防中遺跡（第4次）	225号土坑	弥生時代中期後葉		自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑
56	〃	阿原口防中遺跡（第4次）	228号土坑	弥生時代後期	35	自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑
57	〃	阿原口防中遺跡（第4次）	229号土坑	弥生時代後期		自然堤防	相模川	居住域	単独	土坑

○資料番号及び文献番号は、「神奈川県内出土の弥生時代土器類（2）～（5）」（研究紀要18～21）の資料番号・文献番号に可及。

○立地（地形区分）は報告書等の記載に基づいているが、得模原地区は自然堤防に統一した。

○川上流域（自然堤防）は自然堤防遺跡で形成される範囲を居住域とし、南郷も居住域の一部とする。墓域は、方形周溝墓の周溝内や方形周溝群の範囲内、居住域と区分される土坑群等で形成される範囲とする。単独で調査されている場合、周囲に同時期の住居址が分布していない場合は、墓域とした。

○遺構内出土位置とは、土器が出土した位置が遺構内どのような位置にあたるかを示し、主に方形周溝墓内での出土位置を細分するための項目である。

神奈川県内出土の弥生時代土器(5)

出土 状態	構成 土器数	組合せ状態	組合せ 部数	組合せ存在状態	穿孔の有無	組合せ土器 胴部最大 径 (cm)	土器 器種	土器形状	備考
正位	2個体	重ね	蓋	胴部以上欠	無し	32.0	甕	破片分散、ほぼ 完全復元	重ね状態推定済
正位	2個体	内合	蓋	胴部上位以上欠	無し	39.2	蓋	胴部上位以上欠	
正位	2個体	内合	台付蓋	胴部欠	無し	21.0	高坪	胴部欠	
横位?	1個体	―	蓋	不明	無し	約50	―	―	
横位	2個体?	破片被覆	蓋	胴部以上欠	無し	45以上	蓋	別個体胴部片	
横位	1個体	破片被覆	蓋	胴部一部欠	約45	蓋	同一個体胴部片		
正位	2個体	被覆	蓋	胴部以上欠	無し	約18	蓋	底部のみ	
正位	3個体	内合+破片 被覆	蓋	胴部以上欠	無し	17.3	蓋	胴部以上欠	+破片被覆
正位	1個体	―	蓋	胴部以上欠	無し	49.0	―	―	
正位	2個体	内合	蓋	胴部上位以上欠	無し	36.0	甕	完形、逆位	
正位	2個体	内合	蓋	胴部以上欠	無し	23.8	蓋	胴部上半欠	
横位	2個体	被覆	蓋	胴部上位以上欠	胴部穿孔	39.0	甕	破片	
不明	1個体?	―	蓋	底部・胴部以上欠	無し	約36	―	―	土器の可能性。
正斜位	2個体	内合	蓋	胴部以上欠	?	約40	甕?	?	
横位	1個体	―	甕	底部欠?	無し	25.6	―	―	内部に骨粉・粘土を含む土。
逆斜位	1個体	―	蓋	胴部上位以上欠	無し	36.1	―	―	
正位	2個体	被覆	蓋	胴部以上欠	無し	36.7	高坪	坪部片	方形周溝底面を切る土坑と推定される。
逆位	2個体	内合	甕	底部(胴部)欠	無し	約24	蓋	口縁部のみ	土器の可能性。本集成(2)第4図の18と19は図と キャプションが違。
正位	1個体	―	甕	完形	無し	約24	―	―	土器の可能性。
正位	3個体	合口・重ね	台付蓋	胴部欠	無し	18.2	甕	壊れた状態	中位は胴部下平欠の甕。土器の土を粘土で被覆。
正斜位	1個体	―	蓋	口縁部大部分欠	胴部打ち欠	28.8	―	―	胴部穿孔により土器の可能性。
正位	3個体	重ね・内合	蓋	胴部以上欠	無し	32.8	甕	破砕被覆	内部に骨粉と推定される白い粉。中位は胴部のみの蓋。
正位	1個体	―	甕	完形	無し	22.2	―	―	報告書で蓋とする。
正位	2個体	内合	蓋	胴部上位以上欠	無し	34.9	蓋	胴部上位以上欠	報告書では内縁蓋とする。
逆斜位	1個体	―	蓋	完形	無し	22.0	―	―	
正位	2個体	内合	蓋	胴部以上欠	無し	38.5	甕	完形	甕に補修あり。
正位	2個体	内合	蓋	胴部上位以上欠	無し	27.8	甕	口縁部欠	両隣土中の土坑と推定される。
横位	2個体	内合	甕	完形	無し	28.4	甕	完形	両隣土中から掘り込まれた土坑。
逆位	1個体	―	蓋	完形	無し	36.4	―	―	
正位	1個体	―	蓋	完形	無し	31.8	―	―	
逆斜位	1個体	―	蓋	口縁部・底部欠	無し	約34	―	―	両隣土中の土坑と推定。土器と推定。
横位	2個体	被覆	蓋	胴部以上欠	無し	約40	甕	破片	土器の可能性。
逆位	2個体	入れ子	蓋	胴部上位以上欠	無し	15.4	甕	完形	
正位	3個体	重ね・被覆	甕	底部欠	底部打ち欠	30.1	蓋	底部のみ	中位の意に胴部穿孔あり。
正位	1個体	―	蓋	胴部上位以上欠	無し	62.4	―	―	土器上半は削平されている不明。
正位	2個体	重ね	蓋	完形	無し	31.3	蓋	胴部以上欠	
正位	2個体	内合	蓋	胴部上位以上欠	無し	34.0	蓋	完形復元	甕土中から掘り込み。
正位	2個体	被覆	蓋	胴部以上欠	無し	33.7	蓋	胴部片	甕土中から掘り込み。土器の上半削平。
不明	2個体	破片被覆	蓋	胴部以上欠	無し	38.3	蓋	胴部下平	土器と推定。出土状況不詳。参考資料。
逆位	1個体	―	蓋	胴部以上欠	無し	43.2	―	―	
集合	8個体	―	蓋・鉢	―	―	―	―	―	中位の土器ではない。参考資料。
横位?	1個体	―	甕	胴部以上欠	無し	22.6	―	―	圧縮して出土。土器と推定。
正斜位	1個体	―	蓋	口縁部欠	無し	28.2	―	―	口縁部は削平による欠損。
正位	1個体	―	蓋	胴部上位以上欠	無し	約44	―	―	住居層土中から掘り込まれた土坑。
正位	1個体	破片被覆	蓋	底部・胴部上位以上欠	無し	31.2	蓋	同一個体底面片	
逆位	1個体	―	蓋	完形	無し	17.5	―	―	報告書では貯蔵穴とするが、土器の可能性も指摘。
正位	1個体	―	蓋	完形	無し	8.2	―	―	小笠蓋。土器としては小さい。
正位	2個体	重ね	蓋	口縁部欠	無し	19.7	甕	完形	土器の可能性。祭祀用途か?
横位	2個体	被覆?	蓋	胴部以上欠	無し	63.6	蓋	胴部片	
正斜位	1個体	―	蓋	完形	無し	18.3	―	―	
正斜位	1個体	―	台付蓋	完形	無し	11.6	―	―	小型台付蓋。土器か?
正位	1個体	―	蓋	胴部上半欠	無し	34.0	―	―	出土位置から、土器の可能性あり。
正位	2個体	被覆	蓋	胴部以上欠	無し	28.2	蓋	底部のみ	
横位	1個体	―	甕	ほぼ完形	底部穿孔?	22.3	―	―	底部中央孔は打ち欠いた製孔口ではないが穿孔の可能性。
横位	2個体	破片被覆	蓋	胴部以上欠	無し	34.4	蓋	別個体胴部片	別個体破片で複合胴口部を蓋
横位	1個体	―	蓋	完形	無し	34.0	―	―	
不明	1個体	―	ほぼ完形	無し	19.0	―	―	―	No.36と類似物と推定

○組合せ状態：重ね=重ね合わせ。2個の土器を同じ向きで重ねている状態。内合=内合合わせ。2個の土器を向かい合わせて重ねている状態。被覆及び合わせ口の状態で
除く。 被覆=指すの開口部を他の土器で覆い隠す状態。指す全体を別の土器で覆う場合を含む。 入れ子=土器の中に別の土器が同じ向きで入っている状態。

55. 河原口坊中遺跡（第4次調査） 225号土坑

第4次調査では、弥生時代中期から古墳時代前期の堅穴建物址93軒、旧河道などが検出された。

225号土坑は、堅穴建物址の壁付近に土器が露出したため、周辺を精査したところ楕円形の土坑のプランが確認された。土坑の確認面の標高は20.18m、規模は長径1.07m、短径0.93mを測り、形状は隅丸方形を呈する。

1の土器は壺で、土坑西寄りの中層から出土している。表面が焼けて黒色を呈していた。現存高は35.4cm、底径9.4cm、胴部最大径は34.4cmである。残存部分は無文で、赤彩、ミガキが施される。弥生時代中期後葉に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。

56. 河原口坊中遺跡（第4次調査） 228号土坑

溝を壊して掘り込んでいない不整形円形の土坑である。確認面の標高は19.95m、規模は長径1.25m、短径1.00mを測る。壺は底面から横向き状態で出土している。

1の壺は口径13.6cm、器高28.3cm、底径7.2cm、胴部最大径24.0cmである。無文で口縁部はヨコナデされている。弥生時代後期に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。

57. 河原口坊中遺跡（第4次調査） 229号土坑

調査区壁際で検出された。平面形は不整形形もしくは不整形円形と考えられ、一部は調査区外に延びている。土坑確認面の標高は19.93m、規模は長径1.23m、短径0.83mを測る。

1の壺は口径9.4cm、器高18.9cm、底径6.4cm、胴部最大径19.0cmである。無文でミガキが施される。弥生時代後期に比定される。土器棺の可能性のある事例として取り上げた。（飯塚）

弥生時代中期後葉から古墳時代前期の県内事例についての分析

神奈川県内における弥生時代中期後葉から古墳時代前期の土器棺集成として、本稿での補遺を含めて57事例を集成した。集成にあたっては、骨片が出土しているなどの埋葬遺構として確実な事例はごく限られた例しかないため、「土器棺の可能性のあるもの」を集成の対象に含めている。各報告書において「土器棺」や「壺棺」、「再葬墓」のように報告・紹介されている遺構や、当プロジェクトメンバーによって土器棺の可能性があると判断したものを集成している。なお、「土器棺の可能性のある事例（土器、遺構）」とすべきものも含め、便宜上「土器棺」と総称して記述する。

集成した57事例のうち、資料No.13歳勝土遺跡T4号壺棺と資料No.39寒川町No.14遺跡採集資料は出土状況不明の参考資料であり、資料No.41真田・北金目遺跡群57A・G1区SK049は土坑内集合埋納の可能性のある参考資料である。このためこの3事例は本稿での検討対象から除外した。また支流尾No.54河原口坊中遺跡（第2次調査）37号土坑は弥生時代中期中葉に遡る可能性もあるが、本稿では事例集成及び検討の対象に含めることとした。この結果、54事例について分析を行うこととする。

資料の時期区分は、基本的には各報告書の表記に従っているが、本稿では弥生時代中期後葉、弥生時代後期、古墳時代前期の3時期に大きく区分した。弥生時代中期後葉とした時期は、宮ノ台式土器全般の時期が該当し、古墳時代前期とした時期は、いわゆる小型器台や小型高坏が出現する弥生時代終末の時期から布留式併行に入る時期までを含んでいて、弥生時代終末～古墳時代前期とされる時間幅を古墳時代前期と表記し

第4表 時期別集計

	遺跡数	件数
弥生時代中期後葉	15	22
弥生時代後期（以降）	12	25
古墳時代前期	7	7
合計	34	54

第5表 遺跡立地別集計

	遺跡数	件数
丘陵	4	6
台地	19	29
段丘	2	3
砂丘	2	2
自然堤防	3	13
谷戸内低地	1	1
合計	31	54

第6表 河川流域別集計

	遺跡数	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
鶴見川	11	18	8	9	1
帷子川	1	1	0	1	0
田越川	2	2	0	0	2
平作川	2	2	0	0	2
境川（片瀬川）	2	2	1	0	1
引地川	2	4	3	1	0
小出川	1	2	0	2	0
目久尻川	2	4	1	3	0
相模川	4	14	7	7	0
金目川	3	4	2	1	1
酒匂川	1	1	0	1	0
合計	31	54	22	25	7

ている。なお、個別資料の時期において弥生時代後期以降とされている資料は、集計上、弥生時代後期に含めている。以下に、項目ごとに傾向をまとめる。

①時期別事例数について（第4表）

弥生時代中期後葉は15遺跡22例、弥生時代後期（「後期以降」の3例を含む）は12遺跡25例、古墳時代前期7遺跡7例がある。弥生時代中期後葉から後期にかけての事例数、弥生時代後期がやや多いもののほぼ変わりなく、古墳時代前期には大きく減少している。

②遺跡の立地（地形区分）について（第5表）

地形区分の表記については報告書によって異なる区分である場合があるものの、各報告書の記載に従って各事例を地形区分ごとに集計すると、丘陵上に4遺跡6例、台地上が19遺跡29例、段丘上に2遺跡3例、砂丘上に2遺跡2例、自然堤防上に3遺跡13例、谷戸内低地が1遺跡1例である。大きく括れば「台地」（丘陵＋台地＋段丘）＝38例、「低地」（自然堤防＋砂丘＋谷戸内低地）＝16例となる。大きく「台地」と称される地形に立地する事例がおおよそ7割であるが、いわゆる「低地」と括れる地形に立地する事例が3割あることは、調査が低地遺跡に及んだことを反映している結果であろう。

③河川流域別の分布状況について（第6表）

河川流域別には、県北東部の鶴見川流域に11遺跡18例、同じく帷子川流域に1遺跡1例がある。また県中央部の相模川流域に4遺跡14例、相模川の支流である小出川と目久尻川流域に合わせて3遺跡6例がある。この2つの地域に多くの事例が集まっているが、この他に三浦半島地域の平作川流域と田越川流域に合わせて4遺跡4事例、県中央東部の境川（河口部は片瀬川）流域と引地川流域に4遺跡6事例、県中央西部の金目川流域に3遺跡4事例、県西部の酒匂川流域に1遺跡1事例がある。

河川流域別分布の特徴を時期別にみると、弥生時代中期後葉には鶴見川流域と相模川流域に多く次いで引地川流域に多いが、弥生時代後期には鶴見川流域と相模川流域に多いことは変わらないものの相模川支流の

小出川と目久尻川流域に事例が多くなっている。対して古墳時代前期には、弥生時代中期後葉から後期に事例のなかった三浦半島地域の平作川流域と田越川流域の双方で事例が増えていて、他の河川流域ではこの時期に大きく減少していることと対照的である。

④墓域・居住域別の件数について（第7表）

土器棺とされる遺構は埋葬方法の一つであるが、必ずしも居住域と区分された墓域内に埋設されているものばかりではない。ここでは集成した遺構が墓域内にあるのか、居住域もしくはその他の区域にあったものかをまとめておく。なお、単独で発見されたものなど同時期の居住域から離れた区域にある場合は、墓域として扱った。

対象となる54例のうち、墓域にあるものは20遺跡29例、居住域にあるものは15遺跡25例である。時期別では、弥生時代中期後葉では墓域内に位置するものが13例、居住域に位置するものが9例である。弥生時代後期では墓域内に位置するものが13例、居住域に位置するものが12例ある。古墳時代前期には墓域に位置するものが3例、居住域に位置するものが4例ある。

墓域内にある例についても、土坑による墓域を形成する例はなく、方形周溝墓群の中にあつて単独の土坑で存在する例が7例、方形周溝墓の周溝内の土坑に納められている例が15例、方形周溝墓の周溝内にあつて土坑の有無は不明ながら土器棺の可能性が推測される例が6例あるが、方形周溝墓の方台部に位置している土器棺の例は見られない。

居住域にある例では、単独の土坑に納められている例が最も多く14例あるが、住居址内で発見されている例もその多くは住居使用中に作られたものではないと考えられ、住居廃絶後に埋葬場所として利用されたものと推定されるものである。

⑤棺構成土器数の傾向について（第8表）

土器棺と推定される遺構には、棺身となる土器のみが残っている場合と、棺身に加えて棺身を延長する役割の土器や棺蓋となる土器など複数土器の組合せで構成されている場合とがある。

今回の集成では、棺を構成する土器の数は1個から3個までであった。1個だけの例が26例、2個で構成される例が24例、3個で構成される例が4例である。ただし土器1個だけの例は、上部が削平されて棺身土器の開口部を塞ぐ方法が不明である例も含まれていることに留意しなければならない。また、棺身土器の一部の破片をもって開口部を塞ぐ蓋としている例が2例あり、これも土器数1個に含めて集計している。

棺身土器のみの例は、弥生時代中期後葉には10例、弥生時代後期には12例、古墳時代前期には4例である。棺身土器とそれを覆う（開口部を塞ぐ）土器の2個で構成される例は、弥生時代中期後葉では11例、弥生時代後期でも11例、古墳時代前期では2例がある。棺身土器とそれに重ねて棺身を延長する役割の土器および開口部を塞ぐ土器の3個で構成される例は少なく、弥生時代中期後葉に1例、弥生時代後期に2例、古墳時代前期に1例がある。構成土器数は1個もしくは2個が大多数でこの2種類に数的差はなく、時期的には弥生時代中期後葉と後期では特に変化はなく、古墳時代前期にいずれも大きく減少している。

⑥器種組成について（第9表）

複数の土器で土器棺を構成している場合の土器組成について検討する。構成土器数が2個の場合の器種組

第7表 墓域・居住域別集計

		件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
墓域	周溝内土坑	15	7	7	1
	周溝覆土中(土坑不明)	6	3	2	1
	墓域内 単独土坑	7	3	3	1
	墓域内 単独 不明	1	0	1	0
居住域	環壕内(土坑?)	3	1	2	0
	住居址内(土坑、ピット)	4	3	1	0
	住居址内(掘り込み不明)	2	0	0	2
	居住域内 単独土坑	14	3	9	2
	居住域内 単独 不明	2	2	0	0
合計		54	22	25	7

第8表 構成土器数別集計

構成土器数	遺跡数	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
3個	4	4	1	2	1
2個	14	24	11	11	2
1個	18	26	10	12	4
合計		54	22	25	7

※棺身と同一個体破片で被覆は、1個(単体)扱いとした。

第9表 器種組成別集計

(3個体組成)	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
壺+壺+壺	1	1	0	0
甕+壺+壺	1	0	1	0
台付甕+壺+壺	1	0	1	0
壺+壺+甕	1	0	0	1
小計	4	1	2	1
(2個体組成)	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
壺+壺	12	3	8	1
壺+甕	8	7	1	0
壺+高坏	1	0	0	1
甕+甕	2	1	1	0
台付甕+高坏	1	0	1	0
小計	24	11	11	2

第10表 棺身器種別集計

	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
壺	43	19	18	6
甕(台付甕)	11	3	7	1
合計	54	22	25	7

第11表 棺蓋器種別集計

	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
壺	17	5	11	1
甕	11	8	2	1
高坏	2	0	1	1
合計	30	13	14	3

第12表 土器結合方法別集計

	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
合わせ口	1	0	1	0
向い合わせ	13	7	4	2
重ね合わせ	6	1	4	1
入れ子	1	1	0	0
被覆	8	2	5	1
破片被覆	5	3	2	0
合計	34	14	16	4

成は、棺身が壺形土器に対して壺形土器を組み合わせる例が最も多く12例、次いで壺形土器に甕形土器を組み合わせる例が8例であるが、時代的傾向として弥生時代中期の例では壺形土器に甕形土器を組み合わせる例が7例と多いのに対して、弥生時代後期には壺形土器に壺形土器を組み合わせる例が8例と、こちらの方が多数となる。3個の土器で構成される事例は総数が4例と少なく、壺形土器だけで構成される例、甕形土器だけで構成される例、壺形土器に甕形土器の例、甕形土器に壺形土器の例がそれぞれ1例ずつであり、特に偏重はない。

⑦棺身・棺蓋に利用される土器の器種について（第10・11表）

棺に利用される器種の傾向として、まず棺身に使われる土器の器種は、壺形土器43例、甕形土器（台付甕形土器を含む）が11例であり、8割を壺形土器が占めていて、弥生時代中期後葉から古墳時代前期まで圧倒的優位は変わらない。また棺蓋に使われる器種は、壺形土器、甕形土器、高坏形土器がある。棺蓋土器は開口部を閉塞するための土器であり、破片の場合もあって、また棺身自身の破片を用いている場合もある。総数では壺形土器が17例、甕形土器が11例、高坏形土器が2例である。時期別には弥生時代中期後葉には棺蓋13例中5例が壺形土器、8例が甕形土器で、甕形土器がやや多いのであるが、弥生時代後期には棺蓋14例中11例が壺形土器であり、壺形土器が大多数となっている。

⑧土器結合方法について（第12表）

構成土器数2個以上の場合の土器の結合方法を、6つに大別した。6つの方法は、ほぼ同じ大きさの土器を向かい合わせにして口縁部と口縁部を合わせるように組み合わせる「合わせ口」、大きさに差のある土器の口縁と口縁部もしくは開口部を向かい合わせにして一方がもう一方にやや被さるように組み合わせ方を「向かい合わせ」、一方の土器の口縁部（開口部）に同じ向きでもう一方の土器を押し込むように重ねる「重ね合わせ」、一方の土器の中にもう一つの土器を同じ方向で押し込んで重ねてしまう「入れ子」、一方の土器の開口部もしくは全体をもう一つの土器で覆ってしまう「被覆」、土器の破片を用いて棺身となる土器の口縁部もしくは開口部を覆う「破片被覆」とした。「合わせ口」と「向かい合わせ」は類似形態であるが、改めて区別することとした。この6つの分類では、「向かい合わせ」とした組合せ方が13例と最も多く、次いで「被覆」8例、「重ね合わせ」6例、「破片被覆」5例の順に多く、「合わせ口」と「入れ子」が1例ずつという結果となった。

⑨棺身遺存状態について（第13表）

棺身である土器の遺存状態は、上部が削平されている事例も含まれているが、出土時の状態で、完形もしくはほぼ完形のものから、口縁部欠失、頸部以上欠失、胴部上位以上欠失、胴部上半欠失、底部欠失などがある。土器の一部が欠失していることは、後世に削平されたことによって欠失している場合以外は、意図的な行為による結果として重視すべきことであり、「打ち欠き」と称して区別すべきであるが、ここでは遺存状態として「欠失」と表記する。完形およびほぼ完形の状態で遺存している例は14例あり、弥生時代中期後葉の例が4例、弥生時代後期の例が8例、古墳時代前期の例が2例で、弥生時代後期の例が多い。口縁部ないし胴部上半欠失の例の中では、頸部以上欠失が16例と最も多く、次いで胴部上位以上欠失が12例あり、この2種類で28例あって集成事例の半数以上を占めている。このうち頸部以上欠失の事例は弥生時代中期後葉

第13表 棺身土器遺存状態別集計

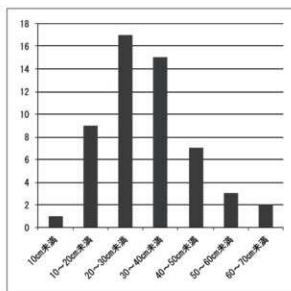
	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
完形・ほぼ完形	14	4	8	2
口縁部欠	4	2	1	1
頸部以上欠	16	9	6	1
胴部上位以上欠	12	5	4	3
胴部上半欠	1	1	0	0
底部欠	4	2	2	0
脚台部欠	2	0	2	0
不明	1	0	1	0
合計	54	23	24	7

第14表 埋設状態別集計

	遺跡数	件数	弥生中期	弥生後期	古墳前期
正位	18	28	11	11	6
正斜位	5	6	3	2	1
横位(横位?)	7	12	5	7	0
逆位	5	5	2	3	0
逆斜位	2	2	1	1	0
不明	1	1	0	1	0
合計		54	22	25	7

第15表 棺身土器サイズ(胴部最大径)の分布

	10cm未満	10～20cm未満	20～30cm未満	30～40cm未満	40～50cm未満	50～60cm未満	60～70cm未満
中期	1	4	8	4	4	1	0
後期	0	5	7	7	2	2	2
古墳前期	0	0	2	4	1	0	0
全体	1	9	17	15	7	3	2



第2図 棺身土器サイズ(胴部最大径)分布図

には9例であるが、弥生時代後期には6例と明らかな減少傾向を示している。

㊦埋設状態（出土状態）について（第14表）

土器棺と推定される土器が埋設された状態には、棺身となる土器を基準として、口縁部を上方へ向けて置いた正位、口縁部を下へ向けて置いた逆位、横たえた状態に置いた横位、口縁部を上にして斜めに置いた正斜位、口縁部を下にして斜めに置いた逆斜位などの埋設状態が認められる。

最も多く認められるのは正位の状態であり、18遺跡で28例がある。次いで多いのが横位の状態であり、7遺跡で12例がある。その他には正斜位が5遺跡6例、逆位が5遺跡5例であり、逆斜位は2遺跡2例のみである。いずれの配置状態も時期別には弥生時代中期後葉と弥生時代後期とではほぼ同数で、弥生時代中期後葉には正位が11例、横位が5例、その他が6例の合計22例、弥生時代後期には正位が11例、横位が7例、その他が7例の合計24例と大きな変化はないが、古墳時代前期には正位が6例、正斜位が1例、合計7例となっており、総数が大きく減るとともにほぼ正位のみとなる。

㊦棺身土器サイズ（胴部最大径）について（第15表、第2図）

土器棺の大きさを棺身土器の胴部最大径と比較すると、最小は河原口坊中遺跡（第1次）P21地区YH1号土坑の8.2cm、最大は河原口坊中遺跡（第1次）P23地区YH4号土坑の63.6cmで、分布の中心は20cm～30cm未満の範囲に17例、30cm～40cm未満の範囲に15例がある。時期別には、弥生時代中期後葉では22例のうち8例が20cm～30cm未満の範囲にあって最も集中しているのに対して、弥生時代後期では25例のうち20cm～30cmの範囲に7例、30cm～40cm未満の範囲に7例が分布している。事例が集中するサイズは通常使用されている土器の一般的な大きさであると考えられ、棺身土器サイズの分布状況は特別な状況を示すものではなく、全般的には日常的な土器サイズを反映しているものと考えられる。

おわりに

神奈川県内における弥生時代中期後葉から古墳時代前期の土器棺集成として57事例を集成し、このうち54事例を対象として項目毎に傾向をまとめた。前述したとおり土器棺として確実な事例はごく限られた数しかないため、「土器棺の可能性はある」と推定されるものを集成対象に含めて検討を行ったものである。この点をご理解いただいた上で、集成内容を利用していただきたい。また、集成の遺漏などについてご指摘いただけると幸いです。

（池田）

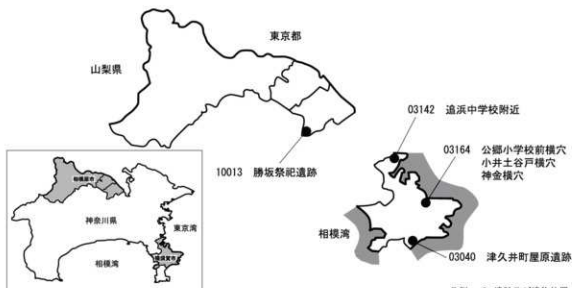
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(13)

― 通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介 ―

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関係する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要21号には相模原市の10013番、横須賀市の03040・03142・03148・03164番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～19に掲載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は相模原市10013番：新山保和、横須賀市03040番：柏木善治、03142・03148番：岸本泰緒子、03164番：長澤保崇が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1.の細目は「調査（踏査）年月」「資料保管場所」「記載内容概略」とし、2.は「〔遺跡及び〕遺物（遺構）概要」「掲載図書」「掲載図書概略」「小結」などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
なお、個人情報に関する記述は一部割愛して掲載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれらから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

凡例 ● 遺跡及び遺物位置

年報番号 相模原市10013 勝坂祭祀遺跡（3） 相模原市磯部字勝坂1904

1. 赤星ノートの内容

〔調査（踏査）年月日〕

昭和52年7月31日

〔資料保管場所〕

個人蔵

〔記載内容概略〕

前号でも、明治村通信の封筒に入っていた資料について紹介したが、本号も引き続き本封筒に入っていた資料について紹介する。

今回詳細する資料は、県史考古資料の神奈川県内主要遺物調査表2通で、県史考古資料Bと書かれている（第2・3図）。2通とも調査者として「赤星直忠」と押印され、資料1には「控①」、資料2には「控②」と記載されている。

第2図には、時代区分に「古墳」、所在地に「相模原市磯部小字勝坂」、分類に「祭祀遺跡」と記載されている。手書きで「出土と調査までのいきさつ」と記載され、概略として「出土地は〇〇氏宅北側（同氏所有地）50m程の水田、昭和36～37年頃、畑地を約1mほど掘り下げ（土は東側畑地に盛り上げていた）たとき、頭大の河原石を径5m位丸くならべた内側から滑石製模造品多数が出土、付近から土師器（和泉式、鬼高式）が出、又焚火あとがあったという、土器との伴出状態、遺物の集散状態等、深さの差など不詳」などと記載されている。

遺物については、「出土品 銅鏡2（個は数）鉄鏡1、子持曲玉1、剣鏡等石模造品、碧玉製大管玉1等、及び土師器（出土の半数くらい）」と記載されている。

文献として、『神道考古学講座 第2巻 原始神道期一』雄山閣刊（昭和47年）と記載されている。その他に、入手資料として、写真「一部」、測図「一部」と協力者として、「塚田、小暮」と記載されている。

第3図には、資料1と同様に、時代区分に「古墳」、所在地に「相模原市磯部」、地形図名の二万五千分の一に「原町田」、分類に「祭祀遺跡」と記載されている。概略として、「鳩川上流左岸、勝坂磯部所在有鹿神社旧地（湧泉傍になる）の南方約100m、居宅北50mばかり水田中。鳩川の流れる浸蝕崖の東岸裾に近い部分。昭和36～37年頃、土地所有者が畑を水田にし鳩川の水をひこうとした際当時畑表面より約1m下に頭大の河原石が径5mくらい円形に配された中から滑石製模造品多数が散在的に発見せられたものという、土師器の破片となったものはすべて捨てられたもので、全体の様子は不明である。今和泉式と鬼高式がある。出土遺物は多いが本日見せられたのは半数以下である。」と記載されている。

出土遺物について、青銅鏡2（1は半欠）鉄鏡1、滑石製模造品6、剣形12、曲玉形6、白玉3、小白玉48、刀子形1、碧玉製大管玉1、土師器2と記載されている。入手資料として、写真「〇」、測図「〇」と協力者として、「塚田」と記載されている。また、文献として、『「祭祀遺跡」の諸形態』の中「神奈川県磯部」の次（神道考古学講座 第2巻 原始神道期一）雄山閣刊（昭和47年）と記載されている。また、「②のみ県史へ提出する」と記載されている。

2. 記載資料の整理

〔遺構・遺物概要〕

本資料は、神奈川県相模原市勝坂祭祀遺跡についての概略である。遺跡の地理的環境、発見の経緯、遺構の概要、遺物の概要について順番に記載されている。第2図と第3図は、ほぼ同様の内容が記載されているが、幾つかの点で相違が見受けられる。まず、第2図のみに記載されている内容として、遺跡の部分に「出土と調査までのいきさつ」と書かれている点が挙げられる。次に、第3図のみ見られる点として、「②のみ県史へ提出する」と地形図名に「原町田」と書かれている点が挙げられる。資料の内容を比較すると、第2図の内容の方が詳細と言える。以上の点から、第3図の内容が県史に提出された神奈川県内主要遺物調査表であり、第2図の内容を精査して第3図を完成されたことが窺える。

次に、資料の加筆修正されている点を見てみると、資料右上にある調査日時が7月31日が二重線で消されており、9月21日と訂正されている。この点は両資料に共通する。第3図を見ると、「9月21日（報告日付）」と記載されており、資料調査が7月31日であり、報告日付が9月21日であったことが想起される。また、協力者の部分を見てみると、第2図では「塚田、小暮」とあるが、第3図では「塚田」1人に変更されているが、理由は不明である。

資料内容を見ると、この調査表の作成段階では、赤星氏は勝坂祭祀遺跡出土遺物の半分しか実見しておらず、土師器の破片はすべて捨てられたことが聞き取りされている。

本資料は、同封されている資料から『神奈川県史 資料編20 考古資料』を作成する時に集めた基礎資料と見られる。今回の資料は、その時の調査資料の一部であり、他の資料も多数あることから、次回以降も継続して資料紹介を進め、内容を精査することとしたい。

(新山)

引用・参考文献

- 大場磐雄 1972 『神道考古学講座 原始神道期一』第2巻 雄山閣出版
 神奈川県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史』資料編20 考古資料
 相模原市 2010 「勝坂有鹿谷祭祀遺跡資料報告書」『相模原市史調査報告書』6

馬史考古資料五

神奈川縣內主要建物遺物調査表

9 R₂/W

52 = 25240000

扣①

[illegible]

第2圖 県史考古資料B（控文①）

历史考古资料 3

神奈川县内主要废物处理表

942/ (455-4)

△) 年 5 月 27 日西曆

50(2)

神奈川県内主要

[illegible]

第3圖 県史考古資料B（控文②）

年報番号 横須賀市03040 横須賀市津久井町屋原 土師器

1. 赤星ノートの内容

津久井町屋原遺跡とされた一連の資料が綴じられている。野比中学校の教員から赤星博士宛に手紙が出され、「津久井の道路工事をしたところから生徒が土器を拾ってきた」と記されている。昭和26年12月13日付の書簡である。

一連の資料は、近在とみられる浅間社前の石塔類にかかる記録や、道路工事で切土された法面に確認された堅穴断面の3基分の略測図、1号堅穴から採集された弥生土器片の模式図と、現地の位置を示した略測図、堅穴からやや離れた場所から出土した土師器杯の図面が2点と、そのほか、方言を記録したようなメモ書きもある。ここでは、古墳時代後期とみられる土師器杯について紹介する。

[調査(踏査)年月]

綴じられた資料の表紙には、昭和26年12月14日と記されており、手紙を受けてすぐに現地へ行かれたことが推察される。

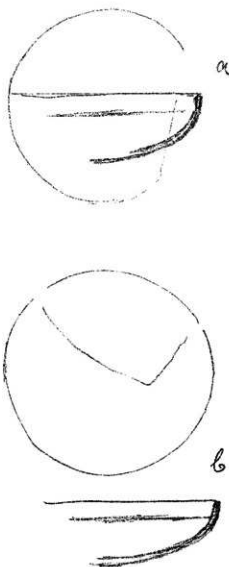
[記載内容概略]

土師器杯の図には、「町屋原」「26. 12. 13」「野比中学校」というようなメモが書かれ、口付は発見口とみなされる。それぞれ法量が計測され、aとされたものが口径10.5cm、器高3.5cm、身厚1cmで、bは口径10.8cm、器高3.5cm、身厚0.8cmである。色調などの情報が書かれていないため、赤採の有無については不明である。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

簡単なスケッチのようであるが、特徴は示されている。a・b共に丸底で口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部と体部の境で緩やかな稜ができる。bの図から完形ではないことが窺え、断面形と共に口径等のサイズが似ていることから、同一個体の可能性もあろう。形状からは6世紀後半から7世紀にかかる須恵器杯の蓋を模倣したような印象を受ける。それぞれの堅穴の時期は定かではないが、おそらくは集落の一端で、道路工事に破壊された遺構から出土したことも考えられる。(柏木)



第4図 a及びbとメモ書きされた土師器杯(約1/2)

年報番号 横須賀市03142 追浜中学校附近出土土師器スケッチ 横須賀市追浜

1. 赤星ノートの内容

【調査（踏査）年月】

出土時期は昭和39年5月、実測日は昭和39年6月22日とメモがある。

【記載内容概略】

横須賀市博物館の封筒に入っており、「追浜 土師」とタイトルが記されている。中身は2枚あり、1枚は遺物出土位置の略地図（第5図）、もう1枚は土師器の実測図と土師のスケッチ（第6図）である。

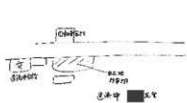
第5図には、遺物の出土位置が略地図によって示されている。「追浜中学校」（横須賀市夏島町12所在）の上には「自動車学校」とあり、これはかつてあった京急追浜自動車学校（同夏島町3所在、昭和37年開校、平成14年閉校）を指すと思われる。現在は高層マンションになっているこの自動車学校跡と追浜中学校の位置関係からみると、この略図はおおよそ東南方向を上にして描かれているようである。中学校西側の敷地に「州土地 39年5月」とあり、位置関係からみて、現在の追浜中学校グラウンド西側、あるいはさらに西側の横須賀市北図書館（同夏島町12）あたりかと推測される。またその下に「追浜中 ○○先生」とメモがあり、遺物の出土を届け出た人物かと思われる。

第6図は方眼紙で「追浜中学校附近」とあり、土師器の埴1点の実測図、および土師のスケッチ4個分が描かれている。土師は「土師六個 淡黄土色～淡褐色」とメモがあり、実際には6個が出土したようである。これらはスケッチのため法量は確かでないが、おおよそ直径3.4～3.7cm、形状にはバラつきがあるようである。土師器埴体部は「淡黄褐色」とあり、底部付近に「黒色」とある。口径9.0cm、胴部最大径13.1cm、高さ9.9cmを測る。丸底で、口縁部上部にわずかに稜をもち垂直に立ち上がる。底部付近は黒斑がみられるようである。表面調整についての記載はない。

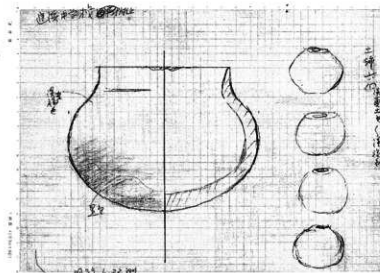
2. 記載資料の整理

【遺構・遺物概要】

土師器埴は調整の記載がないため詳細は不明だが、器形からおおよそ古墳時代後期の遺物と考えられる。



第5図 出土位置略図



第6図 土師器スケッチ

年報番号 横須賀市03148 昭和25年三浦半島古代文化展覧会写真・スケッチ・目録

1. 赤星ノートの内容

【調査(踏査)年月】

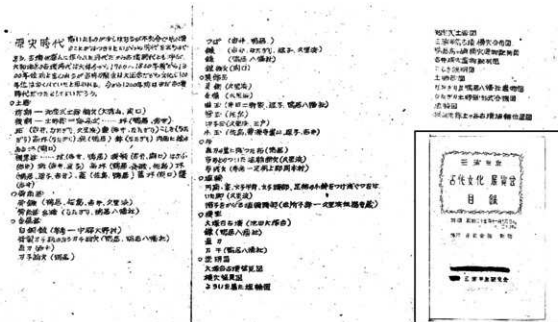
横須賀市市民会館で昭和25年11月16～20日に開催された、「三浦半島古代文化展覧会」を観覧した記録である。

【記載内容概略】

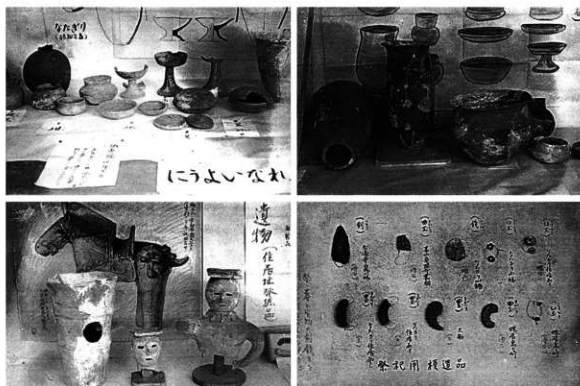
三浦半島古代文化展覧会の目録(第7図)、観覧時の展示記録写真(第8図)、およびそのスケッチ(第9図)からなる。同展覧会は横須賀市市民会館別館にて、三浦半島研究会によって開催された。目録には各時代の解説と展示品の一覧が記載されている。先史時代(縄文時代)・弥生式文化・原史時代(古墳時代)の三部に分けて解説がされているが、ここでは古墳時代該当部分(日録原文では原史時代部分)のみを取り上げた。時代についての概説は、往時の研究史を感じさせる内容となっている。展示遺物は、三浦半島の遺跡出土品を中心に参考資料として県内他地域の遺跡出土品をいくつか混じえて構成されている。第8図右下の写真にある石製模造品は目録には見られないが、なたぎり遺跡や島崎横穴出土品と書かれている。同じく第8図左下の写真には埴輪が写っており、目録には久里浜出土とある。蓼原古墳出土品と思われる、赤星自身が昭和12(1937)年に発掘をおこなった際の出土品であろう。これら埴輪の出土地点は後に改めて調査されて前方後円墳と判明し、蓼原古墳とされた。背景のパネルにある馬形埴輪は、京都大学に所蔵される同古墳出土埴輪と推測される。考察等のメモ書きは特に見られない。(岸本)

参考文献

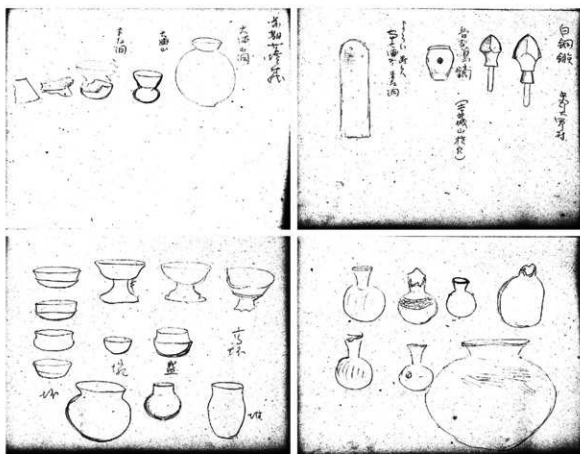
神奈川県県民部県史編集室1979『神奈川県史』資料編20 考古資料、神奈川県
横須賀市編2010『新横須賀市史』別編考古



第7図 古代文化展覧会目録(原史時代部分)と表紙



第8図 展覧会展示風景写真



第9図 展示遺物スケッチ

年報番号 横須賀市03164 公郷小学校前横穴・小井土谷戸横穴・神金横穴 横穴墓スケッチ
横須賀市公郷町、三春町

1. 赤星ノートの内容

〔資料概略〕

広告紙2枚の裏面に描かれた横穴墓のスケッチ。3箇所の横穴墓群を記録しており、余白にはそれぞれの調査期日や出土遺物のメモ、略地図などが記されている(第10図・第11図)。

横穴1：公郷小学校前横穴 大正13年3月15日、地主が庭園を作るため山腹の笹を刈ったら発見(4穴)。昭和51年、屋敷の背後山腹を削り横穴群露出(6穴)。昭和51年12月20日～翌1月に調査。横穴墓には調査順に番号が付けられ、向かって左側から4・1・2・5・6・3号と記される。出土遺物のメモは1・2・5号穴のみを記載。横穴墓のスケッチは1～3号穴のみとなっており、奥壁に棺室を造り付ける3号穴については法量メモを含めて特に細かく描かれている。

横穴2：小井土谷戸横穴群 昭和4年2月11日調査(6穴)。略地図に横穴墓の番号が記載され向かって右から順に1～6と付される。出土遺物の記載はなく、横穴墓のスケッチは棺室をもつ1号のみ。「昭和23年2月1日、確認、6穴存。昭和26年11月11日、確認に行ったら左の2穴(№5、6)見当たらず」とある。

横穴3：神金横穴 昭和3年12月28日調査(赤星、太刀川、島崎、渋谷)。4穴が略地図に記され、向かって左から1～4号の番号が付けられる。スケッチは1号穴のみで、遺物出土位置の略図が記されており、切子玉・琥珀玉・金属鏝・直刀片・鏝片・刀子片とともに火葬骨が出土している。

2. 掲載資料の整理

〔遺跡概要〕

公郷小学校前横穴は滝ヶ崎横穴群とみなされ、公郷町4丁目に所在し公郷小学校北側の平作川を望む南斜面に開口する。3号穴は玄室アーチ型で前壁が鈍角となる右片袖羽子板形を呈し、奥壁に接して一段高い位置に造り付け石棺をもつ。石棺前端とほぼ同位置の天井面には4個の小円孔が配される。1号穴は玄室アーチ型で前壁のない無花果形、2号穴は玄室アーチ型で前壁鈍角の羽子板形、4号穴は玄室奥半のみ残存(半筒型か)、5号穴は玄室ドーム型で円形に近い隅丸胴張り方形、6号穴は玄室ドーム型で前壁鈍角の羽子板形を呈する。出土遺物などから7世紀代を通して構築されたと考えられている。小井土谷戸横穴墓群は公郷町5丁目に所在。神金横穴墓群の南方約400mに位置し、谷奥付近の丘陵東側崖面に現在5穴が確認されている。神金横穴墓群は三春町6丁目に所在。山崎小学校の南西、公郷隧道が貫く丘陵の南端斜面に4穴が開口する。本資料の1号穴を除く2～4号穴は未調査である。

〔掲載図書〕

赤星直忠 1927『三浦記(三)』『考古学雑誌』第17巻第10号 日本考古学会(滝ヶ崎横穴墓群)

赤星直忠 1957『横須賀の発展』『横須賀市史』横須賀市史編纂委員会(小井土谷戸横穴墓群)

赤星直忠 1954『横穴壁刻顔面画の解釈』『日本考古学協会 第13回総会発表要旨』日本考古学協会(神金横穴墓群)

〔小結〕

近在する三箇所の横穴墓群における棺室構造(滝ヶ崎横穴墓群3号穴・小井土谷戸横穴墓群1号穴)や火葬骨の検出(神金横穴墓群1号穴)といった特異な例を資料化したものと考えられ、ノートの作成期日は明

らかでないが調査年月にひらきのあるこれらの横穴墓群を、昭和51～52年の滝ヶ崎横穴墓群調査後にまとめたものと推察される。棺室構造の例としては滝ヶ崎横穴墓群の北東約1kmに位置する佐野横穴墓群3号穴があり、赤星氏が「三浦記（一）」のなかで棺室を伴う4・5号穴とともに紹介し当時から注視していたことがわかる。棺室構造の横穴墓は、逗子市の小坪横穴群や沼間横穴墓群などにも見受けられるが鎌倉市・藤沢市が分布の中心となっており、三浦半島内においては極めて類例が少ない。本資料にとりあげられた公郷町付近は、三浦半島内に限ればこうした特異な構造をもつ横穴墓が局所的に集中する地域と言えよう。

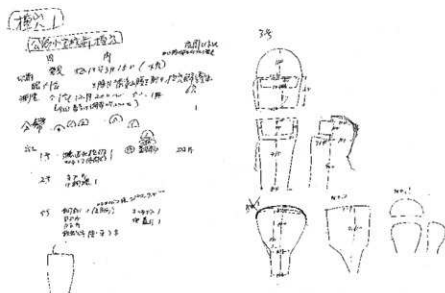
(長澤)

引用・参考文献

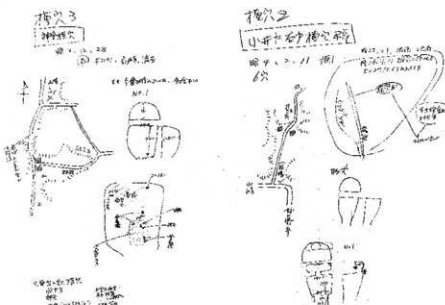
赤星直忠 1927「三浦記（一）」『考古学雑誌』第17巻第4号 日本考古学会

横須賀市 2010『新横須賀市史 別編 考古』

横須賀考古学会 2003『三浦半島考古学辞典』



第10図 公郷小学校前横穴スケッチ



第11図 小井土谷横穴群・神金横穴スケッチ

神奈川県における古代の鉄(6)

— 生産関連遺構・遺物の集成 —

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームでは、2010年に行われた公開セミナー『よみがえる古代東国の鉄文化～相模・武蔵の発掘調査成果から～』をきっかけに、県内各地で出土した鉄生産に関連する遺構および遺物に注目し集成を開始した。その目的はどのような規模、施設で生産が行われていたのか、地域差があるのかを明らかにすることである。昨年度は補遺と平塚市域の集成を完成させることを優先した。その結果、神奈川県内の鉄生産に関連する遺構と平塚市域の遺物についてはひとまず集成が完了した。このため、今年度は得られたデータから分析に着手する。

なお、これまで5回に渡り『かながわの考古学』研究紀要において鉄生産に関連する遺構・遺物の集成を行ってきた。ところが分析する段階において改めて見直したところ、数量や名称等に少なからず誤りがあることが判明した。このため正誤表を作成し文末にまとめた。

2. 製鉄・鍛冶関連遺構

明確な製鉄遺構は、横浜市区内に所在する上郷深田遺跡のみとなる。第16号炉では上方を小判型に掘りこみ、左右には平場を作りだしている。上部には多量の炉壁が遺存する。同類として、同遺跡の10～12号炉、17号炉が上げられ、時期は7世紀末から8世紀と報告されている。

鍛冶関連遺構は県内33遺跡において確認されている(第1図)。官衙や寺院、集落など各遺跡の性格は異なる。

3. 鍛冶炉の分類

ここでは神奈川県内において検出された鍛冶炉をもつ遺構を取り上げ、その属性から分類を行う。神奈川県内の鍛冶炉の集成はすでにいくつか行われている(富永 2004、平野 2006、齊藤 2010)。また、鍛冶炉の形態や構造に基づいた分類についても先行研究が存在する(安間 1995・2000、松崎 2006)。本稿の集成も基本的にこれらの成果に基づいて、2013年3月までに新たに報告された資料等を追加して作成したものである。遺存状況が良好な鍛冶炉の検討からⅠ～Ⅴ類までを設定した(第2図)。

Ⅰ類：竈をもつ堅穴遺構内にある鍛冶炉—6遺跡8遺構から8基検出。

北川貝塚 H2号住居(横浜市) 3.2m×3.2mのほぼ正方形で東に竈を持つ9～10世紀のH2号堅穴住居の床中央にある。長径110cm、短径90cm、深さ15cmの楕円形を呈する土坑で、坑内は被熱して焼土で満たされ、鉄鍋片や鉄器、椀型滓、羽口が出土していると報告されている。

同類として六ノ城遺跡NH27号住居(平塚市)、天神前第7地点1号堅穴住居(平塚市)、上鶴間下原遺跡第3地点S16・7・8(相模原市)、平和坂遺跡2号住居(座間市)、岡上-4遺跡第2地点H24号住居(川崎市)などがあり、北川貝塚と同様に鍛冶炉が床面中央に設置されるか、また竈の向かいの壁面付近

に1基ないし2基設置されている。時代は8世紀から10世紀に相当し、また1類が検出される遺跡は県内全域に存在し、どちらにも偏りは見受けられない。

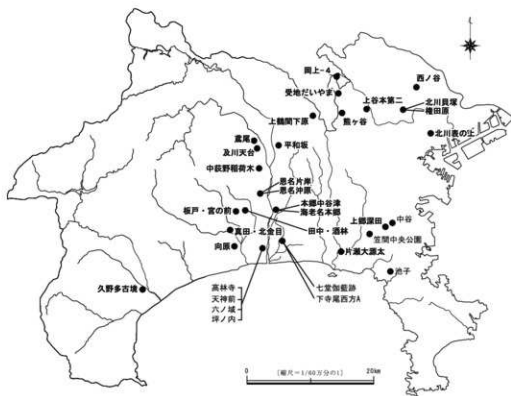
II類：竈を持たない堅穴遺構内にある鋳冶炉-3遺跡3遺構から4基検出。

海老名本郷遺跡 第20号住居址（海老名市）南北5.7m、東西3.0mの長方形を呈する竪穴住居内に直径110cm内外、深さ25cmの不整形形の掘り方の中に粘土を充填、その中央部に上径約40cm、底径約30cm、深さ13cmの炉が1基検出された。炉の内面は灰色で飴状に融解した鉄滓様の硬化面であり、時代は11世紀代と報告されている。同類として本郷中谷津遺跡第4号住居内炉址（海老名市）、向原遺跡39号住居址（平塚市）が挙げられる。向原遺跡39号住居址は住居址とはなっているが3.0m×3.3mの不整形形で、壁上に柱穴が巡っておりやや特殊な様相を呈して、2基の炉址を持つ。各遺構とも床面中央か、壁面付近に1基ないし2基設置されている様相はⅠ類と変わらない。年代は9世紀中から11世紀代とⅠ類よりやや後出しているように見受けられる。

なお、中荻野稲荷木遺跡第1号堅穴住居(厚木市)、六ノ城遺跡NH9号住居、真田・北金目遺跡群29B区S1057(平塚市)、西ノ谷遺跡R堅穴、H2・6住(横浜市)もⅡ類となる可能性はあるが、調査区外へ移り、或いは他遺構等に切られる事により竈の存在が判然としないうため、Ⅰ類の可能性もあり除外した。

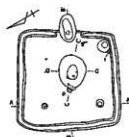
Ⅲ類：大型堅穴遺構内にある鍛冶炉—3遺跡3遺構から95基検出。

六ノ城遺跡 NH1 鍛冶工房（平塚市）東西13.0m、南北5.7m以上、深さ25cmの規模で検出されている。



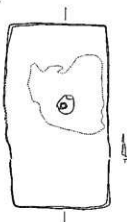
第1図 神奈川県内の製鉄・鍛冶関連遺構検出遺跡

I 類



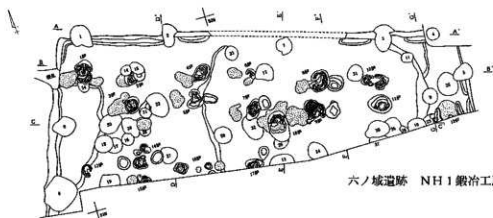
北川貝塚 H2号住居

II 類



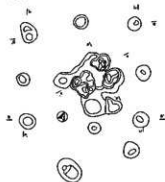
海老名本郷遺跡 第20号住居址

III 類



六ノ城遺跡 NH1 鍛冶工房

IV 類



及川大台遺跡 第2号鍛冶址

V 類



上谷本第二遺跡 B-1地区1号遺構

第2図 鍛冶関連遺構分類図

降に始まったと報告されている。

同類として坪ノ内遺跡鍛冶工房（平塚市）は東西約12m以上、南北約5m以上の長屋状堅穴に2列に並んだ径40cm前後の円形鍛冶炉が70基検出され、時代は8世紀末から9世紀初頭と報告されている。六ノ城遺跡NH1鍛冶工房と同様な規模や構造を呈しているが、時代的に坪ノ内遺跡鍛冶工房が先に操業していた事がわかる。受地だいやま遺跡J区テラス遺構（横浜市）は北壁約12m、西壁約5.0m、東壁2.3mの規模で検出されている。遺構内西側には床面積約10.6㎡の円形を呈する堅穴鍛冶工房址、東側には火床遺構が7基検出されている。時期は9世紀末葉から10世紀中葉である。

IV類：周囲に柱穴列のある鍛冶炉—1遺跡1遺構から1基検出。

及川天台遺跡 第2号鍛冶炉（厚木市） 本址に関わるものとして周辺に2間×2間の側柱式の建物址が検出されている。炉を中心に小鍛冶作業場の小屋と考えられる。炉址は焼土が円形に残る個所が3か所確認され、焼土の下に硬化した面が認められる。硬化面は不整形円形を呈し、中央のくぼみ部分も揃い凹凸で、くぼみ部には薄く粘土を敷く。硬化面の規模は直径50cmと70cmの円形状が2基、他の1基は45cm×70cmである。床面にロームで形を設け、簡単に粘土を張り付けて炉としている。周囲の柱穴列の規模は、東列3.0m、西列2.8m、北列3.4m、南列3.5mを計る。柱穴は円形を呈し、直径45～65cmで深さは21～50cmである。椀型滓を含む鉄滓、羽口片が出土している。時期は不明であるが、周辺の堅穴住居址の年代から、9世紀から10世紀代の中で営まれたものと考えられている。同類として明らかな遺構は今回の集成段階では確認できていない。

V類：単独で検出される鍛冶炉—6遺跡10遺構から11基検出。

単独で検出される鍛冶炉は、大形で掘り込みや平場の構造を作り出しているものと、ほぼ掘り込みを持たずに炉底が被熱硬化しているものがある。

高林寺遺跡第7地点SX01鍛冶工房址（平塚市）は炉址が2基検出されており、大量の鉄滓、輪の羽口、須恵器壺、瓶等がまとまって出土した。1号炉は断面U字型で平面形は舟形、2号炉は浅い台形の断面で、不整形を呈している。時期は9世紀後半と報告されている。上谷本第二遺跡B-1地区1号遺構（横浜市）、池子遺跡群No.5地点2号野鍛冶址（逗子市）も大形で掘り込みを持つ鍛冶炉である。

ほぼ掘り込みを持たずに炉底が被熱硬化しているものとして、笠間中央公園遺跡1号鍛冶遺構（横浜市）、六ノ城遺跡NH1鍛冶炉（平塚市）、西ノ谷遺跡鍛冶炉F1～F4（横浜市）、池子遺跡第5地点1号野鍛冶址（逗子市）が挙げられる。池子遺跡の1号野鍛冶址は炉床と考えられる部分から北約3.0mの位置にビット様の掘り込みが検出された。内部には多量の焼土及び炭化物と共に鉄滓が密に入っており、処理に係わる残骸と考えられている。時期は9世紀代と報告されている。V類が検出される遺跡は県内全域に存在し、遺構の時期は9世紀が中心である。

4. 国府域および周辺の鍛冶関連遺物について

ここでは相模国府域および周辺出土の鍛冶関連遺物について概要を述べる。推定相模国府の範囲についてはかながわ考古学財団調査報告書242『湘南新道関連遺跡Ⅱ』の第4図を参考とした（（財）かながわ考古学財団 2009）。

鍛冶関連遺物は、埴塙・取坂・金床石・輪羽口・鉄滓・銅滓、工具類としては鉄鉗・鑿などが出土している（第3～6図：遺物が出土した調査地区をベタ塗り）。

金床石は六ノ城遺跡・神明久保遺跡(No. 215)から出土している。鍛造製品の製作を示唆するように堅穴建物跡からの出土が目立つ。鉄滓は精錬滓か鍛錬滓かの判断はできない。推定国府城内の遺跡の出土量が突出して多く、国府周辺域とは出土量に差がある。銅滓は神明久保遺跡で顕著な出土状況がみられるが、山王A遺跡(No. 209)、四之宮山王B遺跡(No. 213)、六ノ城遺跡などでの出土量は少なく、国府城内において偏在する。工具類については鉄鉋が大会原遺跡・六ノ城遺跡(No. 58)で出土している。鉄鉋に比べ鑿の出土量は多いが、鍛冶炉を含む遺構とセットで出土する例は少なく、周辺の遺構からの出土が多いことが特徴である。

出土遺物の分布傾向としては推定国府城内の北東側および中央から東よりで最も集中し、推定国府城周辺ではまばらに分布する状況である。遺跡および遺物量の濃淡からおおよそ3つのまとまりとして捉えることができる。

1つめは坪ノ内遺跡(No. 180)や隣接する六ノ城遺跡である。ここでは埴塙・取瓶・金床石・輪羽口・鉄滓・銅滓・鉄鉋・鑿といった遺物が出土した。

2つめは天神前遺跡(No. 204)と神明久保遺跡で、鉄滓・銅滓・輪羽口・取瓶・鑿が出土している。

3つめは高林寺遺跡(No. 192)で、鉄滓・銅滓・輪羽口・鑿が出土している。以上のまとまり全てから鍛冶関連の遺構が検出された。

推定国府城周辺に関しては、遺物が特に集中する箇所として捉えられず、出土する遺物の種類が鉄滓のみの遺跡も少なくない。しかしながら東中原E遺跡(No. 155)は鉄滓・銅滓・取瓶を出土しており、周辺の遺跡と比較して相対的に出土量が多い。その他報文のみであるが、隣接する新町遺跡(No. 192)は鉄滓と羽口が出土している。いずれも鍛冶遺構は未検出であるが、この遺跡の周辺での操業が行われていた可能性は否めない。

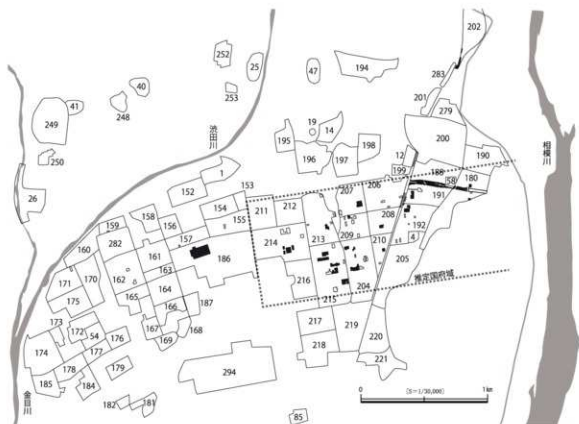
概ね鍛冶工房とされる遺構が検出されている地点では濃密に関連遺物が集中するが、それ以外では出土量としては少ない。鍛冶関連遺物の分布は鍛冶遺構の分布と一致しており、遺構と遺物量は比例しているといえる。

5. おわりに

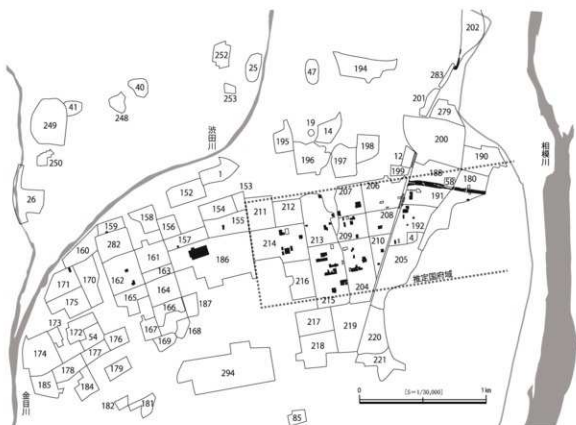
これまで神奈川県内の鍛冶関連遺構の類型化と国府城における鍛冶関連遺物の様相について述べてきた。神奈川県全体でのまとめには至らないが、平塚市、特に国府城とその周辺についての遺構と遺物について触れ、結びとしたい。

国府城の鍛冶炉については、Ⅳ類を除くすべての類型が見られた。Ⅰ・Ⅱ類は鑿の有無を除けば、通常の堅穴建物跡と変わらない規模と構造を持つ。Ⅲ類は受地だいやまの例を除けば平塚の国府城に集中しており、従来の見解と同じく官衙遺跡に特有な集約的な生産施設と評価できる。Ⅴ類は仮設的な上屋の存在も想定されるが、類例が乏しく今後の資料の増加を待ちたい。複数の類型が国府城に混在する理由については不明であるが、官司のもとに編成された工人の出自や工程ごとに分業が行われた結果を示しているとも考えられる。

鍛冶関連遺物では、鉄滓や少量ではあるが銅滓の出土から、多彩な金属関連の操業が行われていたと言える。また、国府城以外の鍛冶関連遺物がまとまって見られる地区の存在は工房がより広範囲に広がる可能性を示している。今回の集成結果は先行研究を踏襲した内容となったが、遺構の類型化と遺物ごとの分布図を作成したことでより詳細な状況を示すことが出来た。



第3図 羽口分布図



第4図 鉄滓分布図

— 55 —

『かながわの考古学』16～20 正誤表

●かながわの考古学 16

P57

・桑野市

11 羽口 草山遺跡 H 2 号竪穴住居址→H 2 号竪穴建物に訂正

P58

・厚木市

15 羽口 及川天台遺跡 備考欄に5点(1点誤化)
 16～18 羽口 及川天台遺跡 1号鍛冶炉、掲載以外に他9点あり
 19～23 羽口 及川天台遺跡 2号鍛冶炉、掲載以外に他47点あり

P59

・逗子市

39～78 羽口 池子遺跡群 出土遺構は遺構外

P61

・桑野市

92～99 鉄滓 草山遺跡 備考欄にある「・他鉄滓21点中8点碗型」をトル

P62

・厚木市

116 鉄滓 及川天台遺跡 法量 長さ9.1 幅8.8 厚み4.5 重量338g 碗型滓に訂正
 備考欄 1,250gをトル

P63

117 鉄滓 及川天台遺跡 法量 幅7.6 厚み3.1 重量194gに訂正
 備考欄 1,250g→鉄滓718gに訂正
 121・122 及川天台遺跡 1号鍛冶炉出土 備考に鉄滓1,174gを追加
 123～125 鉄滓 及川天台遺跡 2号鍛冶炉 備考欄にその他として11,491g出土

P64

・逗子市

鉄滓 池子遺跡群 1号鍛冶 備考欄に2,662点27,417.8g追加 文献に『池子遺跡群VI』
 鉄滓 池子遺跡群 2号鍛冶 備考欄に414点6,738.8g追加 文献に『池子遺跡群VI』

●かながわの考古学 17

P49

・平塚市

2 取瓶 四之宮山王B遺跡 備考欄 須恵器坏F12→12トル
 3 取瓶 四之宮山王B遺跡 備考欄 須恵器坏F13→13トル
 4と5の間 取瓶 四之宮山王B遺跡 S I 05 出土位置 覆土 法量 長さ13.0 幅4.0 厚み5.0
 遺構の時期10世紀第3～4四半期 備考欄に須恵器・坏F追加

P51

79 羽口 神明久保遺跡 S I 20竪穴住居址 孔径欄 95.0トル
 89 羽口 遺跡名 四之宮下郷遺跡→四ノ城遺跡に変更

下から二番目のセル

遺跡名 四之宮下郷遺跡→鹿見堂B遺跡に変更

一番下のセル

遺跡名 四之宮下郷遺跡→道半地遺跡に変更

P52

99 羽口 四之宮高林寺 S X 01 備考欄に鍛冶工房址追加

P57

六ノ城遺跡 15住 備考欄 金床石 報文のみ

●かながわの考古学 18

P52

6 鉄滓 神明久保遺跡 法量 厚み15.5→1.55gに変更
 8 鉄滓 神明久保遺跡 S I 18→S I 08に変更

P52

22～25 鉄滓 神明久保遺跡 S D 1・S D 4・S D 5→S D 01・S D 04・S D 05

P53

33 鉄滓 構之内遺跡 遺構の時期 9世紀中葉追加
 34 鉄滓 構之内遺跡 遺構の時期 9世紀後半追加

神奈川県における古代の鉄(6)

35	鉄滓	構之内遺跡	法量 長径4.2 短径4.8 厚み1.7 重量33.0g に変更
37	鉄滓	構之内遺跡	ビット216→ビット125に変更 重量89.2→89.4に変更
38	鉄滓	構之内遺跡	ビット216→ビット125に変更
P54			
45	銅滓	山王A遺跡	遺構の時期欄 時期不詳→9世紀中葉以降に変更
48	銅滓	四之宮山王B遺跡	備考に銅滓付須恵器坏片追加
48と49の間			
		山王B遺跡	遺構外 重量 208.3→283.0に変更
51	鉄滓	山王B遺跡	法量 短径 [2.1] → [2.6] に訂正
P55			
上から6～21行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→六ノ城遺跡に変更	
	鉄滓	高林寺遺跡	1区-S D01→S D03に変更
	鉄滓	高林寺遺跡	2区-S 103 142→142.0に変更
上から22～33行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→諏訪前A遺跡に変更	
	鉄滓	高林寺遺跡	3区-S 112 397→397.0に変更
P56			
	鉄滓	高林寺遺跡→諏訪前A遺跡に変更	
	鉄滓	高林寺遺跡	3区-P30 12→12.0に変更
	鉄滓	高林寺遺跡	4区-S 132 35→35.0に変更
	鉄滓	高林寺遺跡	4区-S K09 80→80.0に変更
	鉄滓	高林寺遺跡	4区-S E01 1,211→1,211.0に変更
P57			
上から1～10行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→諏訪前A遺跡に変更	
上から11～15行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→四ノ城遺跡に変更	
	鉄滓	高林寺遺跡	7区-S B01 36.4→3.4に変更
上から16・17行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→ 通り西遺跡に変更	
上から18行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→ 林A遺跡に変更	
上から20～26行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→ 鹿見堂B遺跡に変更	
上から27行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→ 道平地遺跡に変更	
上から28・29行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→ 鹿見堂A遺跡に変更	
	鉄滓	高林寺遺跡	16区-S K02→18区-S K02
	鉄滓	高林寺遺跡	16区-S K06→18区-S K06
上から30・31行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→ 道平地遺跡に変更	
上から32・33行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→ 五合屋敷遺跡に変更	
P58			
上から1～6行目			
	鉄滓	高林寺遺跡→ 五合屋敷遺跡に変更	
55の下のセル			
	鉄滓	高林寺遺跡	重量109.0g →109.4g に変更
56・57の下のセル			
	鉄滓	高林寺遺跡	遺構の時期欄 8世紀～10世紀→8世紀～11世紀に変更
P59			
65	鉄滓	高林寺遺跡	出土遺構 その他→S E01に変更
上から8番目のセル			
	鉄滓	高林寺遺跡	S X01→S X01・02あわせて出土鉄滓283点21,338g、スラッグ498点4,949点に変更
上から9番目のセル			
	高林寺遺跡	S X02	種別 銅滓→鉄滓に変更、備考781点トル
76	鉄滓	高林寺遺跡	一覧トル
82	鉄滓	梶谷原A遺跡	P184 重量 180.0→83.0gに変更
P60			

P60	91 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径4.2	短径5.1	厚み3.2に變更	
	92 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径3.9	短径4.4	厚み2.4に變更	
	93 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径5.3	短径8.0	厚み3.0に變更	
	94 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径5.8	短径7.4	厚み2.3に變更	
	95 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径4.4	短径6.5	厚み2.2に變更	
	96 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径4.3	短径4.6	厚み1.6に變更	
	97 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径5.8	短径7.8	厚み3.2に變更	
	98 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径5.0	短径6.1	厚み2.3に變更	
	99 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径6.3	短径6.9	厚み2.2に變更	
P64	100 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径4.2	短径4.0	厚み3.8に變更	
	101 鉄滓	稲荷前B遺跡	法量	長径4.7	短径5.0	厚み3.1に變更	
	106 鉄滓	六ノ城遺跡	一覽トル				
	107 鉄滓	六ノ城遺跡	遺構の時期欄	7世紀後半～8世紀をトル			
	109 鉄滓	六ノ城遺跡	NH30号住居	重量98.0g追加			
	※鉄滓・六ノ城遺跡・天神前遺跡第10地区追加						
	鉄滓	六ノ城遺跡	NH1号鍛冶炉	報文のみ	33,377.9g		
	鉄滓	六ノ城遺跡	NH9号住居	報文のみ			
	鉄滓	六ノ城遺跡	NH26号住居	報文のみ	7,363.3g		
下から7番目	鉄滓	六ノ城遺跡	NH27号住居	報文のみ、粒状鉄滓			
	※NH4・5・13・14・22・24・28～31・33号住居から総じて20～50gの鉄滓出土している。						
	233 鉄滓	七ノ城遺跡	SK01→1号土坑に變更				
	235 鉄滓	天神前遺跡 第7地点	1号堅穴住居址	法量	長径10.5	短径9.4	厚み4.1に變更
	236 鉄滓	天神前遺跡 第7地点	1号堅穴住居址	法量	長径10.6	短径9.5	厚み5.3に變更
	237 鉄滓	天神前遺跡 第7地点	1号堅穴住居址	法量	長径10.3	短径8.5	厚み2.8に變更
	鉄滓	天神前遺跡第10地区	1号不明遺構・1号土坑・32号溝状遺構追加				
	※概要報告の為、報文のみ						
	栗山雄輝1997『天神前遺跡第10地点発掘調査概要報告書』平塚市教育委員会						
下から6番目	鉄滓	天神前遺跡	3号堅穴住居址	遺構の時期	9世紀後半		
	鉄滓	天神前遺跡	4号堅穴住居址	遺構の時期	9世紀中葉		
	242 鉄滓	天神前遺跡	S107	重量	599.0→12.4gに變更		
	255 鉄滓	山王久保遺跡	出土遺構	遺構外→第1トレンチ遺構外に變更			
	262～264 銅滓	東中原E遺跡	遺構の時期	トル			
	P66・67						
	265～313『かながわの考古学20』に再録している為、トル						
	P67						
	・横浜市	下から2番目に追加					
銅滓		四之宮高林寺遺跡	SK02	重量	66.5g	備考欄に12点追加	
315 埴埴		西ノ谷遺跡	R堅穴・鍛冶炉	法量	厚み0.6	底径3.5追加	
316 埴埴		西ノ谷遺跡	R堅穴・鍛冶炉	法量	器高5.1	厚み1.7	底径6.5
317 埴埴		西ノ谷遺跡	R堅穴・鍛冶炉	法量	底径6.5追加		
319 埴埴		西ノ谷遺跡	R堅穴・鍛冶炉	法量	底径5.3追加		
321 埴埴		西ノ谷遺跡	出土遺構にI溝追加				
322 埴埴		西ノ谷遺跡	9-J地区	法量	底径6.7追加		
323 埴埴		西ノ谷遺跡	9-I地区	備考欄に須恵器追加			
P68	324 羽目	受地だいやま遺跡	J区堅穴	法量	長さ(8.6)	幅(7.6)	厚み3.8 孔径(2.1)に變更
	325 羽目	受地だいやま遺跡	J区堅穴	法量	長さ(4.8)	幅(6.0)	厚み3.6 孔径(1.7)に變更
	326 羽目	受地だいやま遺跡	D区堅穴	法量	長さ(3.8)	幅(4.0)	厚み2.0 孔径(1.6)に變更
	327 羽目	受地だいやま遺跡	D区堅穴	法量	長さ(1.8)	幅(1.8)	厚み1.8 孔径(1.5)に變更
	328 羽目	受地だいやま遺跡	A区一括	法量	長さ(6.1)	幅(6.7)	厚み4.0 孔径(1.8)に變更
	329 羽目	受地だいやま遺跡	D区一括	法量	長さ(7.7)	幅(8.0)	厚み2.8 孔径(2.4)に變更
	330 羽目	上郷深田遺跡	出土遺構	1号北側柱孔状ビット→1号北側柱穴状ビットに變更			
	333 羽目	西ノ谷遺跡	R堅穴	出土位置に床面追加			
	334 羽目	西ノ谷遺跡	R堅穴	出土位置に床面追加			

神奈川県における古代の鉄(6)

P69	338 羽羽 西ノ谷遺跡	10-I (清N)	法量 長さ8.6 幅7.5 孔径2.6追加 備考欄に被熱追加
・川崎市			
P69	340 羽羽 大ヶ谷戸遺跡	2号堅穴住居址	法量 長さ(2.7) 幅(6.5) 厚み2.1追加
鉄滓・銅滓の表ひながた部分の重要に(g)追加			
上から12番目のセル			
	上郷深田遺跡	種別部分 鉄滓→鉄塊に変更	
	341 鉄滓 西ノ谷遺跡	9-K	重量554.0→554.4gに変更 備考欄に焼型滓
上から15番目のセル			
	笠間中央公園遺跡	1号鍛冶遺構	種別部分鉄滓→鉄塊に変更 法量 長径6.5 短径3.5 厚み3.0 重量75.9g追加 遺構時期 8世紀代トル 備考欄 本文記載のみ→委託分析記載のみ
上から16番目のセル			
	笠間中央公園遺跡	17号住居址	備考欄 本文記載のみ→写真のみ
上から17番目のセル			
	笠間中央公園遺跡	26号住居址	備考欄 本文記載のみ→写真のみ
上から18番目のセル			
	笠間中央公園遺跡	39号住居址	法量 長径4.5 短径2.5 厚み1.5 重量19.0g追加 備考欄 本文記載のみ→委託分析記載のみ
上から19番目のセル			
	笠間中央公園遺跡	43号住居址	備考欄 本文記載のみ→写真のみ
鉄滓追加	笠間中央公園遺跡	1号鍛冶炉	法量 長径5.5 短径4.5 厚み2.0 重量63.9g追加
鉄滓追加	笠間中央公園遺跡	6号溝・遺構外	法量 長径4.0 短径4.5 厚み1.7 重量61.8g追加 焼型滓
342 鉄滓	北川表の上遺跡	56号住	法量 長径5.1 短径5.6 厚み2.8 重量88.7gに変更
343 鉄滓	北川表の上遺跡	56号住	法量 長径3.9 短径2.8 厚み2.1 重量39.8gに変更
P70	344 鉄滓 北川表の上遺跡	56号住	法量 短径3.3 厚み1.3 重量35.2gに変更
345 鉄滓	北川表の上遺跡	56号住	法量 長径5.5 短径6.5 厚み2.9 重量123.2gに変更
鉄滓・銅滓の表ひながた部分の重要に(g)追加			
・川崎市			
	346 鉄滓 上麻生日光台遺跡	S I 10	法量 長さ6.8→6.75に変更 備考欄に焼型滓追加
	347 鉄滓 上麻生日光台遺跡	S B 06	備考欄に焼型滓追加
	348 鉄滓 上麻生日光台遺跡	S F 01	出土位置欄に埋積土中追加
	鉄滓 上麻生日光台遺跡	H 2号住居	備考欄 写真のみ掲載は1点追加
・横浜市			
352・353・355	鉤型 上郷深田遺跡	遺構時期欄	9世紀前半代 トル
●かながわの考古学 19			
P49			【鍛冶遺構】→【製鉄・鍛冶関連遺構】に変更
P50	9 鍛冶 六ノ城遺跡	NH 1鍛冶炉	出土遺物に鍛造剥片、焼型滓、粉状滓追加 ※2・3号鍛冶炉もあったが、壊されている記載を追加
P51	14 鍛冶 天神前遺跡	1号堅穴住居址	南北2.3m→2.9mに変更
	遺構 第7地点		
	15 鍛冶 天神前遺跡	1号不明遺構	出土遺物に鉄滓追加
	遺構 第7地点		
	天神前遺跡	6～9号堅穴住居址	出土遺物トル。遺跡全体から多量の羽羽、鉄滓出土に変更
	第10地点		
	16 鍛冶 高林遺跡第7地点	S X 01鍛冶工房址	出土遺物に鉄滓、羽羽追加
	遺構		

P52

20	鍛冶 遺構	池子遺跡群 No.5 地点	1号野鍛冶 ¹	出土遺物に鉄滓追加
21	鍛冶 遺構	池子遺跡群 No.5 地点	2号野鍛冶 ¹	出土遺物に鉄滓追加

P53

24	鍛冶 遺構	受地だいやま遺跡 受地だいやま遺跡	J区テラス状遺構 D区鍛冶関連第1号土坑	出土遺物に有足鍋脚部・土製品追加 開口部約2.9×2.6m 深さ100～20cm 追加
		受地だいやま遺跡	D区鍛冶関連第2号土坑	開口部2.4×2.3m 深さ50～15cm 追加
		受地だいやま遺跡	D区鍛冶関連第3号土坑	開口部90×80cm 深さ35～25cm 追加

P54

25	鍛冶 遺構	上谷本第二遺跡	B-1地区1号遺跡→B-1地区1号遺跡に訂正
----	----------	---------	------------------------

P55

40	鍛冶 遺構	北川貝塚	楕円形→楕円形に訂正 9～10世紀→10世紀代に訂正
41	鍛冶 遺構	笠間中央公園遺跡	1号鍛冶遺構 8世紀代→トル 17・26・43号住居址→鍛冶に関する遺構の記述なしの為削除
43	鍛冶 遺構	権田原遺跡	9～10世紀→トル

下から4行目

		笠間中央公園遺跡	17・26・39・43号住居址	トル
--	--	----------	-----------------	----

●かながわの考古学 20

P65

260	鉄塊	向原遺跡	199号竪穴住居址	覆土下層	法量	長さ3.5	幅2.5	厚み0.4～0.7に変更
261	鉄塊	向原遺跡	199号竪穴住居址	覆土	法量	長さ1.8	幅1.4	厚み0.9に変更
262	鉄塊	向原遺跡	199号竪穴住居址	覆土	法量	長さ2.8	幅1.4	厚み0.4に変更
263	鉄塊	向原遺跡	199号竪穴住居址	覆土追加				

※遺構の時期は10世紀前半～中頃

【参考文献】

- 齊藤真一 2010『よみがえる古代東国の鉄文化』『相模国・南武蔵の鉄生産と鉄器の流通』東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー発表資料
- 富永樹之 2004『神奈川における古代集落・官衙・寺の鍛冶―神奈川の古代製鉄・鍛冶遺構―』考古論叢神奈河 第12集
- 平野卓治 2006『横浜市の古代製鉄関連遺構』横浜市歴史博物館調査研究報告 第2号
- 松崎元樹 2006『南武蔵の古代鍛冶関連遺跡と鉄器生産』武蔵野 第82巻第2号
- 安間拓己 1995『古代の鍛冶炉―その形態および鍛冶工程との関連について―』考古学研究 第42巻第2号
- 2000『古代の鍛冶遺跡』製鉄史論文集たたら研究会創立四〇周年記念

※本文の執筆は川嶋実佳子・相良英樹・諏訪間直子・西田真由子が、全体の編集は相良英樹が担当した。第2図は川嶋、諏訪間が、第1・3～6図は相良が、正誤表は高橋香が作成した。正誤表作成に際し、各報告書への確認作業は奈良・平安時代研究プロジェクトチーム各員が行った。第2図は1/120で掲載した。

¹ 製鉄遺構については、従来からその存在が知られている上郷深田遺跡以外に比較となる新たな資料の報告はない。このため今回の分類対象からは除外した。遺構図についても同様の理由から割愛する（紀要19、P47の第5図を参照）。

神奈川県の中世遺跡(1)

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

神奈川県には、武家の古都である鎌倉、関東一円を広く支配した小田原北条氏の本拠である小田原と、中世を通じて主要な地域が存在する。鎌倉・小田原は中世史の重要性から、考古学による発掘調査や研究だけでなく、文献史学の研究も盛んである。県内では鎌倉・小田原以外にも中世遺跡は数多く見つかり、海老名市上浜田遺跡や綾瀬市宮久保遺跡など早くから注目されている遺跡も存在する。しかし、総じて見ると、鎌倉・小田原の注目度が非常に高いため、それ以外の地域の研究は後手に回っている状況である。

近年、神奈川県内では大規模開発に伴う発掘調査が多く、特に県央地域では、資料の増加が著しいといえる。そこで本プロジェクトでは、この県央地域に主眼を置き、神奈川県内の中世を検討することにしたい。まず、(1)として、県央地域の中世遺跡を検討するにあたり、発掘調査成果の基礎データを集成することにした。

例言

1. 神奈川県内の県央地域については、明確な地域区分があるわけではない。今回は紙幅の都合もあり、秦野市、厚木市、大和市、伊勢原市、海老名市、座間市、綾瀬市を取り上げることとする。
2. 基礎データの集成には、平成27年3月までに刊行された発掘調査報告書を基本とし、それ以外の書籍については、情報入手可能な範囲でデータに加えることとしている。
3. 集成表の項目は以下のとおりである。
 - (1) 遺跡名は、発掘調査報告書に記載されている名称を原則とし、一部現行の神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に基づき、文献とは異なる遺跡名を使用しているものもある。
 - (2) 所在地は、発掘調査報告書に記載されている住所・番地を記載している。なお、合併により市町村の変更があった場合は、新市町村に含めている。ただし、発掘調査報告書の記載を優先し、新住所・新番地への変更は行っていない。また、複数地点や広範囲を調査したため、複数の番地が記載されている場合は、代表と思われる番地を記載している。
 - (3) 遺跡の種別は、発掘調査報告書の抄録に記載されているものを原則としている。ただし、抄録の記載がないものや、中世の成果と異なる場合は、内容に応じて変更している場合もある。
 - (4) 立地環境は、発掘調査報告書の該当部分を要約している。
 - (5) 遺跡の概要は、発掘調査成果を要約している。
 - (6) 年代は、発掘調査報告書に記載されている年代によっている。一部、現行の遺物編年により、発掘調査報告書と異なる年代を記載しているものもある。
 - (7) 文献は、巻末の参考文献と対応している。

桑野市

遺跡名	所在地	遺跡の種類	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
東田原中丸遺跡	東田原字中丸923番地	集落跡・居館跡	台地上	縄文・古墳時代、中・近世の複合遺跡で中世には埋葬遺構を確認。	中世	1
砂田台遺跡	南矢名165-1	集落跡	台地上	遺構・遺物ともに少ないが、農村集落と推定される中世遺構群が確認されている。	14c代	2
下大槻峯遺跡	下大槻664地	集落跡	段丘上	中世の建物跡群と集石墓群を出土。	13c～14c代	3
中里遺跡	上大字字沢509-1他	集落跡	段丘上	縄文・古墳～平安時代の集落が発見され、中世～近世の遺構が確認されているが、中世期の遺構は判然としない。	13c中葉～14c代	4
不弓引遺跡	鶴巻字不弓引	生産跡	台地上	中世遺構は溝状遺構、ビッドが少数発見されているが出土遺物がほとんどなく時期は明確ではない。	13c～16c代	5
鶴巻上ノ原遺跡	鶴巻字新野	集落跡	台地上	溝状遺構と焼土跡が発見されている。	13c後半～14c代	6
北矢名南蛇久保遺跡	鶴巻字新野	集落跡	台地上	中世集落跡の一部を出土。	13c～14c代	7
北矢名矢跡遺跡	北矢名字矢跡	散布地	台地上	中世の多量の木製品などが出土している。	13c後半～14c代	8
鈴ノ木遺跡	北矢名字田中234地	集落跡	台地上	古墳時代前期、平安時代の集落跡が発見され、中世前半期の遺物と集落跡と考えられる遺構群が出土されている。	13c～15c代	9
東田原中丸遺跡	東田原	集落跡・居館跡	台地上	中世前期の掘立柱建物跡が多数検出され、在地領主の居館跡と推定される。	12c末～13c中頃	10
鶴巻南遺跡群	鶴巻南地先	集落跡	台地上	台地縁辺部に中世集落を確認。	中世	11
東田原中丸遺跡	東田原	集落跡・居館跡	台地上	居館跡の範囲と中世後期の方形区画、北方で中世期の地下式坑や段切り遺構を確認。	12c末～15c代	12
鶴巻南遺跡群大原遺跡	鶴巻4丁目1518-1番地、1520-6番地	集落跡	台地上	道状遺構や土坑を検出しているが該期の出土遺物は認められない。	中世	13
島崎遺跡	鶴巻南一丁目1617番1ほか	集落跡	台地上	中世遺物を少量含む溝状遺構が発見されている。	中世	14
大岳院遺跡	尾尻・明星	集落跡	台地上	旧石器時代～近代にかけての複合遺跡で市内で初めて旧石器が確認された遺跡であり、中世では土坑1基を確認。	中世	15
東田原中丸遺跡	東田原水口1068番地・東田原清水1131番地	集落跡・居館跡	台地上	居館跡に関連する遺構が出土。	12c末～15c代	16
水神遺跡	今泉字上河原70番外68筆	集落跡	台地上	縄文時代中期、奈良・平安時代の集落跡、中世後期の遺構群を発見。	16c前半	17
今泉荒井遺跡	今泉字上河原70番外68筆	集落跡	台地上	縄文時代中期の配石遺構、古墳～奈良・平安時代の集落跡、中・近世期の土地利用を確認。	中世	18

厚木市

遺跡名	所在地	遺跡の種類	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
小野若宮遺跡	小野	居館跡	河岸段丘上	鎌倉時代初期から室町時代前半期にかけて造建が繰り返されていることが想定されている。	12c後半、14c後半～15前半	1
下伏野銅器遺跡	下伏野123-5番地	-	台地上	土坑より埋蔵容器と考えられる木桶と共に古銭が出土している。	15c後半～16c前半	2
林南遺跡	林588番地付近	墓	河岸段丘上	地下式坑1基が検出され、喪門付近で人骨が発見されている。	13c代	3
及川宮ノ下遺跡（第2区）	及川字宮ノ下		微高地	台地の微高地上に古墳時代、奈良・平安時代、中世～近世の遺構と遺物が発見され、地下式坑から観應三年銘の板碑が出土している。	中世	4
曾野No.1遺跡	長谷1549番地1外	集落跡	丘陵	奈良・平安時代の集落と中世後半の寺域に関する墓跡と考えられる遺構を出土。	15c末～16c代	5
東町二番遺跡	東町二番	集落跡・町屋	微高地	大山街道の宿場町厚木宿中核の中世から現代までの変遷を確認。	15c後半～16c代	6

戸室茅林遺跡第1地点	戸室字茅林1018番1ほか	集落跡	台地上	平安時代末～中世中期にかけての溝状遺構などの地境と考えられる遺構を確認し、近世には畑地へと変遷する。	中世末	7
戸室茅林遺跡第2地点	戸室字茅林1010番1、1010番8	集落跡	台地上	平安時代末～中世中期にかけての溝状遺構などの地境と考えられる遺構を確認し、近世には畑地へと変遷する。	13c代	8
愛甲宿遺跡第2地区	愛甲字宿1066番地ほか	集落跡	台地上	弥生時代後期の環壕の一部、平安時代・中世の集落跡を発見。	14c以降	9
下古沢駒飼遺跡	下古沢257-1外	集落跡	丘陵上	縄文時代～中世までの遺構・遺物とそれぞれの集落を確認。	15c以降	10
小野公所遺跡第2地点	小野字公所732-2外	集落跡	河岸段丘上	平安時代の集落が主体となる遺跡で平安時代末～近世にかけて各期の溝状遺構を検出している。	中世	11
旭町川田前遺跡	旭町二丁目1261外	集落跡	自然堤防上	古墳時代中期から近世に亘る遺構群を検出。	13c後半～15c代	12
御屋敷添遺跡第1地点	愛甲275番5外	集落跡	丘陵上	中世の土坑6基が検出され、1基より刀子と銭貨が出土している。	中世	13
御屋敷添遺跡第3地点 (No.1)	愛甲字御屋敷添365他	集落跡・墳墓跡	台地上	縄集中から豊富な鉄製品が出土しているが、中世の明確な帰属時期は不明瞭。	中世	14
御屋敷添遺跡第4地点 (No.2)	愛甲字御屋敷添411-1他	集落跡	台地上	道と土坑が検出され、中世に帰属すると推定されている。	中世	15
御屋敷添遺跡第5地点 (No.4)	愛甲字御屋敷添402-1他	集落跡	台地上	中世の縄集中、土坑などが検出されている。	中世	16
小野並木遺跡	小野字並木1224番-19	寺院跡	台地上	中世後期から近世にかかる遺構と遺物を検出し、寺院境内城の一面と推定されている。	15c後半～16c中頃	17
曾野No.1遺跡	長谷字曾野1549番1	墓	丘陵上	地下式墳内にある土坑状の落ち込みから人骨が出土し、土坑から北宋銭が6枚出土しているなど中世期の墓の可能性が考えられる。	15世紀末～16世紀前半	18
恩名神原遺跡	恩名字神原1582-3他	集落跡	丘陵上	縄文時代早期～中期にかけての集落と古墳時代前期～中近世にかけての集落を発見。	13c前半頃	19
宮の里遺跡	船子字宮の里1565-2外	集落跡・古墳	台地上	弥生時代後期の大型横穴式石室が確認され、遺構外から鎌倉時代の和鏡が木製容器内より出土している。	中世前半	20
中依知遺跡群	中依知先403他	集落跡、地下式坑	河岸段丘上	段丘平坦面に地下式坑群が造られ、大量の埋蔵銭や人骨、石製品、有機物などが出土している。	13c～15c代	21
城露遺跡	岡田1203-6他	集落跡	沖積微高地	溝に区画された居館を含む14～15世紀を中心とする集落を発見している。	14c～15c代	22
戸室寺々岡遺跡第2地点	戸室三丁目869番3外	散布地	台地上	年代を特定する遺物の出土は認められないが、近隣の調査結果から中世の区画溝と考えられる溝状遺構などが確認されている。	中世	23
林北遺跡第3地点	林四丁目415番外	集落跡	台地上	弥生時代後期と古墳時代後期の堅穴住居跡、中世居館の区各施設等が発見。	16c代	24
戸田小柳第2地点	酒井字山傳1974番11外	散布地	沖積微高地	弥生時代から中世以降にかけての溝が検出されている。	中世	25

大和市

遺跡名	所在地	遺跡の種別	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
公所横穴群		墓	急斜面	横穴墓5基には共通して地下室が作られており、1基よりかわらけ等が出土している。	中世前期 13～14c か	1
深見城跡	深見74他	城郭	台地縁辺部	出土遺物は少ないが、堀や土塁、郭をつなぐ土橋など中世後期の城郭遺構が確認されている。	中世後期 16cか	2
台山遺跡	下鶴岡乙三号2047-9他	集落跡	台地上	旧石器・縄文・平安時代～近世に亘る遺跡で、中世では土坑・溝状遺構が検出されている。	中世後半	3
上和田城山遺跡	上和田2557	城館跡	台地上	上和田城に関連した施設であった可能性が考えられる溝状遺構などが確認されている。	中・近世	4

下鶴間城山（伝山中修理助貞信墓蹟・大和市№181遺跡）	下鶴間甲四号727-2外	城館跡	台地上	13世紀から19世紀の遺物が出土し、15・17世紀代を中心とした居館址や窖と推定される遺構が発見されている。	15c代	5
神明若宮地区内遺跡C地区	福田510番地外	城館跡・ 鋳造跡	河岸段丘上	中・近世の梵鐘鋳造址や居館址を発見している。	15c後半～16c末	6
大和市№189遺跡	下鶴間372-1	集落跡	丘陵縁辺部	遺物の出土は認められないが、覆土の観察・掘り込み面から中世と判断される。	12c～16c代	7
深見城跡	深見74外	城館跡	相模野台地上	16世紀前半の城郭形態をほぼ完全に残っている。	14c後半～16世紀代	8
上草柳遺跡群大和配水池内遺跡（大和市№199遺跡）	上草柳1,846	集落跡	相模野台地上	旧石器時代が主体となり、相模野台地では数少ない文化層が発見されている。	古代～中世	9
中野原遺G地点	下和田字中ノ原927-2ほか	集落	台地上	掘立柱建物など古代の集落が検出され、中・近世の遺状遺構は遺跡西側に現存する旧滝山街道の可能性が考えられている。	中世後半	10

伊勢原市

遺跡名	所在地	遺跡の種類	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
下糟屋地区遺跡群	下糟屋字上町並2251-2ほか	散布地	伊勢原台地の東側縁辺部	中・近世が中心となる遺跡で、大規模な堀状遺構が発見されている。	16c代	1
伊勢原上粕屋田内遺跡	上粕屋369-1外	耕作地	台地上	東西方向の谷が埋没していく上で形成された遺跡で、縄文時代・平安時代・近世の遺構が検出されている。	中世	2
高森・一ノ崎遺跡（№37）	高森字一ノ崎822-1他	集落跡	台地上	中世の礎集中、溝などが検出されている。	中世	3
東富岡・北三間遺跡（№4）	東富岡字北三間407他	集落跡	台地上	中世前半の遺物が出土し、中世遺構と考えられる土壌墓が発見されている。	13c～15c代	4
上粕屋・川上遺跡（№5）	上粕屋字三本松195他	集落跡	台地上	13世紀代の遺物が少量出土しているが、中世に帰属する明確な遺構は断定されていない。	中世	5
石田・羽黒遺跡	石田字羽黒327-1	集落跡	台地上	古代～近世の道路と中世を除く遺構が発見されている。	14c代？	6
成瀬第二地区遺跡群高森地区	高森一丁目2356-1ほか	集落跡・墓 地・その他	台地上	中世の開墾に向けた集落編成の一端に居住域と考えられる遺構が発見された。	中世後半	7
沼目・坂戸遺跡第Ⅱ地点	池端字椿山241-14他	集落跡	台地上	縄文時代が主体となり、古代・中世の遺構が僅かに発見された。	中世	8
上粕屋・上尾崎遺跡（№10）	上粕屋字上尾崎656他	集落跡	台地上	16世紀以降の遺状遺構が検出されている。	16c以降	9
上粕屋・ノ引北遺跡（№11）	上粕屋字ノ引き907他	館跡・ 集落跡	台地上	14世紀中頃の館跡とその周辺に点在する遺構群を発見。	14c中頃	10
神戸・上宿遺跡	神戸字両毛703-5他	集落跡	台地上	13世紀中葉から15世紀後半を中心とした集落を発見。	13c中葉～15c後半	11
東大竹下原遺跡	桜台一丁目490番外	集落跡	台地上	15世紀後半から16世紀中葉にかけて掘立柱建物の変遷がみられる。	15c後半～17c頃	12
上粕屋・小山遺跡（№9・39）	大字上粕屋字小山250-5他	-	台地上	中世末の城塞施設櫓屋敷とされる丸山城の外郭施設の一部と思われる溝を発見。	中世	13
三ノ宮・下御原遺跡（№12西）	大字三ノ宮字中初川998-1他	集落跡・ 墳墓跡	台地上	中世の円形礎集中を検出している。	13c代	14
石田・源太夫遺跡第4地点	石田字源太夫641-1他	集落跡	台地上	中世から戦国時代までの土地の区画利用や出土遺物から中流階級の地方武士団が居住していた可能性がある。	13c～16c代	15
坪ノ内・貝ヶ窪遺跡	坪ノ内字貝ヶ窪	集落跡・ 墓域	台地上	縄文～古墳時代の集落が発見され、中世では土坑が多数検出されている。	中世	16
笠窪・谷戸遺跡	笠窪字谷戸	集落跡	台地上	中世期は遺状遺構が中心で、出土遺物は希薄である。	中世	17
三ノ宮・下谷戸遺跡（№14）	三ノ宮字下谷戸1100他	集落跡	台地上	縄文時代から古代にかけての集落が発見され、中世では古墳時代から続く旧河道と集落の一部を検出。	13c～14c代	18
下糟屋・丸山遺跡	下糟屋字丸山2210-11ほか	城館跡	台地上	中世城郭丸山城関連遺跡として位置づけられる。	15c～16c	19

下槽屋・上町並遺跡	下槽屋上町並2253ほか	城館跡	台地上	中世城郭丸山城関連遺跡として位置づけられる。	15c～16c	20
成瀬第二地区遺跡群下槽屋C地区第2・3地点	下槽屋下北ノ根2002外	集落・墓域・耕作地	低位段丘	方形区画内掘立柱建物址群と関連する遺構群が発見される。	戦国時代～中世後半	21
田中・万代遺跡	田中宇万代431-1他	集落跡、散布地	台地上	中世期には井戸、区画溝を中心として2つの遺構群があり、2カ所以上に集敷地が存在していた可能性を指摘される。	13c～15c代	22
成瀬第二地区遺跡群下槽屋C地区第1地点	下槽谷地内	城館跡	低位段丘	丸山城に関連する居住域や墓域と多数の地下式坑を発見。	戦国時代～中世後半	23
成瀬第二地区遺跡群下槽屋D地区	下槽谷地内	城館跡	低位段丘	丸山城の城郭遺構と思われる遺構は構造的に後北条氏の時代に造られたと判明している。	戦国時代～中世後半	24
成瀬第二地区遺跡群丸山E地区	伊勢原市下槽谷地内	城館跡	低位段丘の緩斜面	段切り状遺構内の掘立柱建物址や堀廻りを意識した位置に道路遺構などがあり、城郭に関連した一連の遺構が発見された。	戦国時代～中世後半	25
牛坂下原遺跡	板台一丁目479-1、481-1	集落跡	台地上	8世紀後半～18世紀初頭までの土坑やピットが検出されている。	中世	26
東大竹下原第2地点	板台一丁目472-3	集落跡	台地上の緩斜面	中世集落の典型的な立地形態を呈す一方、陶磁器類の出土や字名から商業流通地域に関連した集落として位置づけられている。	16c代	27
稲荷久保遺跡第Ⅲ地点	東大竹688番他	集落跡	台地上	中世の切り土状遺構(性格不明)1カ所を確認し、岡崎城との関連が窺われる遺構と指摘されている。	12c～15c代	28
板戸宮ノ前遺跡第Ⅱ地点	板戸宇宮ノ前588-1	集落跡	台地上の緩斜面	奈良・平安時代の集落が発見され、中世では溝状遺構など土地利用が希薄となる。	13c末～14c前半	29
石田・峯遺跡第Ⅳ地点	石田宇峯605番地3ほか	集落跡	台地の末端	弥生時代～平安時代までの遺構が確認され、中・近世の土坑・ピットと思われる遺構が多数検出されている。	中世以降	30
岡崎・天神下遺跡第Ⅴ地点	岡崎宇天神下6940番地2	集落跡	台地上	室町時代から戦国期、江戸時代後期以降の2枚の遺構面を検出し、後者では屋敷地区画の溝などが確認されている。	室町時代～戦国期	31
池端・金山遺跡	伊勢原一丁目131番地	集落跡	台地上	縄文時代中期から後期にかけての集落跡及び墓域を検出している。	中世(詳細不明)	32
板戸・八雲殿遺跡第3地点	板戸599-1、617番地	集落跡	台地上	中世期による段切り平坦部から建物跡や堀列が確認され、12世紀後半～18世紀頃の遺物が出土し15世紀代のものが大半を占める。	12世紀後半～16世紀代	33
丸山遺跡第Ⅳ地点	下槽屋宇丸山2、191-1番外	城郭	台地上	丸山城の虎口との関連される遺構や中・近世の掘立柱建物などが発見されている。	中世後期	34
丸山遺跡第5地点	下槽屋宇丸山2191-1外	城郭	台地上	同上。	中世後期	35
西富岡・向畑遺跡第2地点	西富岡宇向畑106番1	集落跡	台地上	古代の掘立柱建物や和同開珎などが出土し、切土整地層から灰輪・緑釉陶器が多く出土している。	中世	36
池端・金山遺跡第2地点	伊勢原1-34-6外	集落跡	台地上	縄文時代中期の集落跡や古代の道路状遺構を検出している。	中世前期	37
下槽屋・丸山遺跡	下槽屋2、181、2、202他	城館跡、集落跡	台地上	丸山城の北側外郭の堀周辺や内郭の堀割周辺の遺構群が検出された。	14c後半～15c代	38
池端・板戸遺跡	西丁目1711-8番地他	集落跡	台地上	底面に硬化範囲のある溝状遺構を確認。	中世	39
東富岡・西之窪遺跡	東富岡232-1他	-	谷戸	谷地の埋没部を利用した道状遺構が検出され、谷の肩部に掘立柱建物が存在する。	13c後半～15c代	40
東富岡・西之窪遺跡南三間遺跡	東富岡249他	-	谷戸	中世期には地下式坑群が展開する。	13c後半～15c代	41
東富岡・北三間遺跡第2地点	東富岡地先	-	谷戸	段切り上に上屋を持つと思われる竪穴状遺構などを発見。	13c後半～15c代	42
上粕屋・一ノ郷上遺跡	上粕屋地先	散布地	谷戸	ピット群が検出されるも詳細は不明である。	中世	43

上粕屋・石倉中遺跡	上粕屋1454-9番他、上粕屋1574-4番地	集落跡	台地上	現存する大山道の古い経路であると考えられる中世の道状遺構は側溝を有し、銭貨が出土している。	中世	44
西富岡・向畑遺跡 (No.160)	西富岡地先	集落跡	丘陵上	埋没谷肩部を整地し、掘立柱建物が発出されている。	中世	45
伊勢原市No.71遺跡、No.165遺跡	西富岡地先、栗窪地先	集落跡	台地上	遺物は確認されていないが、溝や竈などの耕作跡を検出。	中世	46
西富岡・向畑遺跡	西富岡地先	集落跡	丘陵上	堅穴状遺構などから磁器類がまとまって出土している。	13c~14c代	47
伊勢原市No.71遺跡	西富岡地先、栗窪地先	集落跡	台地上	中世遺物は少量だが溝状遺構、堅穴状遺構、井戸などの遺構を確認している。	16c代	48
子易・大坪遺跡	子易字南澤外	居館跡	段丘上	鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての大型の掘立柱建物を検出。	13c後半~14c代	49
浄業寺跡	三ノ宮字竹之内572-5外	寺院	山裾部	寺院関係の成果は得られていないが、溝や櫓列などの区画遺構が発見されている。	13c~15c代	50
西富岡・向畑遺跡	西富岡120番地他	集落跡	台地上	13世紀後半~16世紀前半の遺物が出土し、中世初期に土地利用が行われていた。	13c後半~16c前半	51
伊勢原市No.71遺跡	栗窪地先、西富岡地先	集落	台地上	低地際の広範囲に掘立柱建物や井戸などの遺構群が確認されている。	14c~15c代	52
西富岡・向畑遺跡	西富岡地先	集落跡	丘陵上	埋没谷際の平場から堅穴状遺構や井戸、多数のビットを検出。	中世	53
伊勢原市No.153遺跡	東富岡地先	集落跡	丘陵上	中世の円形土坑が発出されている。	中世	54
伊勢原市No.163遺跡	上粕屋地内	-	丘陵上	13世紀から14世紀代に帰属するの石敷道路状遺構が発見されている。	13c~14c代	55
子易・大坪遺跡	子易字南澤外	-	段丘上	堅穴状遺構や土坑、杭列などが検出されている。	中世	56
子易・中川原遺跡	子易地内	-	段丘上	埋没谷上に中世遺構群が展開する。	中世	57
神成松遺跡第4地点	上粕屋地内	城館跡	扇状地上	中世期には堅穴状遺構や溝状遺構などを検出し、13世紀後半~14世紀前半を主体とした磁器類が少量出土している。	13c後半~14c前半	58
神成松遺跡第5地点	上粕屋1429番3外	集落跡	扇状地上	中世遺物が少量出土し、扇状地を造成した段切り状遺構と2体の人骨を埋葬した土坑墓などが成果として挙げられている。	12c末~14c前半	59
神成松遺跡第3地点	上粕屋地内	-	扇状地上	区画を有する溝状遺構や中世初期の遺物がみられることから上杉氏に関連する有力層の存在が推測されている。	13c~15c代	60
上粕屋・秋山上遺跡	上粕屋2905番1外	集落跡、散布地	台地上	埋納銭 (4747枚) が出土し、地下式坑では排水路としての溝が連結された例が確認され、居館と密接なつながりのある遺跡と推定される。	15c後半~16c後半	61
神成松遺跡第7地点	上粕屋1402-2他	集落跡、散布地	扇状地上	中世では東西方向の溝状遺構群を検出し、中世初期の遺物が出土しているが、構築年代は定かではない。	中世	62
上粕屋・和田内遺跡 (第4次調査)	上粕屋2916-1番地他	集落跡	台地上	中世前期の掘立柱建物などを検出。	中世前期	63
上粕屋・石倉中遺跡 (第3地点)	上粕屋	集落跡	台地上	大山に向かって伸びる「青山通り」北東側に屋敷の存在が明らかになっている。	中世後半	64
西富岡・向畑遺跡	西富岡地先	集落跡	丘陵上	現農道直下より石敷路が検出され、16世紀頃から構築された様相。	16c頃	65
栗窪・林台遺跡、栗窪・林遺跡	東富岡地先、栗窪地先	集落跡	台地上	近隣の中世遺構の分布が本調査によって広がっていることが明らかになった。	14c後半~16c代	66
東富岡・南三間遺跡	東富岡240外	集落跡	丘陵上	中世では鍛冶関連の遺構や遺物が検出され、野書きされた硯などが出土している。	中世	67
子易・中川原遺跡	子易地内	-	段丘上	中世の呪符木簡が出土し、市内で初めての出土事例として貴重な資料として注目される。	中世	68
伊勢原市No.163遺跡	子易字南澤161外	-	段丘上	中世面では近接の調査結果と同様に道状遺構や弧状石列が発出されている。	中世	69

海老名市

遺跡名	所在地	遺跡の種類	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
上郷中世墓群	上郷320	散布地、集落跡	微高地	表土下の遺跡全体に河原石が厚く散在する荒廃地の状況を示し、部分的に河原石が積まれている。	中世	1
本郷遺跡	本郷2274（富士ゼロックス海老名事業所内）	集落跡、居館跡	台地上	旧石器～中世に至る複合遺跡で、中世には方形区画内の居館跡が発見されている。	中世	2
本郷遺跡	本郷2274（富士ゼロックス海老名事業所内）	墓域、集落跡	台地上	火葬墓1基より骨片と銅銭が検出されている。	中世末	3
本郷遺跡	本郷2274（富士ゼロックス海老名事業所内）	墓域、集落跡	台地上	土坑墓6基が検出され、かわらけ・銭貨が出土している。	中世末	4
本郷中谷津遺跡	本郷地区学習等供用施設内	集落跡	台地上	弥生時代後期・古墳時代・奈良・平安時代の集落跡が発見され、中世では墓域などが確認されている。	15c中頃～後半	5
本郷遺跡	本郷2274（富士ゼロックス海老名事業所内）	墓域、集落跡	台地上	旧石器～中世に至る複合遺跡で、中世以降には墓域とする一画が検出されている。	中世	6
四大圃遺跡	河原口1109-1	水田跡	河岸段丘	海老名地域で初めて調査された水田跡が確認されている。	13c前半～15c代	7
国分尼寺北方遺跡	上今泉2丁目1493-1外	集落跡	台地上	弥生時代中期後半の墓域と平安時代の集落が主体となり、中世では遺物が少量出土しているのみである。	中世	8
本郷遺跡	本郷2274（富士ゼロックス海老名事業所内）	墓域、集落跡	台地上	旧石器～中世に至る複合遺跡で、中世以降には溝状遺構が多く検出されている。	中世	9
国分尼寺北方遺跡	上今泉3丁目1523番地他	集落跡	台地上	古墳時代前期、平安時代の集落が発見され、中世期には溝状遺構や土坑が確認されている。	中世	10
大谷市場遺跡	大谷市場3960番地外	集落跡	丘陵上	古墳時代後期～奈良時代を中心とする大規模集落を確認し、中世期段階の遺構・遺物を少量確認している。	中世	11
門沢橋跡遺跡	門沢橋687番地他	集落跡	自然堤防上	中・近世の掘立柱建物や溝を検出している。	12c末～15c前半	12
本郷中谷津遺跡第14次調査	本郷字中谷津2700-1外8筆	集落跡	台地上	弥生時代末～古墳時代後期、奈良平安時代の集落跡が過去の調査で確認されている変遷と合致し、中世では区画溝が検出されている。	14c後半～15c中葉	13
望地遺跡第8次調査	望地二丁目355番ほか	集落跡	河岸段丘	縄文時代中期の集落が主体となり、11世紀後半～12世紀末に比定される遺物が出土している。	中世	14
中野探野遺跡	中野字月之浦349-2番地	集落跡	自然堤防上	古墳時代、中世、近世の土坑やピットと僅かな遺物が確認されている。	中世	15
跡堀遺跡	門沢橋1834他	集落跡	自然堤防上	礎板を持つ掘立柱建物跡を含むピット群や区画溝、井戸など居住関連の遺構が発見され、12世紀代からの遺物が出土しているが、13～15世紀にかけて中心となる遺構が多い。	12c～15c代	16
中野探野遺跡	中野13-1他	集落跡	自然堤防上	中世では現在の地割に因る建物跡や区画溝に推定される集落構造の一端が明らかになっている。	12c末葉～15c代	17
跡堀遺跡	門沢橋705他	集落跡	自然堤防上	中世では過去の調査成果からある一定の区画として考えられる溝状遺構が確認されている。	中世	18
上浜田遺跡	大谷北二丁目3942番4他	集落跡	丘陵上	中世遺物が出土する溝状遺構を検出し、周辺の調査成果と同様の遺構と考えられる。	中世	19
杜家字治山遺跡	杜家3636-1他	集落跡	自然堤防上	15～16世紀の屋敷地に伴う遺構群と考えられる掘立柱建物や区画溝が発見されている。	15c～16c代	20
河原口坊中遺跡第5次調査	河原口17	集落跡	自然堤防上	13世紀代の出土遺物と共に区画内に掘立柱建物認められ、一般的な集落とは異なる様相を示す。	13c代	21
跡堀遺跡	門沢橋705ほか	-	自然堤防上	中世の溝状遺構や井戸が検出されている。	中世	22

河原口坊中遺跡	河原口47番地他	集落跡・古墳	自然堤防上	13・14世紀の遺構群が検出され、溝状遺構に区画された屋敷地の様相を呈する。	13c中頃・14c代	23
河原口坊中遺跡	河原口52番地他	集落跡・墓域・旧河道	自然堤防上	中世に帰属する遺構や遺物はある程度確認されているが明確ではない。	15c～16c代	24
河原口坊中遺跡第6次調査	河原口字坊中14外	集落跡、散布地	自然堤防上	方形区画と推測される溝状遺構が検出され、中世期の有力者の存在がうかがえる。	14c代	25
河原口坊中遺跡	川158-2、155-2、163、254、257	集落跡	自然堤防上	硬化面を伴う掘立柱建物や13世紀代の遺物の羅列から在地領主の関連が示唆される。	12c後半～16c代	26

座間市

遺跡名	所在地	遺跡の種類	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
米軍キャンプ座町内遺跡	米軍キャンプ地内	集落跡	台地上	縄文・平安時代、中近世の集落跡を発見している。	14c～16c代	1
山ノ神遺跡	座間キャンプ座間内	集落跡	丘陵上	中世では何らかの区画を有する溝が検出されている。	中世	2

綾瀬市

遺跡名	所在地	遺跡の種類	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
宮久保遺跡	早川字新堀淵2031番地	居館址	台地上	I期（13世紀前半）、II期（13世紀後半～14世紀代）にかけて渋谷館址での早川領主を棟梁とした集団に属すると推定される中世遺構群が発見されている。	13c前半～14c代	1
早川城跡	早川	城跡	台地上	早川城のトレンチ調査から堀切や土塁などの城郭遺構を確認。	中世後半	2
五所神社遺跡	早川字西山1627-2外	集落跡	台地上	縄文時代早期、平安時代の遺構が検出され、中世前半の溝や地下式坑が発見されている。	13c後半～14c代	3
早川城跡	早川	城跡・墓跡	台地上	斜面部の調査で堀跡や板碑が出土し墓跡の痕跡も窺える。	中世後半	4
早川城跡	早川字清水	城跡	台地上	縄文時代～中近世の複合遺跡。	中世	5
びわみ堂遺跡	深谷字落合	墳墓	台地上	板碑が出土し市内最大の点数を占める。	中世	6
長泉寺遺跡	早川字祖師谷	墳墓	台地上	蔵骨器が出土し、中世渋谷氏の墳墓と想定されている。	中世	7
早川天神森遺跡	早川字清水896-1	-	台地上	早川城の存続期間の後半段階に城城南東側に近接して形成された遺構群を検出。	14c後半～15c前半	8
吉岡遺跡群B区	吉岡887他	包蔵地	台地上	古代～中世にかけて、掘立柱建物や溝状遺構などが検出されている。	中世	9
早川城山遺跡（早川城跡）A地点	早川城山三丁目4番1	集落跡・散布地	台地上	土地区画と考えられる中世の溝や8～9世紀の集落を発見。	16c代	10
早川城山遺跡（早川城跡）B地点	早川城山三丁目4番1	城跡・集落跡	台地上	早川城址に関連する土塁や堀切が確認され、中央との結び付きが想定される8～9世紀代の集落が検出されている。	中世後半	11

参考文献

秦野市

- 安藤文一 1986『東田原中丸遺跡』秦野の文化財第22集 秦野市教育委員会
- 穴戸信博・谷口肇 1991『東田原遺跡Ⅱ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 大上周三・大塚健一・飯塚美保 1997『下大塚遺跡』かながわ考古学財団調査報告24
- 村上吉正・吉垣俊一・谷口肇 1997『中里遺跡 (No.31) 西大竹上原遺跡 (No.32)』かながわ考古学財団調査報告30
- 木村吉行・柏木善治 1998『不弓引遺跡 (No.21・22) 鶴巻大椿遺跡 (No.23) 鶴巻上ノ座遺跡 (No.25上) 北矢名南蛇久保遺跡 (No.25下) 北矢名矢野遺跡 (No.26)』かながわ考古学財団調査報告32
- 木村吉行・柏木善治 1998『不弓引遺跡 (No.21・22) 鶴巻大椿遺跡 (No.23) 鶴巻上ノ座遺跡 (No.25上) 北矢名南蛇久保遺跡 (No.25下) 北矢名矢野遺跡 (No.26)』かながわ考古学財団調査報告32
- 木村吉行・柏木善治 1998『不弓引遺跡 (No.21・22) 鶴巻大椿遺跡 (No.23) 鶴巻上ノ座遺跡 (No.25上) 北矢名南蛇久保遺跡 (No.25下) 北矢名矢野遺跡 (No.26)』かながわ考古学財団調査報告32
- 木村吉行・柏木善治 1998『不弓引遺跡 (No.21・22) 鶴巻大椿遺跡 (No.23) 鶴巻上ノ座遺跡 (No.25上) 北矢名南蛇久保遺跡 (No.25下) 北矢名矢野遺跡 (No.26)』かながわ考古学財団調査報告32
- 大塚健一・長谷川厚・西川修一・井辺一徳・西中川駿・吉野文彦ほか 1999『鉢ノ木遺跡 (No.27)』かながわ考古学財団調査報告54
- 堀出俊浩 2004『秦野の遺跡1 東田原中丸遺跡2000-03調査』秦野市文化財調査報告書8 秦野市教育委員会生涯学習課 (文化財班)
- 市川正史・大塚健一 2005『鶴巻南遺跡群』かながわ考古学財団調査報告189
- 堀出俊浩 2009『秦野の遺跡2 東田原中丸遺跡 第三次調査』秦野市文化財調査報告書9 秦野市教育委員会生涯学習課 (文化財班)
- 脇幸生・宮坂淳一 2011『鶴巻南遺跡群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告273
- 千田利明・渡邊大士 2012『神奈川県秦野市島崎遺跡—秦野市鶴巻南一丁目1617番1号における埋蔵文化財発掘調査報告書—』有限会社ブラフマン
- 坪田弘子・林原利明ほか 2013『大塚院遺跡200202地点』秦野市教育委員会
- 横山諒人・安福さとし 2014『秦野の遺跡2 東田原中丸遺跡 第四次調査』秦野市文化財調査報告書14 秦野市教育委員会生涯学習課文化財班
- 迫和幸・石川真紀ほか 2014『水神遺跡』『今泉荒井遺跡群 今泉上河原遺跡 水神遺跡 今泉荒井遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 迫和幸・石川真紀ほか 2014『今泉荒井遺跡群 今泉上河原遺跡 水神遺跡 今泉荒井遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所

厚木市

- 日野一郎・江藤昭 1976『小野若宮遺跡』厚木市小野若宮遺跡調査団
- 秘書部市史編さん室 1985『厚木の埋蔵古銭』厚木市史資料叢書1 厚木市役所
- 江藤昭 1986『林南遺跡—地下式土壌の調査—』林南遺跡調査団
- 日野一郎・北川吉明・境雅仁・香村純一 1993『及川柳遺跡、及川宮ノ下遺跡調査報告書』国道412号線遺跡調査団
- 田代徳夫・磯 実 1994『曾野No.1遺跡発掘調査概要報告書』東国歴史考古学研究所調査研究報告2集 東国歴史考古学研究所
- 飯田孝・黒沼博之・富永樹之・平本元一・山田不二郎 1996『東町2番一市街地再開発事業に伴う旧厚木宿の埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)』第2分冊 厚木市教育委員会
- 中山豊 1996『戸室茅林遺跡第1・2地点発掘調査報告書』戸室茅林遺跡発掘調査団
- 中山豊 1996『戸室茅林遺跡第1・2地点発掘調査報告書』戸室茅林遺跡発掘調査団
- 林原利明・宮井香・椎名和生・奥村明子・金子浩昌 1998『神奈川県厚木市愛甲宿遺跡第2地区』愛甲宿遺跡第2地区発掘調査団
- 小山裕之・迫和幸 1998『下沢駒飼遺跡発掘調査報告書』下沢駒飼遺跡発掘調査団
- 相原俊夫・小山裕之 1998『小野公所遺跡第2地点発掘調査報告書』小野公所遺跡発掘調査団
- 瀬田哲夫 1998『神奈川県厚木市旭町川田前遺跡』中世遺跡研究会調査報告2 厚木市旭町川田前遺跡発掘調査団
- 戸田哲也ほか 1998『神奈川県厚木市御屋敷遺跡第1地点発掘調査報告書』愛甲御屋敷遺跡発掘調査団
- 西川修一・天野賢一・寺村光明・立花実・柏木善治・奥田尚・吉川昌伸・上田弥生 1998『御屋敷遺跡第3地点 (No.1) 第4地点 (No.2) 第5地点 (No.44) 高森一ノ崎遺跡 (No.37) 高森・窪谷遺跡 (No.3)』かながわ考古学財団調査報告33
- 西川修一・天野賢一・寺村光明・立花実・柏木善治・奥田尚・吉川昌伸・上田弥生 1998『御屋敷遺跡第3地点 (No.1) 第4地点 (No.2) 第5地点 (No.44) 高森一ノ崎遺跡 (No.37) 高森・窪谷遺跡 (No.3)』かながわ考古学財団調査報告33
- 西川修一・天野賢一・寺村光明・立花実・柏木善治・奥田尚・吉川昌伸・上田弥生 1998『御屋敷遺跡第3地点 (No.1) 第4地点 (No.2) 第5地点 (No.44) 高森一ノ崎遺跡 (No.37) 高森・窪谷遺跡 (No.3)』かながわ考古学財団調査報告33
- 齋木秀雄・押木弘巳 1999『神奈川県厚木市小野並木遺跡—龍潭山開修寺境内における埋蔵文化財発掘調査報告書—』鎌倉遺跡調査会調査報告第11集 厚木市小野並木遺跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会
- 松山敬一郎ほか 1999『神奈川県厚木市 曾野No.1遺跡』曾野No.1遺跡発掘調査報告書・東国歴史考古学研究所
- 迫和幸・小山裕之・中山豊 2000『思名神原遺跡発掘調査報告書』思名神原遺跡発掘調査団

- 20 迫和幸・中村哲也 2005『宮の里遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 21 横山英史・加藤久美 2007『中依知道跡群（宮ノ越・宮ノ前道跡 桜樹古墳群 中林横穴墓群）』かながわ考古学財団調査報告206
- 22 渡辺清史ほか 2010『城跡道跡』かながわ考古学財団調査報告250
- 23 小日置晴展・辻本彰 2011『神奈川県厚木市戸室ヶ岡遺跡第2地点発掘調査報告書-厚木市戸室三丁目869番3外における住宅地建設に伴う発掘調査-』国際文化財株式会社
- 24 鯉沼義紀・降矢順子 2012『神奈川県厚木市林北道跡第3地点発掘調査報告書』鎌倉道跡調査会調査報告第70集 有限会社鎌倉道跡調査会
- 25 戸羽康一・長澤保崇 2015『戸田小柳道跡第2地点』かながわ考古学財団調査報告310

大和市

- 1 相田薫・曾根博明 1980『下ノ原横穴墓 公所横穴群』大和市文化財調査報告書第4集 大和市教育委員会
- 2 滝澤亮 1988『深見城址』大和市文化財調査報告書第30集 大和市教育委員会
- 3 河合英夫・麻生順司ほか 1988『台道跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 4 滝澤亮・小池聡・細井佳浩・有馬多恵子・小塚知之 1994『上和田城山道跡第4次調査』大和市上和田城山道跡調査会
- 5 小池聡・山田仁和 1998『下鶴岡城山（伝山中修理助貞盛・大和市No.181道跡）』大和市文化財調査報告書第66集 大和市教育委員会
- 6 滝澤亮・小池聡ほか 1998『神明若宮地区内道跡C地区』『神明若宮地区内道跡』神明若宮地区内道跡発掘調査団
- 7 小山裕之 1999『大和市No.189道跡発掘調査報告書』大和市No.189道跡発掘調査団
- 8 戸田哲也・高橋勝広・小笠原清 2001『大和深見城跡発掘調査報告書』大和市教育委員会
- 9 麻生順司 2008『上草柳道跡群大和配水池内道跡1発掘調査報告書』大和市No.199道跡発掘調査団
- 10 佐々木竜郎・金澤耕平 2014『中ノ原道跡G地点発掘調査報告書』大和市渋谷（南部地区）土地面整理事業地内道跡Ⅲ 玉川文化財研究所

伊勢原市

- 1 高橋勝広 1988『下榎屋・沼目地区埋蔵文化財範囲確認調査報告書』伊勢原市教育委員会
- 2 高杉博章 1996『伊勢原上粕屋団地内道跡』伊勢原上粕屋団地内道跡調査団
- 3 西川修一・天野賢一・寺村光明・立花実・柏木善治・奥田尚・吉川昌伸・上田弥生 1998『御屋敷道跡第3地点（No.1）第4地点（No.2）第5地点（No.44）高森一ノ崎道跡（No.37）高森・窪谷道跡（No.3）』かながわ考古学財団調査報告33
- 4 矢野信悟・宮坂淳一 1998『東富岡・杉戸道跡（No.38）東富岡・北三間道跡（No.4）上粕屋・三本松道跡（No.7）上粕屋・川上西道跡（No.8）』かながわ考古学財団調査報告34
- 5 矢野信悟・宮坂淳一 1998『東富岡・杉戸道跡（No.38）東富岡・北三間道跡（No.4）上粕屋・三本松道跡（No.7）上粕屋・川上西道跡（No.8）』かながわ考古学財団調査報告34
- 6 降矢順子・宮本秀雄 1999『神奈川県伊勢原市石田・羽黒道跡Ⅲ』鎌倉道跡調査会調査報告第9集 伊勢原市石田・羽黒道跡発掘調査団・鎌倉道跡調査会
- 7 河合英夫・諏訪問伸・高橋勝広・小山裕之・北平朗久・中山豊・香川達郎・館弘子 1999『成瀬第二地区道跡群高森地区発掘調査報告書』成瀬第二地区道跡調査会
- 8 戸田哲也・福田良・中山豊 1999『沼目・坂戸道跡ⅡⅡ地点発掘調査報告書』沼目・坂戸（Ⅱ）道跡発掘調査団
- 9 矢野信悟・宮坂淳一・三瓶裕司 1999『上粕屋・上尾崎道跡（No.10）上粕屋・ノ引北道跡（No.11）上粕屋・ノ引西道跡（No.12東）』かながわ考古学財団調査報告56
- 10 矢野信悟・宮坂淳一・三瓶裕司 1999『上粕屋・上尾崎道跡（No.10）上粕屋・ノ引北道跡（No.11）上粕屋・ノ引西道跡（No.12東）』かながわ考古学財団調査報告56
- 11 木村吉行・柏木善治 1999『神戸・上宿道跡（No.15）』かながわ考古学財団調査報告57
- 12 高橋勝広・中山豊・香川達郎 1999『東大竹下原道跡発掘調査報告書』東大竹下原道跡発掘調査団
- 13 天野賢一・西川修一・堀田孝博 1999『上粕屋・小山道跡（No.9・38）三ノ宮・下御領原道跡（No.12西）上粕屋・ノ引東道跡（No.40）上粕屋・ノ引南道跡（No.41）』かながわ考古学財団調査報告52
- 14 天野賢一・西川修一・堀田孝博 1999『上粕屋・小山道跡（No.9・38）三ノ宮・下御領原道跡（No.12西）上粕屋・ノ引東道跡（No.40）上粕屋・ノ引南道跡（No.41）』かながわ考古学財団調査報告52
- 15 降矢順子・宮本秀雄 2000『神奈川県伊勢原市石田・源太夫IV道跡』鎌倉道跡調査会調査報告19集 伊勢原市石田・羽黒道跡発掘調査団・鎌倉道跡調査会
- 16 木村吉行・柏木善治 2000『坪ノ内・貝ヶ窪道跡（No.18・19・43）笠窪・谷戸道跡（No.20・42）』かながわ考古学財団調査報告67
- 17 木村吉行・柏木善治 2000『坪ノ内・貝ヶ窪道跡（No.18・19・43）笠窪・谷戸道跡（No.20・42）』かながわ考古学財団調査報告67
- 18 矢野信悟・宮坂淳一・松田光太郎・三瓶裕司 2000『三ノ宮・下谷戸道跡（No.14）Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告76
- 19 井出智之・諏訪問伸・立花実 2001『下榎屋・丸山道跡』『いせはらの道跡Ⅰ』伊勢原市文化財調査報告書第19集 伊勢原市教育委員会
- 20 井出智之・諏訪問伸・立花実 2001『下榎屋・上町並道跡』『いせはらの道跡Ⅰ』伊勢原市文化財調査報告書第19集 伊勢原市教育委員会
- 21 河合英夫・諏訪問伸・中山豊・北平朗久・香川達郎・前川昭彦 2001『成瀬第二地区道跡群下榎屋C地区第2・3地点発掘調査報告書』成瀬第二地区道跡調査会

- 22 恩田勇・井辺一徳 2001『田中・万代遺跡』かながわ考古学財団調査報告103
- 23 河合英夫・中山豊・北平朗久・香川達郎・館弘子・前川昭彦・高橋勝広・石丸照 2002『成瀬第二地区遺跡群下層屋C地区第1地点・下層屋D地区・丸山E地区発掘調査報告書』成瀬第二地区遺跡調査会
- 24 河合英夫・中山豊・北平朗久・香川達郎・館弘子・前川昭彦・高橋勝広・石丸照 2002『成瀬第二地区遺跡群下層屋C地区第1地点・下層屋D地区・丸山E地区発掘調査報告書』成瀬第二地区遺跡調査会
- 25 河合英夫・中山豊・北平朗久・香川達郎・館弘子・前川昭彦・高橋勝広・石丸照 2002『成瀬第二地区遺跡群下層屋C地区第1地点・下層屋D地区・丸山E地区発掘調査報告書』成瀬第二地区遺跡調査会
- 26 瀬田哲夫 2002『神奈川県勢原市牛塚下原遺跡発掘調査報告書』鎌倉遺跡調査会調査報告26集 有限会社鎌倉遺跡調査会
- 27 伊東甚吉 2004『東大竹下原遺跡第2地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 28 渡辺務・吉岡秀範 2005『稲荷久保遺跡第3地点』日本家業史研究所第67冊 関日本家業史研究所
- 29 香川達郎 2005『坂戸宮ノ前遺跡第II地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 30 河合英夫・北平朗久・石川真紀・伊東甚吉 2005『石田・筆遺跡第IV地点発掘調査報告書』平成16年度愛甲石田駅南口駅前広場整備工事に伴う発掘調査一』玉川文化財研究所
- 31 作田一耕 2005『神奈川県伊勢原市岡崎・天神下遺跡第V地点発掘調査報告書』大成エンジニアリング株式会社
- 32 岩崎洋・白崎智隆 2007『池端・金山遺跡-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』埋蔵文化財発掘調査支援協同組合
- 33 上本道二・吉岡秀範 2007『坂戸・八雲遺跡第3地点』日本家業史研究所報告第70冊 関日本家業史研究所
- 34 香川達郎・北平朗久 2009『丸山遺跡第IV地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 35 北平朗久・香川達郎 2010『丸山遺跡第5地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 36 水原順敏・吉岡秀範 2010『西富岡・向畑遺跡第2地点』日本家業史研究所報告第73冊 関日本家業史研究所
- 37 新井潔・渡辺務 2010『池端・金山遺跡第2地点』日本家業史研究所報告第74冊 関日本家業史研究所
- 38 渡辺外・大塚健一・能之勉・林雅恵 2010『下層屋・丸山遺跡(第6地点)』かながわ考古学財団調査報告260
- 39 小西絵美・近藤匡樹・高橋香 2012『池端・坂戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告281
- 40 宗像義輝・植山英史・宮坂淳一 2013『東富岡・西之窪遺跡 東富岡・南三間遺跡 東富岡・北三間遺跡第2地点』かながわ考古学財団調査報告290
- 41 宗像義輝・植山英史・宮坂淳一 2013『東富岡・西之窪遺跡 東富岡・南三間遺跡 東富岡・北三間遺跡第2地点』かながわ考古学財団調査報告290
- 42 宗像義輝・植山英史・宮坂淳一 2013『東富岡・西之窪遺跡 東富岡・南三間遺跡 東富岡・北三間遺跡第2地点』かながわ考古学財団調査報告290
- 43 脇幸生・菊川泉 2013『上粕屋・香々久保遺跡 上粕屋・一ノ郷上遺跡』かながわ考古学財団調査報告291
- 44 天野賢一・宮坂淳一 2013『上粕屋・石倉中遺跡』かながわ考古学財団調査報告294
- 45 新開基史 2013『年報19 平成23年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 46 木村吉行 2013『年報19 平成23年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 47 新開基史 2013『年報20 平成24年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 48 木村吉行 2013『年報20 平成24年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 49 井辺一徳 2013『年報20 平成24年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 50 小宮山友章・諸星幸代子・青木雄大・牧野麻子・丸吉繁一 2013『浄業寺跡』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書17 大成エンジニアリング株式会社
- 51 諏訪岡直子・新開基史・新井保和・菊川泉・岡隆・井関文明・宮坂淳一 2014『西富岡・向畑遺跡I』かながわ考古学財団調査報告298
- 52 木村吉行 2014『年報21 平成25年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 53 新開基史 2014『年報21 平成25年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 54 新井保和 2014『年報21 平成25年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 55 井辺一徳 2014『年報21 平成25年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 56 井辺一徳 2014『年報21 平成25年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 57 井辺一徳 2014『年報21 平成25年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 58 麻生順司・香川達郎・坪田弘子・矢野信悟 2014『神成松遺跡第4地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書20 株式会社玉川文化財研究所
- 59 野尻義敬・相川薫・山本典幸・金井慎司ほか 2014『神成松遺跡第5地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書23 株式会社バスコ
- 60 矢野信悟・大坪宜雄・磯井三子・田村良照 2014『神成松遺跡第3地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書25 有限会社吾妻考古学研究所
- 61 竹内順一・園村雄敏・山本典幸・中尾七重・矢野信悟 2015『上粕屋・秋山上遺跡』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書29 株式会社バスコ
- 62 香川達郎・小林義典・丸吉繁一・金子浩昌・斎藤武士 2015『神成松遺跡第7地点』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書30 株式会社玉川文化財研究所
- 63 松葉崇 2016『年報22 平成26年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 64 菊川英政 2016『年報22 平成26年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 65 新開基史 2016『年報22 平成26年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 66 木村吉行 2016『年報22 平成26年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 67 村松篤 2016『年報22 平成26年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 68 野坂知広 2016『年報22 平成26年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 69 野坂知広 2016『年報22 平成26年度』公益財団法人かながわ考古学財団

海老名市

- 1 赤星直忠 1980『海老名市上郷中世墓群調査概報 埋骨場所と造立板碑との関係 海老名市大谷中世大葬墓』神奈川県埋蔵文化財調査報告19 神奈川県教育委員会
- 2 星野達雄 1986『海老名本郷 (V)』富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
- 3 星野達雄ほか 1989『海老名本郷 (VII)』富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
- 4 小出善治ほか 1992『海老名本郷』富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
- 5 萩上由美子・小林克利 1994『神奈川県海老名市本郷中谷津遺跡埋蔵文化財調査報告書』本郷中谷津遺跡調査団
- 6 後藤喜八郎・大坪宜雄・小林克利・守屋照代 1998『海老名本郷 (XV)』富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
- 7 齋木秀雄・瀬田哲夫・佐藤仁彦 1998『神奈川県海老名市四大縄遺跡第2分冊』鎌倉遺跡調査会 (中世遺跡研究会) 調査報告3 海老名市 No.47遺跡発掘調査団
- 8 北原實徳 1999『神奈川県海老名市国分尼寺北方遺跡-第20次調査-』国分尼寺北方遺跡第20次調査団
- 9 伊東秀吉・大坪宜雄・小林克利・守屋照代 2000『海老名本郷 (XVII)』富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団
- 10 秋山重美・三ツ橋正夫 2002『国分尼寺北方遺跡第25次調査発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 11 相原俊夫・河合英夫・秋山重美・北平朗久 2003『大谷市場遺跡発掘調査報告書』大谷市場遺跡発掘調査団
- 12 千田利明 2007『門沢橋跡遺跡-市道10号線付け替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 (その2) 報告書』有限会社ブラフマン
- 13 滝澤亮・小池聡・菊池良之 2007『神奈川県海老名市本郷中谷津遺跡第14次調査』株式会社盤古堂
- 14 小林晴生・石川真紀・坪田弘子・中山豊 2007『望地遺跡第8次調査発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 15 高杉博幸・柳川清彦 2008『中野桜野遺跡発掘調査報告書』株式会社アーク・フィールドワークシステム
- 16 櫻井真貴・有馬多恵子 2009『跡堀遺跡1』かながわ考古学財団調査報告237
- 17 阿部友寿・井関文明ほか 2009『中野桜野遺跡』かながわ考古学財団調査報告231
- 18 林山英史・櫻井真貴 2011『跡堀遺跡II』かながわ考古学財団調査報告277
- 19 浅賀貴広 2011『神奈川県海老名市上浜田遺跡第6次調査』株式会社盤古堂
- 20 齋藤真一・高橋香・宮坂淳一・三瓶裕司・吉田映子・能芝勉・岡稔 2011『社家宇治山遺跡』かながわ考古学財団調査報告264
- 21 渡辺清史・藤本博康・丸吉繁一 2013『河原口坊中遺跡第5次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書14 国際文化財株式会社
- 22 川嶋美佳子 2014『年報21 平成25年度』公益財団法人かながわ考古学財団
- 23 阿部友寿・高橋香・大塚健一・吉田政行・三橋勝・益谷正信・鈴木次郎 2014『河原口坊中遺跡第4次調査』かながわ考古学財団調査報告300
- 24 飯塚英保・高橋香・松葉崇・宮坂淳一・加藤久美 2014『河原口坊中遺跡第1次調査』かながわ考古学財団調査報告204
- 25 市川正史・渡辺務・丸吉繁一 2014『河原口坊中遺跡第5次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書24 株式会社アーク・フィールドワークシステム
- 26 池田治・宮井香・後藤喜八郎・飯塚英保・加藤久美・鈴木次郎・柏木善治 2015『河原口坊中遺跡第2次調査』かながわ考古学財団調査報告307

座間市

- 1 小山裕之・佐々木竜郎・中山豊 2000『米軍キャンプ座間内遺跡発掘調査報告書』米軍キャンプ座間内遺跡発掘調査団
- 2 松田光太郎・谷正秋・中田英・吉田政行 2004『山ノ神遺跡・鷹見塚遺跡』かながわ考古学財団調査報告171

綾瀬市

- 1 國平健三・市川正史 1988『宮久保遺跡II』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告15 神奈川県埋蔵文化財センター
- 2 綾瀬市教育委員会 1990『早川城I』早川城跡調査会
- 3 比留川聡・小滝勉・岩田明広 1991『五所神社遺跡発掘調査報告書-市道518号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-』綾瀬市教育委員会・五所神社遺跡発掘調査団
- 4 金子浩昌・井上洋一 1993『早川城III』綾瀬市・早川城跡調査会
- 5 石丸照・金子浩彦・下山裕久・井上洋一・小滝勉 1997『早川城跡発掘調査報告書』早川城跡調査会
- 6 石丸照・金子浩彦・下山裕久・井上洋一・小滝勉 1997『早川城跡発掘調査報告書』早川城跡調査会
- 7 石丸照・金子浩彦・下山裕久・井上洋一・小滝勉 1997『早川城跡発掘調査報告書』早川城跡調査会
- 8 中村哲也 2002『早川天神森遺跡発掘調査報告書』早川城山地区遺跡群発掘調査団
- 9 吉田政行・阿部友寿・岩田直樹・木村吉行 2003『吉岡遺跡群X』かながわ考古学財団調査報告153
- 10 矢島國雄・小滝勉・藤波啓容・中村真理 2011『早川城山遺跡 (早川城跡)』綾瀬市埋蔵文化財調査報告8 綾瀬市教育委員会
- 11 矢島國雄・小滝勉・藤波啓容・中村真理 2011『早川城山遺跡 (早川城跡)』綾瀬市埋蔵文化財調査報告8 綾瀬市教育委員会

近世道状遺構の集成(1)

近世研究プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトチームでは、今回から道状遺構の集成を行う。

近世の神奈川には、江戸と京都を結ぶ東海道のほか、矢倉沢往還、中原街道、甲州街道、八王子道、大山道、鎌倉道、根府川道など多くの道路が存在した。

遺跡で発見される道路の多くは当時の人々が日常的に利用していたと思われる生活道路であるが、東海道や大山道の一部と考えられる遺構が発見されるなど、道状遺構の調査事例は年々増えてきている。道状遺構は、溝状の掘り込みと硬化面からなるものが主体を占めているが、規模は様々で、中には側溝と思われる溝を伴うものや石を用いたものが存在する。また、特殊な構築方法が認められる場合もある。

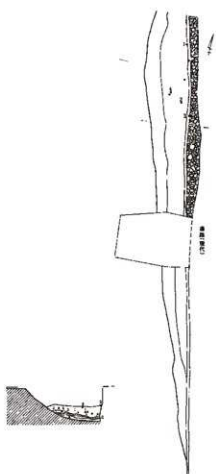
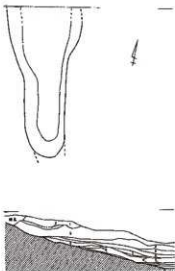
発掘調査によって発見されるのは道路のほんの一部に過ぎず、そこから得られる情報は限られている。また、遺物がほとんど出土せず、時期の特定が困難な事例も多いが、これまでに報告されている道状遺構を集成し、規模や構築方法等について考えていきたい。

今年度は宮ヶ瀬遺跡群を取り上げることにする。

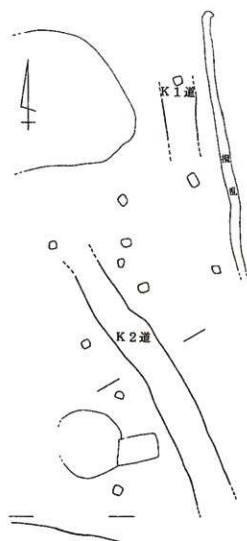
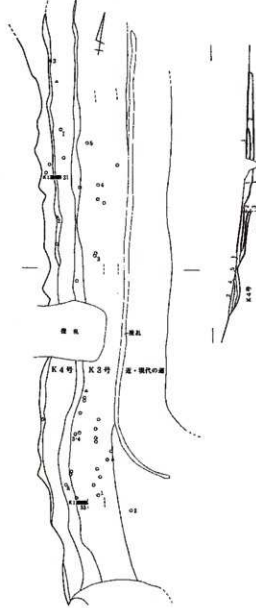
凡 例

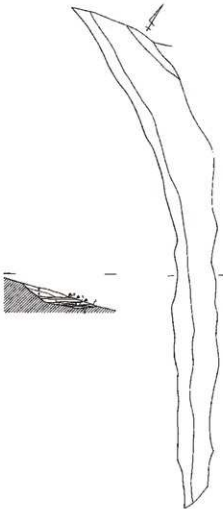
- ・遺構名は報告書の記載に基づく。
- ・縮尺は平面図がスペースに収まるような大きさに適宜変えているため、図ごとに示した。
- ・断面図は報告書に複数記載されている例もあるが、1遺構につき1ヶ所のみを記載することにした。

資料 No.	遺跡名	遺構名	文献名
1	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 3) 遺跡	K 1号道状遺構	1996年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ』かながわ考古学財団調査報告9
2	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 5) 遺跡	K 1号道状遺構	1996年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅶ』かながわ考古学財団調査報告10
3	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7) 遺跡	K 2号道状遺構	1997年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅷ』かながわ考古学財団調査報告17
4	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7) 遺跡	K 3号道状遺構	1997年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅸ』かながわ考古学財団調査報告17
5	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 6) 遺跡	K 1号道状遺構	1995年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告4
6	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 6) 遺跡	K 2号道状遺構	1995年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告4
7	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 6) 遺跡	K 3号道状遺構	1995年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅴ』かながわ考古学財団調査報告4
8	宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷 (No. 8) 遺跡	K 1号道状遺構	1997年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅢ』かながわ考古学財団調査報告19
9	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No. 10) 遺跡	K 1号道状遺構	1997年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅣ』かながわ考古学財団調査報告15
10	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No. 10) 遺跡	K 2号道状遺構	1997年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅤ』かながわ考古学財団調査報告15
11	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No. 9) 遺跡	K 5号道状遺構	1999年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅥ』かながわ考古学財団調査報告51
12	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No. 9) 遺跡	K 6号道状遺構	1999年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅦ』かながわ考古学財団調査報告51
13	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No. 9) 遺跡	K 7号道状遺構	1999年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅧ』かながわ考古学財団調査報告51
14	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No. 9) 遺跡	K 8号道状遺構	1999年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅧ』かながわ考古学財団調査報告51
15	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No. 9) 遺跡	K 9・10号道状遺構	1999年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅧ』かながわ考古学財団調査報告51
16	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No. 9) 遺跡	K 11号道状遺構	1999年『宮ヶ瀬遺跡群ⅩⅧ』かながわ考古学財団調査報告51
17	宮ヶ瀬遺跡群中原 (No. 13c) 遺跡	K 1号道状遺構	1997年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅹ』かながわ考古学財団調査報告16
18	宮ヶ瀬遺跡群中原 (No. 13c) 遺跡	K 2号道状遺構	1997年『宮ヶ瀬遺跡群Ⅹ』かながわ考古学財団調査報告16

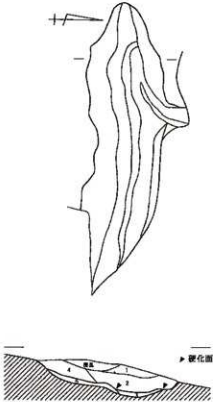
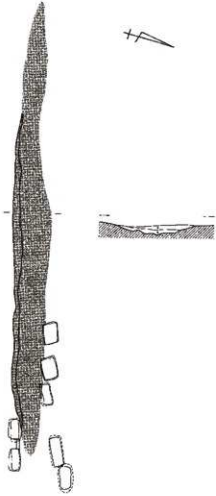
資料№	1	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (№.3)	資料№	2	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (№.5)
所在地		清川村宮ヶ瀬		所在地		清川村宮ヶ瀬	
遺構名		K 1 号道状遺構		遺構名		K 1 号道状遺構	
道 幅		1.3m		道 幅		1.0m	
年 代				年 代			
備 考		溝状に掘り込まれた道、硬化面 4 面、17c ～19c の遺物出土		備 考		溝状に掘り込まれた道、複数の硬化面、 最終硬化面と考えられる層に宝永スコ リアを含む	
							
縮 尺		(平面図) 1/200、(断面図) 1/100		縮 尺		(平面図) 1/80、(断面図) 1/80	

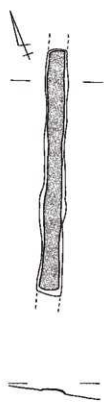
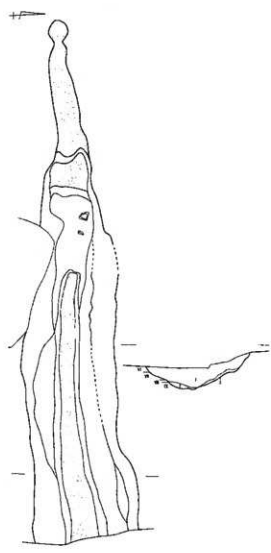
近世道状遺構の集成(1)

資料No.	3	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)	資料No.	4	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 7)
所在地	清川村宮ヶ瀬			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K 2 号道状遺構			遺構名	K 3 号道状遺構		
道 幅	0.8～1.2m			道 幅	2.1～2.9m		
年 代				年 代			
備 考	南側に位置するK 3 号道状遺構と接続する可能性あり			備 考	K 3 号道状遺構はK 4 号道状遺構埋没後に構築されている (4 号は中世)、硬化面 4 面、17c～19c の遺物出土		
							
縮 尺	(平面図) 1/120、(断面図) 1/120			縮 尺	(平面図) 1/200、(断面図) 1/100		

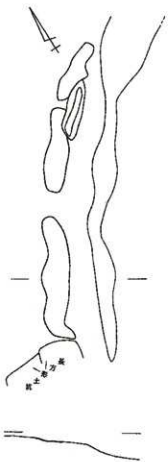
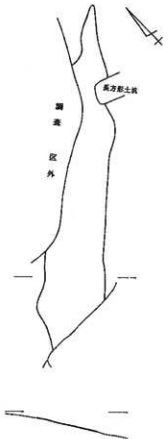
資料No.	5	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 6)	資料No.	6	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (No. 6)
所在地		清川村宮ヶ瀬		所在地		清川村宮ヶ瀬	
遺構名		K 1 号道状遺構		遺構名		K 2 号道状遺構	
道 幅		1.4m以上		道 幅		0.6~0.8m	
年 代		18c 前半以前には廃絶		年 代			
備 考		溝状に掘り込まれた道、K 3 号道状遺構と繋がり K 2 号道状遺構と接続していたと考えられる		備 考		溝状に掘り込まれた道、遺構周辺から 18c 後半~19c の遺物出土	
							
縮 尺		(平面図) 1/200、(断面図) 1/100		縮 尺		(平面図) 1/120、(断面図) 1/60	

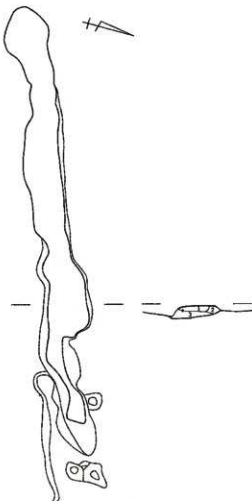
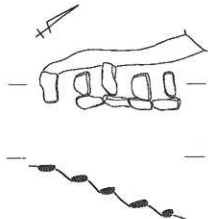
近世道状遺構の集成(1)

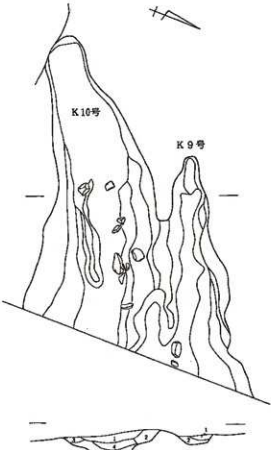
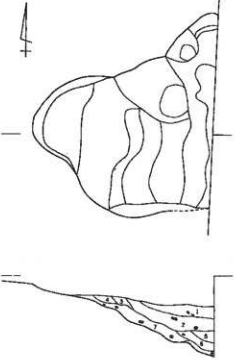
資料№	7	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群馬場 (№6)	資料№	8	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群 表の屋敷 (№8)
所在地		清川村宮ヶ瀬		所在地		清川村宮ヶ瀬	
遺構名		K 3号道状遺構		遺構名		K 1号道状遺構	
道 幅		2.4m以上		道 幅		2.2m以上	
年 代		18c 前半以前には廃絶		年 代			
備 考		溝状に掘り込まれた道、硬化面2面		備 考		溝状に掘り込まれた道	
							
縮 尺		(平面図) 1/120、(断面図) 1/60		縮 尺		(平面図) 1/200、(断面図) 1/100	

資料№	9	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群北原 (№10)	資料№	10	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群北原 (№10)
所在地		清川村宮ヶ瀬		所在地		清川村宮ヶ瀬	
遺構名		K 1 号道状遺構		遺構名		K 2 号道状遺構	
道 幅		0.3～0.36m		道 幅		0.3～0.84m	
年 代				年 代			
備 考		硬化部分が周囲より5～10cm盛り上がっている		備 考		溝状に掘り込まれた道	
							
縮 尺		(平面図) 1/80、(断面図) 1/80		縮 尺		(平面図) 1/120、(断面図) 1/120	

近世道状遺構の集成(1)

資料No.	11	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9)	資料No.	12	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9)
所在地		清川村宮ヶ瀬		所在地		清川村宮ヶ瀬	
遺構名		K 5 号道状遺構		遺構名		K 6 号道状遺構	
道 幅		0.2~0.45m		道 幅		0.25~0.9m	
年 代				年 代			
備 考		地山のロームが硬化、硬化面に接する溝あり		備 考		地山のロームが硬化、K 5 号道状遺構と一連の道と考えられる	
							
縮 尺		(平面図) 1/60、(断面図) 1/60		縮 尺		(平面図) 1/60、(断面図) 1/60	

資料No.	13	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9)	資料No.	14	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9)
所在地	清川村宮ヶ瀬			所在地	清川村宮ヶ瀬		
遺構名	K 7号道状遺構			遺構名	K 8号道状遺構		
道 幅	0.3～0.75m			道 幅	0.5m前後		
年 代				年 代			
備 考	溝状の掘り込みにローム混じりの土が盛られている			備 考	側石を伴う5段の石段、一帯から19c中半代の遺物出土		
							
縮 尺	(平面図) 1/60、(断面図) 1/60			縮 尺	(平面図) 1/60、(断面図) 1/60		

資料No.	15	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9)	資料No.	16	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9)
所在地		清川村宮ヶ瀬		所在地		清川村宮ヶ瀬	
遺構名		K 9・10号道状遺構		遺構名		K11号道状遺構	
道 幅		(9号) 1.5m、(10号) 0.65~2.3m		道 幅		1.2~3.0m	
年 代				年 代		18c 前半以降	
備 考		9号・10号とも溝状に堀り込まれた道、9号は石を据えていた痕跡が認められており石段の可能性が考えられる、10号は側石を伴う石段、17c 代の遺物出土		備 考		溝状に堀り込まれた道、石像仏天にお参りするための道	
							
縮 尺		(平面図) 1/60、(断面図) 1/60		縮 尺		(平面図) 1/60、(断面図) 1/60	

資料№	17	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群中原 (No.13C)	資料№	18	遺跡名	宮ヶ瀬遺跡群中原 (No.13C)
所在地		清川村宮ヶ瀬		所在地		清川村宮ヶ瀬	
遺構名		K 1 号道状遺構		遺構名		K 2 号道状遺構	
道 幅		1 m前後		道 幅		1.0～1.5m	
年 代				年 代			
備 考		掘り込み複数の硬化面、K 2 号道状遺構と直角に交差		備 考			

K 2 号道状遺構

K 1 号道状遺構

縮 尺	(平面図) 1/250、(断面図：資料№17のみ) 1/80
-----	--------------------------------

研究紀要21

かながわの考古学

発行日 2016(平成28)年3月15日

発行 公益財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市中区中村町3-191-1

TEL : 045-252-8689 FAX : 045-261-8162

e-mail : kaf@kaf.or.jp

印刷 野崎印刷紙器株式会社